
要塞島桜花

豎川杼緯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

要塞島桜花

【Nコード】

N6333R

【作者名】

豎川杼緯

【あらすじ】

要塞島四島をつなぐ大型の巡回船に、濃紺の着流しに同色の地下足袋を履いた若い男が乗っていた。その男は武器とあるものを手に入れるために要塞島の中の一つ、桜花へと向かっているところだった。

（「要塞島」から「要塞島桜花」へタイトルを変更しました。2011/07/08）

1話 要塞島桜花

なだらかに進む大型船の甲板で一人の少年が空を見上げた。

青い空にぽかりぽかりと浮かぶ白い雲。まさに物語が綴る典型的な晴れた空が広がっている。

こんなにもいい天気恵まれていながら少年の面には疲弊おもてが窺えた。

濃紺の着流しを纏って同色の地下足袋を履いた少年は、風に遊ばせていた肩にかかるくらい長さの黒髪を手で押さえるとざっと首をめぐらせて大陸へと目をやった。

この大陸を竜という。形が竜に似ていることからそう呼ばれ始めた、今では世界で唯一の大陸だった。

少年が乗っているのは、この大陸を守るために東西南北に配置された要塞島を巡回する大型船だった。

要塞島で生活する人々のために食料や生活物資を運び、そして島を移動する人間をも運んでいる。

そんな少年のほかの乗客が声をかける。

「おい坊主。手ぶらか？ 刀はどうした」

ここでは身を守るための武器は必須だ。もちろん刀以外にも武器はいろいろとあるが、ほとんどの者が刀は基本として身に帯びていることが普通だった。それなのに少年には目に見える範囲ではなにも持っていないような気配はない。

少年は声をかけてきた男のほうへと向き直る。

「刀は折れた」

「ああそれで手ぶらなのか。ってことは行先は桜花おうかか？」

桜花とは要塞島の名前の一つだった。

少年は「そうだ」と小さくうなずいた。

男は小首をかしげる。

「どうした、元気ないな。どっか悪いのか？」

世話好きな男のようだ。少年はかすかに苦笑した。

「いや、ちよつと寝不足なだけ」

「なんだ、若いくせに一丁前に夜遊びか」

男はようやく納得したようにうなずくと、ほどほどにしておくようにとだけ忠告して船室へと戻っていった。

「ありがとう」

小さく礼を言った少年の言葉は届いたのかどうか。豪快な笑い声を響かせていたから聞こえなかったかもしれない。

それでも少年は構わなかった。

男も構わなかった。

それでいい。

少年はもう一度大陸を見かえすと、今度は瞳に陰しさを潜ませて反対側の大海原を睨みつけた。

要塞島桜花はすぐそこまで近づいていた。

ようやく夏の暑さも和らぎ始め、空を見上げれば夏と秋の特徴を持つ二種類の雲が仲良く並んでいる。

改めて目の前の通りを眺めれば、着流しの裾を肌蹴させながら闊歩するたくさんの人々。

出店の売り子達は笑顔を振りまいて自分のところの商品を通りすがりの客に訴える。

ここは要塞島——桜花。出店で扱っている商品の主力は武器である。

刀を中心に、小刀、短刀、秘武器など各地で集められた多くの武器が売買されていた。

先ほど港に着いた船でこの要塞島へ上陸した男は、道なりに歩いた先にある出店通の入り口で足を止めていた。

ゆつくりと周囲を見渡す男を胡散げに見やるものは皆無ではなかったが、そうした者達はいずれもただの客で、要塞島の関係者にとつては時折見る光景の一つでしかない。船が運んできた荷を降ろす

作業に忙しい中でそんなことにかかずらっている暇などないのだ。

もつとも彼らが自身の仕事に集中できるのは見えないところで監視している者がいることを知っているからというのが一番だったが、初めて桜花に足を踏み入れたものは、ここでいったん躊躇するところがある。それだけ活気がすさまじいのだ。自分のような者がここで望みの武器を買うことができるのか、と。

そうした者のために売り子には可愛らしいお嬢さん方が多く採用され、親切丁寧に接客をしてもらえる。出店通の入り口でしばらくたたずみ、そうした様子を眺め、ようやくでは自分もとざわめきの中に加わることは決して珍しい光景ではなかった。

現在入り口で立ち止まっている男も、見た目はかなり若い。何も手にもっていないので刀を求めてきたのだろうか。

入り口のそばにある案内所の人間が、さりげなく男の様子を伺い、タイミングを見計らって声をかけようとしていたとき、ようやく男の足が動いた。ただし目の前の出店通ではなくその横の脇道へだが。

案内所にいた女性は、ちらりと後方にいる男へ目で合図を送る。するとその男は静かにその場から離れていった。

出店通を外れた脇道は、まるで迷路のようだった。否、ここは事実部外者を阻む迷路の役目を果たしていた。

武器の売買をおこなっているとはいっても、基本的には新たな武器を売った際に、不要になった客の武器を買い取っているだけの話だ。そうして引き取った古い武器は、まだ使えるものはそれぞれに必要なだけ手を加えてから中古商品として改めて出店の棚に並ぶ。

安いものは初心者や、使い捨てることの多い狩人達に人気があった。刃物はいつまでも一定の切れ味を保っているわけではない。切れば切るほど、使えば使うほど切れ味が落ちてくるので頻繁に手入れする必要がある。むしろ使わなくても手入れだけは絶えず欲するのが刃物の特徴ともいえる。にもかかわらず狩りでは一度に大量の殺生をおこなわなくてはならないため、すぐに切れ味が落ちてくる。しかもそのつど研ぎ直すことなどできない。だからこそ獣達に囲ま

れた中で生き残りかつ仕事を済ませるには、囲まれてなおすべてを切り捨てられるだけの量の刀が必要になってくるのだ。仕留める相手によっては一撃で刀が折れることもある。数を揃えようとすれば必然的に単価を下げざるを得ない。そうして需要と供給は成り立っている。

中古品はそうした理由から需要はあるものの、やはり桜花に來たからには、桜花の銘が入った新品の刀を購入することが一種の社会的地位の確立や自己満足を満たすために必要不可欠でもある。

ところがここでそれを横取りしようとする者が現れた。

普通、刀に彫られる銘といえば、その刀を鍛えた鍛冶屋の名前を刻むものだ。

だが桜花ではここで作られたすべての武器に桜花の銘が刻まれている。

これは鍛冶屋を守るためだった。特定の個人の銘は、特に精度が高くなればなるほど危険を伴い始める。金となる木は誰もがのどから手が出るほど欲しがるものだが、手に入らないとなるとたんに消そうとする者があとを絶たない。ほんに人とは罪深き存在だと嘆きながら島の長が定めたのだ。

誰が鍛えたのかを秘し、鍛冶場を隠し、そうして自分達の生活を守るための手段が、銘の統一であり、この迷路のように複雑な路地だった。

一見ぼろぼろの木造家屋がひしめいているように見えるが、実際は丈夫な鉄骨を骨組みに使っており、強烈な嵐が直撃しても吹き飛ばされないように見えないところに多くの工夫がなされている。

配置もそうだ。不慣れなものを惑わせ、風をうまく流して家屋へかかる負担を軽減する。この島を空から俯瞰することがかなうならきっとそこには翼を広げた優美な鳥の姿を目にしたであろう。

だが、地上を歩くしかすべのない人にはここはただの迷路。それ以上でも以下でもない。

脇道に入り込んだ男はそうやって複雑に入り組んだ道を、迷うそ

ぶりも見せずに一心に進んでいた。

見つめるのはただ前だけ。

視線の先には一人の女性の後ろ姿があった。

「その姐さん、姐さんよー」

男がその女性に向かって声をかけた。口を開いたのは上陸してから初めてのことだ。

見かけは若くむしろ少年といった風だったが、声だけを聞けば一応成年に達しているであろう年と見受けられた。

女がゆつくりと振り返る。

露になったその女の顔は極上で、いかにも男を手玉に取っていそうな雰囲気醸していた。

女は不審な男の登場に警戒しているのか、眉間に小さく皺を寄せていた。

男の方はといえば、そのことに気づいているのかいないのか。女の顔を拝めたことにご満悦のようで、だらしないほどに笑みこぼれていた。

「いやー、思ったとおりの美しい姐さんだ」

そう言いながら、男は女との距離を一気につめた。

驚愕からか、わずかに目と口を開いたまま動きを止めた女の手を掴んだ男は、その手の甲にそつと唇を触れさせた。

「俺の子を産んでくれ」

瞬間、男を幾つもの飛び道具が襲った。

ほんの刹那。男の口元に別の笑みが刻まれる。

あとはもう幻のように。

気づけば、先ほどよりわずかに離れた位置で女を守るように腕に囲った男が平然とした顔で立っていた。

「とても手厚いもてなしですね。これが桜花流ですか？」

路上に散らばる物騒なものをちらりと一瞥した男は、次いでゆつくりと周りを見渡した。

もはや隠れる意味を成さなくなったからか。あからさまに姿を現

しただけでなく、殺気すら隠す気はなさそうだった。

「やれやれ、ホントに物騒ですね」

観念したように小さく息を吐き出した男は、腕に囲った女から離れて彼らと向き合おうとしたところで動きを止めた。

ピクリと眉を動かしてゆつくりと視線をおろすと、そこには刃が剥き出しになった短刀が。出所は腕の中の女だった。

「……姐さん、それはないんじゃない？」

眉尻を下げて泣き言のような台詞を漏らしながら、男はゆつくりと両手を上げた。

この場合は降参する以外に道はない。否、降参しておくのが無難だろう。

抵抗の意思がないことを示した上で、男は女に向かって再び笑顔に向けた。

「で、姐さんもこいつらの仲間なわけ？ だったら引くように言ってくれないか？ 別に姐さんに危害を加える気も、無理強いする気もないし。ただの求婚だから」

再び飛んできた小刀状の手裏剣や矢を、男は器用にもわずかな動きだけで避けていた。もともと脅しでしかないから可能な技ではあったが。

「俺はまじめに求婚しているんだが、それすら駄目だったことか？ いい歳してちよつと過保護すぎじゃないか？」

男があきれたように頭を掻く。

正面に立つ体格のいい強面の中年男性が一步男の方へと近づいた。

「ませた口をきいてないで、お嬢さんから離れろ」

頭を掻いていた男の手が止まる。

「お嬢さん？ ませた口？ ……は？」

強面の男へ向けていた視線をいったん宙へずらし、また強面へ。

それからゆつくりと女へと移動した。

「……姐さん、もしかして未成年？ いくつ？」

歳を訊ねたところで再び小刀が飛んできたが、男は視線を向ける

ことすらせずにそれを軽く掴んだ。

ただの威嚇とはいえ当たればもちろん怪我をする。にもかかわらず自分に向かって飛んできた刃物を一顧だにせず、もちろん女から一切目をそらさなかった。

そうした一連の状況を間近で見ていた女は、ふっと苦笑するように息を吐き出すと男に突きつけていた刃物を引っ込めた。

「お嬢さん!？」

驚いたのは取り囲んでいる者たちだった。口々に女をいさめるが、彼女は軽く手を振って彼らを下からせる。

「いい。どの道お前たちでは太刀打ちできそうにないからね、みんな持ち場に戻って」

強面の男が最後まで粘っていたが、無言で見つめる女に観念したのか、やがて踵を返してどこかへ去っていった。

今度は男の方がその様子を黙って眺めていたが、やがて誰の気配も感じられなくなった頃、女へと視線を戻した。

「よかったのか？」

「何が？」

これがはじめて成立した会話だった。味も素っ気もない。しかしそれでも男はうれしそうに目をやわらかく細めた。

「保護者を帰したとき」

「危害を加える気も、無理強いする気もない。——そうだろう？」
それは男が言った言葉だ。

『別に姐さんに危害を加える気も、無理強いする気もないし』
と。

男はにやりと笑って首肯した。

「とりあえず話し合う時間はもらえたってことでいいのかな？」

期待に目を輝かせる男を見返した女は、どこか諦めたような苦笑を浮かべた。

「この場でどう言っても聞きそうには無いからね。まあとりあえずあんたに諦めてもらうための時間は作ることにした。それだけだ」

「それじゃ、自己紹介から始めようか？ 俺の名前は穂純^{ほじみ}。歳は二十一だ」

穂純が歳を告げたたん、女は眇めた目であきれたように見返してきた。

疲れたように息を吐き出した穂純は、嘘ではないと告げる。

「童顔なのは何度も言われているから俺も理解しているし、見えないうちもさんざっぱら言われ続けてわかってるが、事実だ」

さすがにそこまでいえばとりあえずは信じるしかないと判断したのか、女は軽くうなずいた。

「私は木槿^{むくげ}、十六だ」

今度は穂純が目を眇める番だ。だが彼はすぐに笑みに切り替えた。
「八重の木槿ならイメージがぴったりだな。いい名だ」

木槿は見かけに反して歳は若い。穂純とは反対だ。そのためかすぐに事実として受け入れられた。

「さて、それじゃあ自己紹介が済んだところで、今度はこの桜花を案内してくれるか？ それと飯の旨いところ」

「食事はいいとして、案内といわれても見せられるのは出店通と宿屋通だけけど」

「もちろんそれでいい」

含みもなく軽く返せば、それならと木槿はまずは宿屋通に足を向けた。食堂は宿屋にしかなかったからだ。桜花の住人もその食堂で食事をとることが多い。

別にそれぞれの家に炊事場がないわけではない。ただ忙しい中わざわざ材料を用意して調理をするよりも、宿屋通内の食堂で食べた方がうまくて経済的で楽だからだ。したがって特に内輪での祝い事がある日や、せいぜいおやつ程度にしか家で作られなくなっているというわけだ。

とはいえ火を使っているかどうかで鍛冶屋の場所を知られてはならないということもあり、火だけは常時焚かれていた。ただだからといって無駄に焚いているわけではない。その火は海水から真水を

作る工程に使われている。

それぞれの行動には意味があり、無駄なところが出ないように各所で創意工夫がなされていた。

2話 過保護な周囲

そうして二人は一軒の宿屋の中へと入っていった。

「ここがお勧めの食堂か？ 部屋が空いているようならついでに取っしておくかな」

穂純はそう呟くと、注文を取りに来た給仕に尋ねた。

「上はまだ空いてるか？」

上というのは客室のことだ。どこの宿屋も——桜花以外の宿屋も含めて——一階が食堂兼受付となっている。

給仕は空き室の確認のためにいったん下がり、数本の鍵を持って戻ってきた。

「一人部屋と二人部屋はまだ十分空きがあります。階も二階から四階までございますがどういった場所をご希望ですか？」

穂純はわずかに首をかしげる。

「じゃあ三階の角部屋で一人。空いてるか？」

「西と東がございますが？」

「東で」

「かしこまりました。ではこちらの鍵をどうぞ。宿泊日数はお決まりでしょうか？」

「そうだな……、とりあえず十日ということでもいいか？」

あとは事務的な手続きに入り、十日分の宿賃を前払いした。

そうするうちに注文していた食事が運ばれてくる。メニューは木槿がお勧めと思える品をいくつか注文していた。

宿の確保もできたことだしと穂純がいざ食べようとしたところで、木槿がなにやら楽しげに尋ねた。

「いいの？」

「何がだ？」

「何も確認しないで部屋を取ったことよ。この宿でよかったの？」

ああ、と穂純はようやく納得したように笑った。

どんな料理が出てくるのか全く見ていないうちに穂純は宿を決めたのだ。もちろん部屋のなかさえまだ見ていない状態で十日。部屋を取った宿でしか食事ができないわけではないが、普通は同じ宿で食事をとることが多い。宿泊日数も最初は一、二泊ほどして様子を見るものだ。

「木槿のお勧めだしな。まあうわさで聞いた感じじゃどこも水準が高いつてことだったし、給仕の姐さんの仕事っぷりを見た限りじゃ間違いはないと思ったからな」

正直に答えれば、木槿はにやりと笑んだ。

「確かにね。不公平がおきないようにどこの宿も水準を合わせるようにしているから奉仕の質に差はないわ」

違いといえば立地している場所くらいだ。宿屋通の入り口側、奥側、中央付近。二階、三階、四階。東、西。好みによって、また部屋の空き具合によって、それらの選択肢の中からいずれかの部屋を選ぶ。ただそれだけの違いしかなかった。

出店通に足繁く通うものは入り口側の宿を選択することが多い。

不慣れな者はだいたい中ほどに集まりたがる。

そしてじっくり腰をすえて品を選ぶもしくは特注する者は奥側を選んでいた。

出店通と宿屋通は平行に並んでいるにもかかわらず、奥に行くほど人々の喧騒が遠ざかるのは、宿屋通のそうした状況と、出店通の状況が関係していた。

出店通は入り口側に案内所が設けられ、その近くには初心者向けの武器が並べられていた。奥に進むにつれてだんだん品の質と値が高くなり、更に奥に進めばあつらえ物専門の店になる。

特注品はすぐには仕上がらない。それなりの日数を待つことになる。したがってそうした武器を欲する客は必然的に長期滞在を余儀なくされ、人通りも少なく静かであったりと寛げる奥まった場所にある宿に泊まるようになっていった。

そうした利便性や必然性が重なりいつしか暗黙の了解となって今

の状況と相成った。

今穂純と木槿がいるこの宿は宿屋通の一番奥に建っている。

そしてそのことは宿に入る前に簡単に木槿から説明があつたので穂純も知っていた。

そうした背景から、穂純も長期滞在する者としてこの宿を『ちよ
うどいい』から選んだにすぎない。

そうした雑談をしながら二人はのんびりと食事を進める。

「ところで穂純はどんな武器を探しているの？ 桜花に來たつてこ
とは武器を探しに來たんでしょう？」

「ああ、刀と……あとは峨嵋刺^{がびし}や鎖玉といった秘武器や鉄扇くらい
かな」

それを聞いた木槿はくすくすと笑いだした。

「峨嵋刺や鉄扇を……？ どちらも主に女性が使う武器ね」

「まあ一般的にはそうだが、男が使つてはならないと決まっている
わけじゃないな。俺は使えるものは何でも使う主義なんぞね」

穂純はそう言つて肩を竦めた。

峨嵋刺とは簪から発展した秘武器のひとつで両端が尖っている。

中央に開けられた穴に取り付けられている皮製の輪に中指を通して
くるくる回しながら突き刺したり打ち付けたりといった攻撃を仕掛
けたり、敵の刃を受け止めたりする。

一方鉄扇は主に女性が護身用に持つことが多いことはたしかだが、
女性用は小ぶりのものが多い。

そしてその一方で男性向けに白扇術^{はくせんじゅつ}というものがあり、これは一
尺二寸の長白扇を使った攻防併せ持つ技法だ。これをただでさえ重
い鉄扇を使つて行ふのだと穂純は説明した。

「鉄扇はただでさえ重いのに、それを長扇子で？」

驚く木槿は穂純の全身をしげしげと眺めた。

穂純は童顔ではあるが身長は平均よりやや高め。しかし特に筋肉
質というわけでもなく、どちらかという細めだ。その穂純がただ
でさえ重い長扇子を親骨だけとはいえ鉄で作ろうと言うのだ。

「持てるの？」

これは当然の疑問だっただろう。

しかし穂純はこの問いに眉をひそめた。

「そんなに俺が頼りなく見えるのか？」

穂純としては、すでに成人して自活しているにもかかわらずこのように言われては侮られたとしか思えなかった。

自然目付きが陰のあるものへと変化していく。

だが木槿は小さく笑っただけで軽くあしらった。

それが更に穂純の癪に障った。

「答える木槿」

低く唸るように問い詰めた穂純を囲むように、飛来した打根うちねが突き刺さった。

ぐるりと自身を取り囲む打根を一瞥した穂純は、ゆつくりと食堂内を見回した。そこにはこの宿の常連もしくは島の住人が数人。いずれも穂純に対して睨みを利かせている。

ここは相手をするべきかとゆつくりと立ち上がろうと卓たくに手をついたところで、穂純は動きを止めた。

視線を落とせば、またしても喉元に突きつけられた木槿の短刀。

思わずため息をひとつ漏らした穂純は、ゆつくりと特に力を込めることなく刃物を押し返した。それにあわせて木槿も引き下がったため双方に遺恨無くとりあえずは片がついた。

脱力するように椅子の背もたれに体を預けた穂純は、天井を仰ぎながら頭を掻いた。

半端に抑え続けて燻ったままの悪感情を体外に逃がすように大きく息を吐き出した穂純は、そのままの体勢で顔だけ横に向けた。

「なあ」

声をかけたのは穂純の一番近くにいた小柄な老人である。とはいえ今なおかくしゃくとしているが。

「なんだ？」

「さっきも言っただけどあんたたちちよつとどころでなく過保護すぎ

ないか？」

老人はちらりと木槿に目配せをする。木槿が軽くうなずいたことを確認した老人は、再び穂純へと視線を戻した。

「お嬢さんは次の頭領だ。そして今の副頭領でもある。護衛がつくのは当たり前のことだ」

穂純は片眉を持ち上げた。

「木槿が？ 次期頭領？」

「そうだ」

老人のうなずきに穂純はゆるゆるともどのように天井を見上げて左手で目元を覆った。

「……そう。木槿が、ね……」

桜花において頭領といえは島長とは別の存在で、出店通と宿屋通のすべての店を監督している団体の頭である。

桜花に來た客達の動向を監視することが主な仕事で、鍛冶屋達を實質的に守っているのが彼らだ。

そんなお役目だからこそ荒くれ者が多い。そのため頭領となる者には自然と、そんな荒くれ者達をまとめる技量が求められた。

しかし周りの反応をみれば、すでに木槿が次期頭領となることを認めている様子。

そうであるなら部外者である穂純が口をはさむのはお門違いではない。

ところが穂純のそうした態度に、今度は木槿がへそを曲げた。

「穂純……、それはあまりにも私に失礼じゃない？」

「そうはいうが」

ゆっくりと体を起こした穂純は卓に身を乗り出すようにして可能な範囲で木槿に詰め寄った。

「お前には義兄も義姉もいるといっていただろう」

出会いの路上からこの宿屋へ向かう途中に、すでに告げていた名前と年齢以外の簡単な自己紹介は雑談代わりに話し終えていた。

穂純は五歳のときに両親と死に別れ、通りすがりの老人に拾わ

れ育てられた。その養い親も三年前に亡くなり今は一人であちこち旅をしている。

木槿は養女で、義兄が二人に義姉が一人。そして現頭領の養父。その四人で暮らしている。木槿が養女になったのは一歳にも満たない赤子のころ。ついでに言えば義兄と義姉も養子養女で、全員血はつながっていないが兄弟姉妹は仲良く暮らしている。

まあその程度の互いに特に珍しくもない経歴だ。

ちなみに後継者は通常男性の第一子が選ばれる。

その旨を穂純が問えば、木槿は苦笑した。

「まあそついう意見もあつたわね」

「だつたらなぜお前に決まつたんだ？」

穂純の当たり前すぎる疑問に答えたのは、食堂に新たに現れた人物だつた。

「それは木槿が一番才能があつたからだよ」

「^{しきみ}密兄さん!？」

木槿の驚く声を聞きながら、穂純は入り口へと体ごと視線を向けた。そこには木槿の上の兄——つまりは本来であれば後継者となるべき長子が立っていた。

ほっそりとした体つきだが、立ち振る舞いからそれなりの手練だということとはわかる。

とはいえ一見優男にしか見えないのは事実で、それが演技であればなかなかの策士であるといえるし、地であればなるほどたしかに後継者には向かないだろうと納得させられる。

果たしてどちらの姿が本当なのか。きっと本人にはわからないだろうが。

穂純のもとまでやってきた密は手を差し出して改めて名乗った。

差し出された密の手をちらりと一瞥し、こうなると握手を返すしかないだろうと内心で苦笑った穂純は、己も名乗りながら手を差し出した。そうして両者の手が触れ合う少し前に木槿が密の手を軽く叩いた。

「密兄さん、それはちよつといたずらが過ぎるわ。穂純も穂純よ。気づいてたのに付き合おうとするなんてどうかしてるわ」

密は微笑み、穂純は頭をかきながら明後日の方向へ視線をそらせた。

木槿の言葉をきちんと理解していたのは密と穂純だけだった。他の者は何事が起こったのか理解できず、ただ困惑顔で三人を眺めている。

「お嬢さん……？」

木槿に問いかけてきたのは穂純が声をかけた老人だった。最初に声を掛けてきたところからしてこの中では一番高い地位にいるようだ。

「今のはどういことですか？ 密様が何かしなさんで？」

「ああ、そうね……。まあ簡単に言えば、穂純の力試しってところかしら。握手を受ければ密兄さんが仕込んでいた毒針が刺さるようになっていたのよ」

すると老人を筆頭に食堂にいた面々が満面の笑みを浮かべてしきりにうなずき始めた。

「さすがは密様。お嬢さんが頭領となられた暁には、よき副頭領としてしっかりとお嬢さんを支えてくれるはず。ワシらは今後も安泰ですなあ」

「そうだ、そうだ」

「さすが密様」

どうやら密のことは疎んでいるわけでも、見下げているわけでもないようだ。単純に技量が木槿のほうが高く、見栄えにも華があるということとで次期頭領に選ばれただけのようだった。

周囲の者達にさりげなく視線を巡らせて観察した感じから穂純はそう判断した。

もちろんそうした行動は木槿と密には筒抜けだったが、そうであることがわかったうえでの行動なので穂純にとってなんら不都合はなかった。

あらかた騒ぎが落ち着いてきたところで、密が再び穂純に向かつて手を差し出した。今度は何の仕掛けもなく、単純に挨拶としての握手を求める行為に、どちらにせよ応じざるを得ないと腹をくくっていた穂純は一切の躊躇いも見せずに差し出された手を握り返した。ここはさすが次期副頭領というべきか。それまで何の含みも無さ気な顔をしていながら、手を握り合った瞬間力を込めてきた。もちろんその最中^{さなか}でさえ表情には一切変化は無い。

対する穂純はいえ、負けず劣らずといったところか。同じだけの強さで握り返しているため、一見普通に握手をしているだけに見える。

男二人のほとんど意地の張り合いとなった握手合戦を呆れた眼差しで見やっただ木槿は、額に手を当てて大きく息を吐き出した。

「お嬢さん？」

突然大きなため息をついた木槿を訝った老人が問いかけるも、いい加減説明することに疲れた様子の木槿は軽く手を振ることで黙殺した。

「……密兄さん、穂純、いい加減にしてくれないかしら？」

木槿の提案に、そろそろ飽きていた二人はすんなりと手を離れた。給仕の者が新たに用意した椅子に密が腰掛けたころ、別の給仕が三人分のお茶を持ってきた。

「店主からの差し入れでございます」

乱闘を起こすことなく収束してくれたことに対する礼ということ、食堂内にいた全員にお茶が振舞われた。

さすが最奥にある宿屋だけの事はある。

一番奥にある分、一般客はここまで入ってくることが少ない。必要ないから客引きもしていない。島の住人と常連の長期滞在者ばかりが主な利用客であるにもかかわらず乱闘騒ぎを起こそうものなら桜花の評判にもかかわってくる。しかもその主犯が次期副頭領と次期副頭領では醜聞が悪すぎた。その上この宿屋は、宿屋通を総括する役も担っている。騒ぎが起きていれば他の宿へ示しがないとこ

るだった。

初顔の穂純に対する配慮なのか。台の上に乗っているお茶が入った湯呑みの中から一番最初を選ぶ権利が穂純に与えられた。

「どれでも好きなものをお取りください」

給仕の言葉に、穂純は迷い無く一番手前の湯呑みを手に取った。

あとは副頭領の木槿が先に取り、残りの湯呑みが密の前に置かれた。

「それでいいの？」

木槿がくすくすと小声で笑いながら穂純に尋ねたが、穂純は軽く肩をすくめただけですぐにお茶に口をつけた。一気に飲み干して器を卓に戻す。

「そこまで肝の小さいことはしないだろう？」

今度は木槿が肩をすくめる。肯定したということだ。

3話 頭領家の兄弟姉妹

「ところでさっきの話に戻るけど」

木槿が真面目な顔に戻って宣言するように話し始めた。

「あれは穂純を馬鹿にしたわけじゃないのよ」

路地ではあれほど無敵っぷりを見せておきながら、細身で童顔なことを気にしているさまがあまりにも不均衡で、それが微笑ましくてついからかうような形になってしまったのだと木槿が告白した。

「だから決して馬鹿にしたわけでも侮ったわけでもないの。それだけは勘違いしないでね」

穂純は拗ねたようにわずかに口を尖らせて視線を逸らせた。

年下の少女から微笑ましいと思われた時点で、穂純にとっては男としての自尊心を傷つけられたようなものだ。だから『馬鹿にしたわけでも侮ったわけでもない』といわれても何の救いにもならなかった。むしろいつそう惨めになるだけだ。

そんな二人を見やっていた桜が突然耐え切れなかった感じで吹き出した。

「お前達、歳が逆じゃないのか？」

見かけと口調が実年齢より高い木槿と、見かけと表情や仕草が実年齢より低い穂純。

拗ねる青年と、微笑む少女。

悔しそうな顔で穂純が桜を睨みつけたが、桜はどこ吹く風といった感じで涼しい顔。その上さらにとどめの一言を投下した。

「そうやって冗談にすら過剰に反応するところがまだまだ幼いということだよ、穂純くん」

締めが『穂純くん』。いかにも穂純をからかいのネタにして楽しんでいるということがあからさまに表れている。

穂純は眉間にしわを寄せて拳を握りしめた。

桜のいうことは確かに一理あるとは穂純とて思っている。だがい

かんせんかろうじて成人しているとはいえ穂純はまだ二十一歳だ。人生経験は生きてきた年数に応じた範囲でしかない。老獪なやり口はもちろん、穂純よりも歳が上のものと同等の経験や、もとの性格や立場から培われた自制心などといったものはわずかの努力では手に入られるものではないし、たやすく太刀打ちできるものでもない。

結局穂純は苦虫を噛み潰したような顔をしてそっぽを向くことしかできなかった。

「もういい」

木槿に向けて短く告げる穂純を、密はにやけ顔で、木槿は少々呆れ顔で、その他食堂の面々の反応は千差万別だが、穂純にとっては当たり前だが味方は一人もいなかった。

さんざん穂純をおもちゃにして満足したのか、やがて密がにやけ顔から最初に見た微笑んでいるような顔へと戻した。とはいえ微笑しているように見えるだけで、密のそれは実際にはただの地顔を装った仮面のようなものでしかない。穂純のように見るものが見ればすぐに見抜ける程度のものだが、確かに上に立つものには必要な仮面なのだろう。そのことは食堂に集った面々の様子を見ればわかる。密がそうやって微笑を浮かべていれば、皆の表情や言動も落ち着いたものへとなっていたのだから。

「それで穂純はどんな武器を探しているんだ？」

すでに木槿と話したことだったので、すらすらと穂純は答えた。

密は一つうなずいた。

「だったらからかった詫び代わりに、私が鎖玉を贈るよ。これが一番好みとは縁遠い武器だからね」

確かに刀を筆頭に、峨嵋刺や鉄扇などは好みがはっきりと影響する。他人に選べるようなものではない。

すると今度は木槿が軽く片手をあげて穂純の注意を引いた。

「じゃあ、私もお詫びに鉄扇を贈らせて。もちろん穂純が好きなものを選んでくれればいいから。代金だけ私が持つわ」

もちろん特注でも構わない。

そう補足した木槿に、いつまでも拗ねていては余計に情けない男になってしまふと心中で気合を入れた穂純が、苦笑しながら礼を言った。

「それはありがたい。が、そこまでしなくてもいい。どうしても詫びがしたいというのなら、最初に話したとおりに宿屋通と出店通の案内だけしてくれればいい」

「本当にそれでいいの？ 桜花の武器は……特にあつらえ品は決して安くはないわよ？」

大きく息を吐き出した穂純は軽く手を振った。

「そんな気遣いはいらぬ。元々武器も買いに来たと言っただろう。正規料金である限り必要な武器を買い揃えられるだけの金は持つてきてるさ」

どうあつても木槿には頼りがいがある男とは思ってもらえないようだ。どうやって挽回すればいいだろうかと考えながら、穂純が半ば投げやりには答えれば、密が器用に片眉を持ち上げた。

「武器も買いに？ 他にも何か目的があつてきたのか？」

「ああ、嫁さがした。もう見つかったけどな」

密はぱちくりといった感じで瞬きをした。

「木槿に求婚者が現れたというのは本当だったわけだね」

「密兄さん、もしかしてそれを確かめに来たの？」

「当たり前だろう？ 次期頭領というだけでなく、かわいい妹に変な虫がちよっかいをかけているようだと言けば駆けつけないわけがないだろう」

もうじき密の義弟で木槿の二番目の義兄——竜胆りんともやってくるだろうということだった。

「俺は見世物か……」

小さく漏らした穂純の呟きを密が聞きとがめた。

「穂純、それは我々に対して失礼だよ。次期頭領の配偶者を確認しないなど手抜きにもほどがある。反逆だとられても仕方がないほ

どあり得ない話だ」

「大げさだな……」

またしてもからかわれているのかと疲れた様子で返した穂純に対して、密は真面目に答えた。

「大げさではないよ、穂純。それが組織というものだ。頭領というものは皆をまとめる存在でなければならぬ。つまり配偶者選びも、日ごろの生活態度や言動もそれらすべてが評価につながる。自分たちが従うだけの力量を備えているかどうか、常に見極めている。この場合は見極めないといけないというべきかな。穂純だって命を預けて命令に従うべき相手がそれにふさわしいかどうか、己の目で見定めたいと思うだろう？」

そうまで言われてはうなずく以外にない。

「そりゃまあ……いい加減なやつには従いたくはないが……」

密はそうだろうというように小さくうなずいた。

「つまり頭領がどんな相手を配偶者を選ぶかというのは下の者にとつてはそれだけ重大なんだよ。その配偶者が組織のことに口出しをしたり、頭領に悪影響を与えるかもしれないしね」

さまざまな事例を想定考慮して模擬を重ねる。それは組織の一員として、また頭領を支える補佐の立場にいるものとして当然の仕事だった。

固い話はこの辺にして、まずは身を守る武器を先に買いに行こうということ、出店通の入口へとやってきた。ひととおりすべての店を覗いて実際に購入するものを選んでいこうということになり、ここへと来たのだ。

とりあえず船が着岸直後の混雑はすでに落ち着いており、むしろ宿屋通がにぎわいだしたところ。適度な人込みを視界の端に収めながら、穂純と木槿と密が立っていた。

一行の視線は案内所の前へ。そこには一人の青年が立っており笑顔で片手をあげていた。

次兄の竜胆だ。

「ここで待っていればそのうち姿を見せるだろうと思って待っていたんだ。どういう武器を選ぶかも興味があつたしね」

そう言いながら穂純の目の前まで歩いてきた竜胆は改めて名乗りをあげた。

「もうわかつているだろうけど、木槿の二番目の義兄の竜胆だよ。歳は二十一だから、穂純と同じだね。よろしくね」

そう挨拶した竜胆の後ろには、ひらひらの飾り布がついたとてもかわいらしい着物姿の、少女が一人立っていた。

気づいた穂純に姿を見せるように、竜胆の隣へ移動した少女はにつこりと笑った。

「あなたが穂純ちゃんね。私、木槿ちゃんのお姉さんの蔓穂^{つるほ}よ。よろしくね」

これで木槿の兄妹が勢揃いだ。

並んで立てば、密と竜胆はほとんど同じ背格好で、穂純よりは頭半分ほど高い。反対に木槿は穂純より頭半分ほど低いので、密と竜胆より頭一つ分低いことになる。なので視線はそう大きくずれなかった。ただし蔓穂だけはかなり小柄で、木槿と比べてさえ頭二つ分低い。

歳は、密が二十五歳、蔓穂が二十三歳、竜胆が二十一歳、木槿が十六歳。

密は地顔が微笑に見えるような胡散臭い人物。蔓穂はすでに成人しているにも関わらず十代半ば程度の少女にしか見えない。竜胆はさわやかな笑顔の青年だ。穂純とは違って年相応の顔つきをしていた。

系統は違えど、全員見栄えがする外見をもっているのは確かだった。

だがそうであるならますます木槿が次期頭領ということに疑問が浮かぶ。一見では判断がつかないほど拮抗しているような実力にみえてその実、木槿はそれほどの腕を隠し持っているのか。

こういうところは考えて答えが出るものではない。穂純は軽く息をはいて前を向いた。

「木槿、とりあえず案内を頼む」

そうして一行は出店通へと足を踏み入れた。

歩み始めてはみたものの、やはり頭領家の兄弟姉妹が一堂に会していれば周りの視線を集めてしまうものだ。見栄えがいいからなおさらに。

さまざまな感情を孕んだ視線を向けられて、穂純は小さくため息をついた。

「どうしたの、穂純？　こんなことくらいで気後れするようなタイプには見えないけれど？」

木槿の問いかけに、穂純は緩く首を横に振った。

確かに穂純は気後れしたわけではない。ただ不必要に人目を集めてしまつて疲れているだけだ。

「俺はただ武器と嫁を探しに來ただけだ。別に頭領の座を奪いに來たわけでも、桜花に害をなそうとしてるわけでもない。それなのに勝手な想像で嫉妬や殺氣や羨望やらを押し付けられても困る」

そして心底疲れたように再度ため息を落とした。

「穂純……あなた、見かけや歳の割には老けているわね」

木槿の言葉に、同情のまなざしで見るのはやめてもらいたいと穂純は思った。

「俺はただ人付き合いに慣れていないだけだ」

「山籠もりでもしていたの？」

くすくすと笑いながら聞き返してくる木槿に、穂純は肩をすくめて苦笑った。

「よくわかったな。育ててくれた爺様以外の人間とはほとんど接することなく育ってきたからな。わからないんだよ、距離感の見極めや距離の取り方といった人付き合いの基本が」

足を止めた木槿は驚きに見開いた瞳で穂純を見上げた。

「それ本当のことなの？　どんな僻地に行けばそんなことが可能な

の？」

「僻地で悪かったな。そんな場所はまだまだ残ってるさ」

人が住める場所は少ない。いくら知恵と努力で補ってきたとはいえ、無限に確保できないのだ。畢竟人は一所に固まって暮らすようになつた。とはいえ限界はもちろんある。

そうしてあぶれた者たちは少人数で僻地と呼ばれる狭い島へと移り住んだ。それとて少なくとも数十家族単位の話で、たった二人だけなどという話は木槿だけでなくほとんどの者が初耳だっただろう。現に竜胆が胡散臭そうに顔をしかめた。

「穂純、それは本当の話か？」

「実際に俺が育ったところや、爺様と交流のあつた数人の老人も全員が一つの島に一人ないし二人で住んでいたらしいぞ」

島と島の間隔は、高台に上って遠くを見晴るかすとかすかに島影が見える程度に離れていたし、彼らが暮らしている間は穂純自身はそれらの島へ上陸したことがなかったので話に聞いた範囲でしかわからない。他の老人たちが冥府へと旅立ち、最後の最後に後片付けを終えた爺様があとを追うようにして旅立つまでそれらの島へ渡つたことすらなかったのだから。ただ穂純が暮らしていた島は、二人だけしか住んでいなかったことだけはまぎれもない事実だった。

竜胆が腕を組み、心底うらやましそうな顔でいいなと言った。

「食い物を探すことがすべての毎日がか？」

乾いた笑いをもらす穂純を、全員が見返した。

ねえ、と木槿が眉をしかめながら口を開く。

「僻地はそんなに大変なの？」

「そりゃあ、僻地も僻地だったからなあ。それに人数が少ない自分たちで何かを栽培しようという行動には繋がらなかったし、狩りに行く方が確実だったんだよ」

穂純は頭を掻きながら言い訳がましく言った。

しかし現実的なのはやはりその都度狩りをおこなうことだった。だから毎日その日その日の食糧確保に奔走した。老人達の間も穂純

が確保していた時期もあった。

穂純にとって人とは爺様と稀に訪ねてきていた数人の老人達だけだった。

爺様が冥府へと旅立ったあとは、遺言に従って穂純も島を出た。そうして三年の間に人の住む場所を巡り巡って桜花へとやってきたのだった。

「まあそんな感じだから不慣れではあるが、だからといってどうこうということはないから。まあうつとおしくて少し疲れるだけだから、放っておいてもらって構わない。それより先に進もう。ひととおり案内してもらえればあとは一人でも見て回れるから」

気を遣って穂純がそう締めくくろうとすれば、密から待ったがかかった。

「鎖玉をプレゼントするといっただろう？ それにどうということはないのなら急ぐこともなからう。私たちとて自由時間はあるのだから、他人にどうこう言われる筋合いもない。どうしても気になるというのなら貸切にしてやってもいい。だから今日は最後まで付き合え」

「……このままでいい。貸切にしようものならあとでどんなとばかりがあるかわからないからな。面倒はごめんだ」

にやりと笑ってどんでもないことを言い出す密に対して、折れたのは穂純の方だった。ここは彼らの縄張り。ある程度は素直に従っておく方が身のためだと判断した結果だった。

一店一店顔を出し、お勧め品や掘り出し物の確認を中心に見ていく。

何せ桜花の顔が兄弟姉妹勢揃い。挨拶は軽く手を振って口を塞ぎ、こちらに必要な情報だけを得ていくので進みも早い。

結果的に穂純にとって有意義な展開となっていた。

4話 斬鋼刀

すべての店を検証し終えた穂純たち一行は、最後の店を出た先で立ち止まった。

「では鎖玉は五件目の店で保留していた物がいいということだな。長さだけあと六寸伸ばす。他に要望は？」

穂純が首を横に振ると、櫛は近くに控えていた人物に同じことを伝えて店へと走らせた。

それを見送ることなく櫛は穂純へと視線を戻す。

「あとは？」

他の武器はどうするかと聞かれて、穂純はしばし手を口元に充てて考え込んだ。

「そうだな。峨嵋刺と鉄扇は十二件目のかんざしを扱っていた店で特注するかな。刀は最後の店で交渉といった感じが……」

ほお、と竜胆が声をもらす。

「最後の店ということは時間がかかりそうだな」

「そうだろうな」

「穂純ちゃんはどうな刀が欲しいの？」

さすがは頭領家の養い子。刀には縁のなさそうな外見をしているが、瞳だけは興味津々といった感じに輝かせて蔓穂が尋ねてきた「少し長めで、丈夫さと切れ味に特化した……」そうだな斬鋼刀ざんこうとうとでもいえばいいのかな。その名を冠しても遜色がないほどの刀が欲しい」

穂純が「斬鋼刀」と口にした瞬間、四人のわずかに陰を孕む瞳が一斉に穂純へと向けられた。それだけでなく、その言葉が聞こえた範囲にいた人々も同じように穂純へと剣呑なまなざしを向ける。

「ん？ なんだ？ 突然どうしたんだ？」

あたりを見回した穂純は首をかしげた。

そんな穂純へ木槿との目配せを終えた櫛が代表して声をかけた。

「穂純。斬鋼刀のことはどこで聞いたんだ？」

「どこ？ 俺は斬鉄剣をもじって適当に名前をつけただけなんだけど、もしかしてそう呼ばれている刀があるのか？」

驚きと困惑を混ぜたような顔で穂純が尋ね返す。

そんな穂純を周りの者たちは探るように睨め回した。

やがて木槿が柏手を一つ打つと皆の視線がそちらへと移動し、軽く手を振るとそれぞれの持ち場へと戻っていった。

良かったのかというように密が木槿を見返していたが、大丈夫でしようともいうように軽く肩を持ち上げた木槿は、穂純へと視線を戻した。

「どうやら私たちが聞いていたものとは別の刀みたい。ところで、なぜこの店を選んだの？ ここに店を構えてはいるけれど、出店通にはどの店でも注文の受付係しかないのよ？」

鍛冶屋は桜花の宝。だからこそ奪われないよう傷つけられないよう細心の注意を払って守っている。

その状態でなお悩みもせずにこの店を選んだ理由は、守護する立場の次期頭領を務める木槿には気になることだろう。

穂純は軽く顎を引くようにして木槿と視線を合わせた。

「ここが最奥ってことは一般論からして客もそれなりの腕だと思っ
てやってくるってことだろう？ そうした客の相手をするには受注
係とはいえそれなりの知識も必要だってことだ。爺さんの眼も氣に
入ったし、じっくりと話し合いたいね」

そう穂純が言い切ると、件の店から本人が出てきた。

「ワシと話がしたいと？」

「ああ。膝を突き合わせてとことんまで煮詰めたいな。いつなら時
間が取れそうだ？」

わざわざ表まで出てきたということは、ここまでの話を聞いて注
文を受ける心積もりが一応はあるということだ。だからこそ穂純も
単刀直入に尋ねた。

案の定老人からは明日であれば一日開けられるという返事だった。

穂純はニツカと笑う。

「わかった。明日は爺さんを貸切だな」

そうと決まれば他の用事を済ませてしまおうということで、一行は峨嵋刺と鉄扇の注文へと足を進めた。

峨嵋刺と鉄扇は見本を参考にして、色、材質、長さ、重さ等々を注文すればとりあえずはおしまいだ。

鎖玉は密の奢り。鉄扇も結局は木槿の奢りとなった。

だから峨嵋刺の代金だけ前払いして穂純は店をあとにした。

鎖玉も峨嵋刺も鉄扇も出来上がればその都度宿に連絡をもらえることになっている。

宿屋通も出店通もひととおり案内が済んだ。これで木槿との約束も完了したということだ。

外へ出た穂純は木槿に向き直る。

「案内ありがとうな。おかげで最初の難関だった店選びが楽にできていい武器を手に入れられそうだ」

につこりと笑って木槿へ礼を言った穂純は軽く手を挙げた。

「あとは俺一人で宿まで戻れるし、ここまででいいよ。ありがとう」
「わかったわ。じゃあここで」

木槿も軽く手を振って挨拶を返す。

そのまま穂純は踵を返しかけたところではたと思いだした。

「そういえばこれを忘れていた」

木槿の前へと体の向きを戻した穂純は懷から取り出したかんざしをそつと木槿の髪に挿した。

峨嵋刺を注文する合間に買ったものだった。

「俺からの礼だ」

木槿と密と竜胆と蔓穂。四人はいつの間にとあっけにとられたように口をぽかんと開けて、無言で穂純を見送った。

翌日穂純は早々に朝食を済ませると出店通の最奥の店へと向かった。

扉を拳で軽く叩けば、昨日の老人が出迎えてくれた。

「奥へ入りなされ」

促されるままに穂純は奥に設えられた席に腰掛けた。

ざっと周囲を見渡せば、見本であろう刀がいくつも置かれている。長さや重さ素材といった区分けがされ、実際に手に持った際の感触を味わえるようになっていいる。

昨日視察に來た時よりも本数が増えているのは、穂純がぽつりと漏らした『少し長めで丈夫さと切れ味に特化した刀』という条件に合いそうなものを一晩で探してきたからのようだった。

「ずいぶん集めてくれたんだな……」

思ったままを穂純が呟けば、老人はくつりと笑声をこぼした。

穂純は首をかしげる。

「なんだ？ 変なことを言ったか？」

「こちらはこれが商売ですから。前もって客人の好みを伺っておきながら何の準備もしないということはないですよ」

「たしかに」

相槌を打つ穂純を老人がお茶を用意した席に招く。

「まずはお話から伺いましょうか」

たとえ見本を数多く用意しようとも、あくまでもそれは見本だ。客がどういった刀を欲しているのかは、とりあえず話してみないことにはたとえ受注の達人だったとしてもわかりはしない。

「そうだな。まず全体的な印象としては、斬鉄剣よりもさらに切れ味の鋭さと丈夫さを兼ね備えているということ。あとは個人的な好みで刃の部分を通常の一割ほど長くして欲しい。これが基本だ」

さらには持ち手の長さや装飾、そして素材の調合などを話し合っていく。

「でしたらこのあたりの外観が一番ご希望に添うていそうですね」
集めていた見本の中から数本を手にした老人は、それを卓の上に置いた。

刃の長さはほぼ似たり寄ったりだが、その似たり寄ったりのなか

ら好みの長さを見極めるためだ。この辺りは感覚的なものなので常に同じ長さの刀を使い続けている者以外はこうやって実際に手に持つて振り回してみても細かい調整を行っていく。

老人が真ん中に置いた刀を指し示す。

「こちらがちょうど一割長くなっております。あとは見たとおり、こちら側がそれより徐々に長くなり、あちら側が徐々に短くなっております。さあ、とりあえずこの基準から試してみてください」

穂純はおもむろに立ち上がると、言われたとおりに手に持った。腕を下した状態で床との距離、上げた時の感覚。少し席から距離をとってゆつくりと舞うように刀を振って感触をつかんでいく。

戻ってきた穂純はそれよりさらに一寸長い刀を手にして同じように試した。

次はその二本の中間の長さだ。こちらもひととおり試した穂純は老人を振り返る。

「爺さん、これと同じ長さにしてくれ。これが一番しっくりくる。重さもこれくらいがちょうどいいが……、やはり重くなるか？」

どうこう言ってもここに置いてあるのは普通の刀だ。桜花製である以上斬鉄剣に近い質は保っているとはいえ、穂純が求めるのはそれよりもさらに上——最上級の刀だ。配合によっては重くなることもじゅうぶんありうる。

だが老人は微笑みながら軽く首を横に振った。

「こちらとほぼ同じ重さというのは可能でございますよ。桜花の職人の腕は超一流でございます。ご安心ください」

「どうせなら爺さんに鍛えてもらいたいな」

「ワシはただの受付。鍛冶屋ではございませんのでご期待には応えられません」

にこやかな笑顔でいさめる老人に、穂純はニツカと笑った。

「他の受付係には無理だろうけど、爺さんだけはできるだろう？ 爺さんのその眼とその手。それは鍛冶屋の……一流の鍛冶屋の眼と手だよ。爺さんは桜花でも超一流と呼ばれるほどの腕前の鍛冶屋だ

ろう？」

言い切った穗純を、老人の細めた瞳が静かに見つめる。

「何を根拠にそう言い切られるのかお聞きしてもよろしいか？」

「櫓あたりから聞いてると思うけど、俺を育ててくれた爺様って元鍛冶屋だったんだよ。色々話も聞かされたし、眼と手に爺さんとか似た職業病があった」

一つの仕事を長く続けられ続けるほど、それに伴う後遺症のようなものを患うことが多々ある。

鍛冶屋は高温の鋼鉄を扱うことから、熱によって火傷をすることが多い。

そうしたことを説明していった穗純だったが、老人はいつかな表情を変えなかった。

「もしワシが鍛冶屋だったとしても一流だとは限らないでしょう？」

長く続けていても免許皆伝まで到達できるものは少ないですし、

一人前として商品を鍛えられる腕にまで達しない者も大勢いますぞ」

「だって爺さんが深水さんしんすいだろ？」

その一言で初めて老人の顔から笑みが消えた。

「なぜそれを？」

固い口調。それだけで否応なく深水が老人の名だという証となった。いや、ここは老人がそうだと認めたということか。

「育て親の爺様に聞いた。名前と身体的特徴と……桜花一の鍛冶屋だということも」

「……その方のお名前は？」

「常一」

老人はゆっくりと目を瞠った。

「常一殿……？ ご無事だったのか……」

「まあでも三年前に亡くなったけどさ。それまではとっても元気だったよ。ただの老衰だったし」

「そう……ですか……」

老人——深水はうつむくと口の中で「亡くなられた」と小さくつ

ぶやいた。

しばらくの間店内に静寂が漂う。

常一と過ごした記憶が、穂純と深水それぞれの脳裏によりみがえり故人を偲んでいたためだ。

やがて深水が顔をあげた。

「それで、じっくり話し合いたいといってわざわざ丸一日予約を取ってまでワシを指名したのは、このことを話すためかな？」

「まあそれもあるが、実際に刀の注文でも時間がかかるだろうと思っただよ」

そういつて穂純は苦笑した。

「斬鋼刀を鍛えることができるのは爺様……常一と深水さんだけだった。常一が亡くなった今、残るは深水さんただ一人。もう爺さんしか鍛えられない。そうだろう？ それとも十六年の間に後継ぎができたのか？」

深水が受付係として店番をしているということは、すでに鍛冶屋としては引退している可能性もあるのでそう尋ねてはみたものの、穂純としては仕事量を減らしただけで引退まではしていないだろうと踏んでいた。そして引退していないということは後継ぎはいないということだ。案の定深水は首を振って否定した。

「斬鋼刀を鍛えられるほどの鍛冶屋は育たんかった」

そしてふと気づいたように穂純を見返した。

「常一殿の後継者は？ 穂純殿を鍛冶屋としては育てられなかったのか？」

超一流の腕を持つ刀鍛冶に育てられた穂純。しかし穂純は刀の鍛え方については何一つ教わらなかった。熱にやられるといけないからといって作業中は鍛冶場に入ることすら認められなかった。あくまでも穂純を刀使いとして育てていた。

「それにしても鍛冶場が整っていたのなら、なぜ常一殿に鍛えてもらわなかった？ 話を聞いた限りではそのくらいの余裕はあったはずだろう」

これは当然の疑問だっただろう。

「斬鋼刀も含めて数振り鍛えてもらってる」

「だったらなぜ……？」

「答えは簡単。いくら斬鋼刀だからといって絶対折れないわけじゃないから。さすがに永遠に使える刀なんてまだお目にかかったことはないからなあ。いざという時のために予備が最低二振りは欲しいんだよ」

「それだけの数の斬鋼刀を持って、いったい何をしようとしているのかね……」

穂純の返答を聞いた深水は驚愕の表情を浮かべた。

「なぜそのことを……」

唾を呑み込んで喉を湿らせてから深水は口を開いた。桜花でも常に情報を収集している。それなのに誰一人として耳にしたことのない情報を穂純が持っているとなれば、誰だって真偽を疑ってしまうものだろう。

「それは企業秘密というものだ」

穂純はにやりと笑う。どうせここでのやり取りは少なくとも頭領一家の面々には報告されているはずだ。発言内容にはそれなりの注意が必要となる。

そのあたりの心理は深水にも理解できたようだ。が、にもかかわらず深水は重ねて尋ねてきた。

「この店での会話は誰にも聞かれることはない。安心して話してくれればいい。情報源は何かね？」

「爺さんの言うとおり誰にも知らなかったとしても、これは教えられない。爺さんだって俺が誰にも話さないからと約束したところで桜花の裏の秘密を教えるわけにはいかないだろう。それと一緒に俺には俺の事情がある。ただでさえ武器の詳細を知られている俺の方が不利なんだ。これ以上は勘弁してもらえないか？」

そういつて穂純はちらりと横の物置に視線を意味ありげに流した。深水も同じようにそちらを一瞥すると大きく息を吐き出した。

「そうですね。穂純殿が言われることも一理ありますし、このような現状ではワシのほうが悪いです。あきらめることにしましょう」「あとは雑談を交えながら、刀の柄の部分の装飾等について煮詰めていった。

5話 買い占め

特別注文を終えた人々は穂純を含めて基本は宿泊している宿屋にある食堂にて雑談を交わしながら杯を傾けている。

時折出店通を散策して変わったものが売られていないか確認し、また食堂へと戻ってくる。

そうした日々を送る中、穂純が頼んでいた品も、鎖玉、峨嵋刺といった風に手間のかからない物から順に仕上がっていった。

鉄扇まではさほど待たなくても仕上がったが、斬鋼刀はそうはいかないだろう。どうせ時間はあるのだからと、穂純は他の宿屋にある食堂へも順繰りに顔を出していった。それぞれの店のお勧め品を食し、他の客たちと雑談に花を咲かせる。今日もそうやって楽しんでいた。

ふと近くの席で話す男たちの声が穂純のところまで聞こえてきた。「だーけどよー今回の船は団体客がほんと多かったよなー」

桜花を含めた島々を巡って人や物資を運んでいる大型船は一週間おきにやってくる。

穂純が乗ってきた船は通常どおりだったが、今回は多くの客が乗っていたらしい。ほとんどの宿が一気に埋まっていったくらいだ。さぞかしぎゅうぎゅうづめだったのだろう。着物が湿るほどに汗だくになった者も大勢いたくらいだ。宿に着くなり風呂に入りたがったのも無理はない。

「たしかに多かったけど、あれがそろそろじゃなかったか？ ほら、橘花でやってる祭り。武器がたくさんいるんだろう？」

「馬鹿か。あれは再来月」

「そうだったけ？ でも早めに用意した方がいいんじゃないの？ 時間がかかるし」

「いつも中古の安いものを買って帰っているから急ぐことはないだろう」

「でも今回来たやつらは、ほとんど店ごと買い占めるくらいの勢いで各自が大量に買い漁っているらしいぞ。普通の客がそこまで買うか？」

「それはすごいな」

「だろ？ 俺なんか、目をつけてた武器をいくつも横から搔つ攫われてさあ。結局一本しか買えなかったんだぜ。お前も欲しいものがあつたら早めに買っておいた方がいいぞ」

「ほんとかよ。じゃあさっそく行ってくるわ」

一人が慌てたように出店通に向かうと、残った一人のもとへ、二人の話を聞いていた数人が今の話は本当かと声をかける。

そうしてまた新たに花が咲く。

穂純はそうした様子をぼんやりと眺めていた。

「どうした穂純、暇すぎてぼけたのか？」

声の主は密だった。にやにやと笑う姿からしてからかっていることは一目瞭然である。

「のんびりとくつろいでいるといってくるれ」

誰がぼけているんだ、とぶつくさ言いながら穂純は頭を掻いた。

密はこうして時折現れては穂純をからかって遊ぶことが多い。

他の一員は稀に食事中に偶然出くわす程度で、密のようにわざわざ会いに来ることはない。

穂純の方も特に誰かと故意によしみを結ぼうともせず、もちろん木槿に対しても迫ったり何かを求めたりしたことはない。

「不思議だよな、穂純は」

「何がだ？」

「あれだけ劇的に子づくり宣言しておきながら、それ以上は木槿を楼閣するために何かをしようとはしてないだろう？ 木槿に言い寄った男は穂純が初めてだから、なかなか骨があるなと感心していたんだけどな。次期頭領だと聞いてから様子が変わったよね。やつぱり怖気づいたのかな？ それとも私が婚約者だと誰かから聞かされてあきらめてくれたとか？」

「そんなんじゃない」

ため息をついた穂純は、椅子の背もたれに体を預けた。

「爺さんのところで話した内容はすでに聞いているんだろう？」

櫛が小さくうなずいたのを確認して穂純は続けた。

「だったら今がどういう時期かわかっているはずだ」

桜花がまだ公式に発表をしていない以上、無関係な人間が多数いるこの食堂では安易なことはいえない。そうやって言葉を濁していた穂純を櫛は外へと連れ出した。

向かった先は穂純が泊まっている宿のほぼ真裏にある民家だった。

「ここは？」

「私の家だ」

穂純はざっと周囲を見渡す。

「一人暮らしか？」

「ああ。桜花では成人すれば全員家を与えられる。結婚すればどちらかの家へ入り、空いた家はまた桜花へと返し、他の者へと配分される。つまり成人しておりなおかつ独身の私は一人暮らし以外はあり得ないということだ」

説明しながら手慣れた仕草でお茶を入れた櫛は、穂純を卓へと促して自身も向かいの席へ腰かけた。

「先ほどは気を遣ってもらって助かったよ」

「なぜまだ公布しない。そろそろ桜花でも裏は取れているだろう？」

櫛はなぜか穂純の顔をじっと見つめてから静かに首を左右に振った。

「いや、まだだ」

「まだ、だと？ 桜花の情報網はその程度のものなのか？ だったらさっきの食堂でのあれはなんだったんだ。なぜ他の客たちに早急に武器を持たせようとしていたんだ？」

「それはこちらのせりふだろう？」

突然櫛の声が硬質になる。まるで断獄する者のように表情さえ人としてのぬくもりや感情を切り捨てていた。

「穂純、あれはお前がやらせたんだろう？」

「密……？」

「私たちの目を自分に引きつけようとしてあちこちの食堂や出店にこれ見よがしに出歩き、その間に仲間たちには武器を買い占めさせたり、頭領の命を奪ったりしたことだよ」

「頭領が死んだのか！？」

穂純は怒鳴りつけるようにして密に問いただした。

「白々しい態度はよすんだな」

「……本当に花団かたんの頭領——立葵たちあおいは殺されたんだな？ 答える密」

「自分で殺しておいて、まだ白を切るつもりか、穂純。これほど見下げた根性をしていたとは、さすがの私も気づかなかったよ。もつともわざわざ特注した獲物で命を奪うところからしてすでに通常では考えられないことだけだね。それにしても次期頭領の木槿に贈られた鉄扇で、その養父である頭領の首を刎ねるとは、何たる非道な仕打ちか。見かけによらずおまえは恐ろしい男だな」

「俺じゃない！」

叫ぶように密の言葉を否定した穂純は、ギリリと奥歯を噛み締めて唸るようにつぶやいた。

「立葵が死んだだと……。俺が仇かたきを討つはずだったのに……」

「ほお、仇討ちだったのか」

密の冷たい声で穂純は我に返った。苛立ちのまま余計なことを口走ってしまった。だが後悔しても遅かった。

軽く片手を上げた密が勢いよく振り下ろしながら命ずる。

「こいつをひとつとらえろ！」

なだれ込むように駆け込んできた男たちに、穂純は抵抗むなしく拘束されてしまった。

ゆらゆらと体全体が揺れ動く中、穂純はゆっくりと目を開けた。
「もつ目が覚めたのか。眠ったままだったらさして苦しまずに済んだらうに」

憐れむような、けれど嘲りを多分に含んだ声で密が言う。密は穂純のすぐそばに立っていた。

対する穂純はいえ、荒縄でぐるぐる巻きにされて船の甲板の上に転がされていた。

（目が覚めた……？）

密の言葉を脳裏で繰り返した穂純は記憶を漁った。そして密が用意したお茶に睡眠薬のようなものが入れられていたのだろうということに思い至った。拘束を逃れようと抵抗しているうちに意識が朦朧としていったのはそのせいだったのだろう。

心中で舌打ちした穂純は己の迂闊さを呪った。

（間抜けすぎるだろう、俺）

無意識に頭を掻こうとして、動かせない腕に改めて今の状況に意識が戻る。代わりにたださびしく荒縄がギリギリと泣いただけだった。「無駄なあがきはしないことだ。簡単に抜け出せるように縛り上げるなどといった無意味なことを私たちはしないよ」

片頬だけで笑いながら密が忠告する。

「もちろん身体検査済みだ。隠し武器もすべて取り上げているので探すだけ無駄だ」

その時何かの合図のような声がした。密はそちらを一瞥すると穂純に向き直った。

「さあ、君を送り出す準備が整ったようだ。これでさようならだ」
ゆっくりと恐怖を煽るように密は後退る。

入れ替わりに数人の男たちが近寄り穂純の体を持ち上げる。船端まで運ばれた穂純の体は、一瞬の躊躇もなく海へと放り込まれた。

穂純の体はただゆっくりと沈んでいった。

きつく締め付けられた縄が、水中ではさらに動きを制約する。

（くそつたれが……っ）

心の中で悪態をつきながら、穂純はできるだけ少ない動きで縄抜に挑み続けていた。

ちらりと上を見上げる。上とはもちろん水面だ。

今はまだかすかに光が感じられる。

だがこうやって沈み続けていればさして時間がかからないうちに海底へと引き込む流れにつかまってしまっただろう。

舌打ちしたい気持ちを抑え、作業を続ける。

陸上であれば関節をはずして抜けることもできるが、できることと平気なことは別物だ。どう堪えたところで痛みで息が漏れてしまう。地上であれば呼吸ができるため生死にかかわることはない。だが水中で酸素を浪費すれば死に直結してしまうのだ。

(あと……少し……っ)

足掻く穂純の視界から水面を示す光すら消えた。

(くっ、これまでか……)

穂純は目を閉じて力を抜くと一切の動きを止めた。

そんな穂純の手にチクリとした痛みが走り、反射的に体が逃げをうとうとする。そこで初めて縄の拘束が外れていたことに気がついた。

(え……?)

目を開けた穂純の視界には揺らめきながら時折光をさえぎる長い黒髪。

そしてそれとは反対に時折光を反射してきらめく、穂純が手ずから挿した簪。かんざし

(木槿……)

穂純は信じられないといった感じで目を見開いて助けに来た木槿を見返した。

そんな穂純を叱咤するように、木槿は指先で穂純の胸をトンと突くと、その指で水面を指し示した。

とにかく水面に出ることが先決というわけだ。

穂純は気を引き締めるとようやく呪縛から逃れることができた手足で力強く水をかいた。

海面に顔を出した穂純は呼吸を整えるかたわらあたりを見渡した。

密たちが乗っていた船はすでに帰港したようだ。だが小舟すら一艘も見当たらないのはどうしたわけか。

「木槿、おまえどうやってここに来たんだ？」

仮に密たちの船に同乗していたとすれば、木槿を穂純の救出に向かわせることは決してなかっただろう。だが小舟すら見当たらず、そもそも密に見つからずに船を使ってここまでくる手段があるかどうかだ。

聞いた方が早いと判断した穂純の問いに、けれども答えは返ってこなかった。

「木槿……？」

きよろきよろと周囲を見回す。

そんな穂純の背後で大きな水音が立った。

驚いて振り向いた穂純からわずかに離れた場所に木槿の姿。木槿は海豚の背に腰^{いるか}かけていた。

「木槿……おまえ海豚を操れたのか……？」

「私は花団の次期頭領で現副頭領よ、ちゃんと桜花の奥義は受け継いでいるし、もちろんこの子とも主従契約を結んでいるわよ」

誇らしげに胸を張る木槿を見て、穂純はくすりと笑みをこぼした。
「なに？」

訝しむ視線に首を横に振ることで答えた穂純は、おもむろに指笛を鳴らすと一定のリズムで海面を叩き始めた。

「穂純……まさか……」

自身も海豚と契約をしているからだろう。穂純が何をしているのかすぐにわかったようだ。だが穂純が呼んだのは海豚ではない。

巨大な影が穂純の下方に現れ、やがてゆっくりと浮上してくる。海豚は恐れをなして木槿を背に乗せたまま距離を置いた。

立ち泳ぎを続けていた穂純の動きが止まり、やがて体が上へと持ち上がる。

穂純は現れた鯨^{じやう}の背に立っていた。

「穂純、あなた……」

どうして、と続く言葉は声にならずただ木槿の唇でだけ綴られた。そんな木槿を穂純は一瞥したが濡れた髪がどうにも視界の邪魔をするので、両手を使って水を絞るようにして後方に撫でつけた。そうすると不思議と本来の歳に見えなくもない。どちらかといえば中世的な顔立ちをしている穂純は、前髪をおろしているからこそ余計に童顔に見えていたようだ。

もっとも本人は鏡でもなければ己の姿を見ることができないので未だ気づいていないが。

一つ息を吐き出した穂純は、高くなつた視線で改めて周囲を見渡した。

やはり船影は見当たらない。

「木槿、おまえがここに来ることは誰かに知られているのか？」

「誰も知らないわよ。言えば行かせてもらえないとわかっているのに言うわけがないでしょう？」

苦笑する木槿に、穂純もそうだろうなと同意した。

「だったらちようどいい。木槿はこのまま島に帰れ」

「……穂純はどうするの？」

「俺はあとからこつそりと島に上陸する。だから俺の武器を誰にも内緒で取り戻しておいてくれないか。刀の製作も継続してできるだけ早期に完成させてくれ」

「どうやって!？」

木槿の訴えももつともだろう。誰もが穂純は死んだと思っているのだ。客の特注品を、その客が亡くなつたことがわかつている状態でそのまま製造し続けるなどといったことは通常あり得ない。だが穂純は自信満々に答えた。

「あの深水爺さんならただ刀を完成させるようにって一言いえば大丈夫だ。他には何も言わなくてもそれで通じる。頼んだぞ」

それだけ言つと、穂純は鯨の背に腰掛けて取り付けていた手綱を操つてその場をあとにした。

6話 語る武器

無言で穂純を見送った木槿は一人島へと戻っていった。

海豚から降りて陸に上がると、濡れた肌が急に冷えていく。木槿は慌てて家に帰り、湯を浴びた。

（穂純は風邪を引いていないかしら？）

気にはなるものの、穂純が生きていることを深水以外には誰にも知られてはならない。そのことは木槿とてわかっている。だからこそ髪を乾かして着物も着替えたあとはいつもの木槿を取り繕った。

出店通に来た木槿は普段どおりに見回りを始める。見回りといっても、常連客のような感じで商品について見聞きするかたわら軽くあいさつして回るだけだが。

そうして最後の店に寄れば、深水はそこにはいなかった。店は開いている。ただ代わりの者が受付台に座っているだけだった。

「深水殿は？」

「店主はまだ休みですよ……」

訝しみながらそう言われて、鍛冶のために連休を取っていたことを思い出した。

「ああ、そういえばそうだったわね。もう戻っているのかと思っただけだから気にしないで。こちらは変わったことはない？」

「ここには客は来ませんよ。なので変わったことも全くありません」
まだ若い男は、ただの留守番だという思いからか胸を張って気楽に答えていた。

実際最奥にあるこの店は、一般的な認識どおり商品単価が一番高い。特殊な加工が必要なものだったり、他の店では受付られないものばかりが持ち込まれるためそれは必然だった。またそういう性質であるため飛び込みも滅多にない。まずはどこかの店に持ち込まれ、それから大まかな打診を受けてから改めて商談に入ることの方が圧倒的に多いからだ。まれに冷やかしに来るものがいはいしても、たい

てい最低金額を聞くとそそくさと退散するのが常だった。つまり穂純のような事例は例外中の例外といっていい。

だからこそ一時的な留守番役であれば彼のような若手でも勤まるのだ。

小さく苦笑を浮かべた木槿は、軽く手を挙げて了解の意を示すと店を出た。

ぶらりぶらりと散歩でもするように入り組んだ路地を歩き、そして深水が作業している鍛冶場へとやってきた。

死角にひっそりと用意された隠し扉から合図を送る。

少しの間を置いて覗き窓から木槿の姿を確認した番人がそつと扉を開ける。木槿は速やかに中に入った。

さつと周りを見る。

深水はちょうど手が空いたところだった。

「深水殿」

木槿の呼びかけに深水はすぐに応じて立ち上がった。

「頭領。わざわざこんなところまで来られていったいどうされました？」

すでに木槿を頭領と呼ぶ深水に、けれど木槿は何も返せなかった。ただ二人きりで話したいとだけ告げる。

深水は番人に顔を向けた。

「一刻ほど外に出てきてくれるかの」

番人は軽くうなずくと、深水の補佐をしていた鍛冶屋二名を伴って退室した。これでこの鍛冶場には深水と木槿の二人しかいない。

「それでご用件は何でございましょうか？」

卓に用意されたお茶。一息ついたあとで先に切り出したのは深水だった。

「穂純が注文した刀……斬鋼刀をできるだけ早く仕上げて欲しいの」
深水は伏し目になると、そつと口元に淡い笑みを浮かべた。

「穂純殿には全額前金でいただいております。頭領からの申し入れがなくとも注文どおりの品を揃えるつもりでこうして作業をしてお

りました」

深水が示す先には、二本の斬鋼刀と一本の普通の刀がすでに鍛えられていた。

「これから銘入れと装飾、そして最終的な研ぎを行います」

明後日の未明までには仕上げるつもりだという深水に、あまり無理はしすぎるなと辞令的な言葉を返す木槿。

「それにしても」

急に相好を崩した深水はそう言って木槿を見やった。

「頭領にもようやく春が訪れましたかのう」

突然のこの台詞に木槿は目を睜ると、次いでうつすらと頬を染めた。

「し、深水殿、いきなり何を……」

目じりにいつそう皺を刻んで細められた深水の瞳は木槿の髪を留める簪を映す。

「その簪。海水につけられたのでしたら早めに真水で洗われたがよろしかろう」

いつそう鮮やかに頬を染めた木槿は口を小さく尖らせた。

「もう洗ったわ。誤解の無いように言っておくけれど、海豚というもののように見回りをしてきただけよ」

「さようでございましょうとも」

木槿の言い訳は、好々爺然とした深水の前では一蹴されるほどの拙いものだったが、深水はそんな様子でさえ好ましいものと思っているようで、声音にさえ喜びが溢れているようだった。

それから数日後の未明。穂純はそつと要塞島桜花へ上陸する。未だ寝静まっているかと思いきやそうではない。すでに活動を始めているものも結構いた。

宿の食堂では早くから朝食の下ごしらえがおこなわれているし、各家庭では真水生成のための火が起こされる。

鍛冶場では深夜から続く作業のさなかの者たちだった。

そうした者たちが立てる音にまぎれて穂純はするりするりと路地を渡り歩いていった。

迷路になっているはずの桜花の路地。けれど一向に足取りに迷いはない。穂純は現在位置を把握し、また目的地も把握しているようだった。

一軒の建物の前でようやく足を止めた穂純は、路地裏に位置する部屋の窓を静かに叩いた。

応えるように中からかすかな音が返ってくる。

しばらくの後、その横に設えていた隠し扉がそつと開かれた。

「ちょうどいい頃合でしたね」

穂純を迎え入れたのは深水だった。

部屋の中に入った穂純はざつと見回す。

「眠っていたのか？ 悪かったな」

「お気になさらず。どうせいつもこのくらいには起きていますので」
そう言いながら深水は隣室へと向かった。穂純もそのあとに続く扉をくぐれば、深水は棚から三本の細長い包みを取り出しているところだった。

一本一本丁寧に卓に置かれて包みが解かれる。

穂純が注文したとおりの刀が三振り揃っていた。

「何も言われなかったか？」

この刀が穂純の特注品であることは見るものが見ればわかるはずだ。もちろん櫛たちも。

だが無言で深水に手の平で促されて、穂純はとりあえず手前にあった一本を手にとった。まずは普通の刀だ。

ゆっくりと鞘から引き抜き、じっくりと眺めてから戻すと次の刀を手にした。

こちらは斬鋼刀だ。同じように鞘から抜き出して矯めつ眇めつ眺める。

穂純の口元がゆっくりと弧を描いていく。

すべてを検分し終えた穂純は見るからに嬉しそうだった。

「すごいな。爺様に劣らないどころか数段上だ。花紋の桜も見事だし、気に入った」

「そう言っていたけると職人魂が歓喜に震えますな」

「だったらもう一振り追加で注文したいといったらどうだ？ 嬉しいか？ それとも困るか？」

口調は軽いが眼差しは真摯な様子で穂純が尋ねる。深水はそんな穂純の瞳をまっすぐ見返してにこりと笑った。

「注文されれば鍛冶屋はただ鋼を鍛えるだけのこと。お気遣いは無用です」

「では早急にもう一振り鍛えてもらおう。今度も斬鋼刀だ」

そうして二人は詳細を煮詰めていった。

ところで、と休憩のさなかにおもむろに切り出したのは深水だった。

「穂純殿はどうしてそこまでして頭領に尽くされますのか？」

「……なんだって？」

不思議そうに目を瞬いた穂純はただそう返した。

実際深水が言っている意味がわからなかったためでもある。

「冤罪で殺されかけてなお桜花に戻ってこられたということは、ひとえに頭領のお為かと思うとりますのじゃが違いましたかな」

穂純が常一に育てられたことを深水だけは知っている。いや、最低でも深水とあの場に潜んでいた一名は知っているというべきか。

「爺様に頼まれたからなあ……」

そのとき外からかすかに物音が聞こえたが、穂純はちらりとそちらを一瞥しただけで深水へと向き直った。

深水も穂純を倣うように一瞥するにとどめ、けれども心配そうに眉をひそめた。

「よろしいのですか？」

「今はいい。どちらにしろこれからしばらくはそれどころではなくなる。すべてが終わってから改めて話をするさ」

「きつと誤解されていますよ」

口を開きかけ、けれどもゆるく首を横に振った穂純は苦く笑った。
「そうだな。けれどもそれが今の俺の評価でもある」

先ほど穂純の一言だけを聞いて誤解して去っていったのは木槿だった。追いかけて誤解だと説明するのも手だろうとは穂純も思う。けれどもここで木槿を優先することが必ずしもいいことだとは限らない。

「俺はまだ木槿に信用されていない。だから今すぐ誤解を解くべく行動したほうがいいと思う。思っている。だがここで俺が生きていることを知られるわけにはいかないんだ。これがもて修正不可能な関係になってしまうなら、所詮俺と木槿は縁がなかったということだ。結果的には爺様の遺言を破棄してしまうことになるし、俺も誓いを破ることになる。だが優先順位だけは間違うわけにはいかない」

握り締めた拳に、穂純は決意を籠める。深水はそれを細めた瞳で見つめた。

「ワシはただの店番兼鍛冶屋でしかないので、自分が思うように行かれるのがよろしかろう」

「悪いな」

穂純は小さく笑う。それに対して深水は気にするなと軽く首を横に振った。

そしてそういえばと言っていたん席を外した深水は別の部屋から風呂敷に包まれたものを持ってきた。

包みの中を見た穂純は眉間に皺を寄せた。

「こういうことを平然としておいてどこがただの店番兼鍛冶屋なんだか……」

風呂敷包みの中身は、没収されていた穂純の私物だった。宿に残したままの着替えから、身体検査で密たちに抜き取られた隠し武器もすべて揃っている。ただ鉄扇だけがなかった。

「さすがに鉄扇は処分されていたようで、見つかりませんでした」
肩を落としてそう報告する深水の背中を、宥めるように叩いた穂

純は懷から二本の鉄扇を取り出した。

どちらも桜の花の意匠が施されていた。

まさしく穂純が特注したもの。だがそれがなぜか二本ある。

「そっくりですね。どちらも穂純殿の持ち物でしょうか？」

そこまで言ってから深水はハタと気づいて鉄扇から穂純へと視線を移した。

「もしやどちらか一本が穂純殿の鉄扇で、もう一本は前頭領の……」
弑したとも首を刎ねたとも口にすることを憚るように言葉を濁し
はしたが、深水が言いたいことは穂純にはつきりと伝わった。

穂純はしつかりとうなずく。

「そういうことだ。どちらも海の底に沈んでいたものだ。俺の相棒
にこういったものを拾ってくるのが得意な奴がいてな。そいつが見
つけてきた」

言いつつ鉄扇を広げていく穂純。

一つは多少泥汚れが付着しているもののまだまだきれいな状態だ。
残りの一方は泥とは別物の汚れの付着が多く、また中骨に損傷が見
られた。明らかに武器として使用された形跡が残っている。

「俺のはこちらだ」

穂純が示したのは泥を落として乾かせばもとのきれいな鉄扇へと
戻る最初の方だった。

「同じものをもう一つ作らせたんだろう。一見同じものとしか思え
ないだろう。だが俺はたいいてい最後に自分でひと手間かけることに
している」

そういつて穂純は要のそばかなめを指差した。よく見ればそこには細い
針が仕込まれている。

「爺様から教えられた。武器は買った時のままで使うものじゃない
と。特に桜花では注文した武器と同じ武器が注文主に内緒で作られ
て、花団の団員に配布されるから気をつけろ……とね」

刀だけはどうにもできないけれど穂純は肩を竦める。つまりは
刀以外は手を加えられるということだ。

もつともこれは穂純だけがやっているわけではなく、長く武器に携わる仕事をやっていれば必然的に身に付く程度の半ば常識的なことだ。つまりは自慢するようなことではなく、むしろできなければ狩人としても武人としても半人前ということになる。その程度の技ではあつたが。

ともあれそれは穂純のオリジナル武器だという証明にもなる。汚れと破損が酷い方の鉄扇はそうしたもの的一切なく、ただ注文時の形状だけで構成されている。いかにも穂純が犯人だと思わせられればそれでいいという考えがあからさまだった。

「密殿だろうか……？」

密の部分だけ声は出さずにただ口の動きだけで言つた深水は、けれど穂純の返答を受けて驚きに目を見開いた。

「そんなことが……」

この鉄扇の破損状況から推察すれば間違いではないだろうと補足をして穂純はいったん口をつぐんだ。

ざっと周囲の気配を探ると、素早く荷物をまとめる。

「そろそろ行つた方がよさそうだ。悪いが地下を使わせてもらうぞ」
そうして穂純は深水が開けた床下の扉から地下道へと降りて行つた。

扉を閉めなおした深水は朝食をとると鍛冶場へと向かう。

複雑な思いを抱えてそれでも職人としての務めを果たすために、いつしか雑念を振り払うように作業に没頭していった。

7話 誤解

この日は朝からざわめきが激しかった。

桜花全体に緊張が走っているような気配が立ちのぼり、人々は不安な気持ちを眉間に刻む。

宿屋通の最奥の宿の食堂では島の主だった立場の者と常連の狩人や傭兵たちだけが集められていた。

卓を叩くように手をついて立ち上がったのは密だった。

「結局情報が届いていないのはなぜなんだ!？」

密は周りを見渡すが答えを持つ者はいない。

「定期便は予定どおりに巡回している。遅れはない。荷物はきちんと届いている。ただ情報だけが塞き止められている。そうだな？」

これには荷受けの責任者と常連の一部が同意した。

「塞き止めているものに心当たりは？」

だが核心部分になると誰もが口を閉ざす。

そこへ肩に伝書鳩を乗せた竜胆が入ってきた。

「契約している情報屋たちは友ヶ島で全員始末されているようだぞ」
その一言にざわめきが大きくなった。

巡回船は猿島、橘花、友ヶ島、桜花の順に航行している。友ヶ島ということは桜花のひとつ前の島ということになる。

「あとから送り込んだ者たちもか？」

密と向い合せになる位置に腰かけた竜胆は神妙な顔つきでうなずいた。

「ああ、そうらしい」

「どうしてわかった？」

「大量の死体が発見されたということで問い合わせがきた。ほとんどの者は友ヶ島だが、あとから向かわせた者たちは猿島と橘花で消されているようだ。こちらからも問い合わせが来ていて人数も人相もびつたり一致した。ということ間違いはないだろう。俺たち

に知られたくない誰かの仕業だな」

「ということは……」

口を濁した密に代わって竜胆があとを引き継ぐ。

「この件に関しての情報を桜花まで持ち込めたのは穂純ただ一人ということになるな。武器は桜花に来るまでに駄目になったと言っていたから、敵は情報を持つものを誰彼かまわす始末している感じだな。ん、そんな危ない集団を振り払って穂純は桜花まで来たわけか。あゝあゝ、密が短慮を起こして早々に処刑したりしなけりやも」と詳しい話を聞けたかもしれないのにな」

言葉の上では悔しそうに密を責める竜胆だが、その表情は実に楽しそう。密をいたぶる材料ができて喜んでいるとしか思えない。

「そのことなだけどお」

口を挟んだのは蔓穂だった。

「本当に穂純ちゃんは死んじゃったの？　うちの情報屋たちを全滅させられるような集団を振り切って桜花まで来れるような穂純ちゃんが、縛られて海に放り込まれたくらいで死んじゃうと思うのお？」

密と竜胆は顔を見合わせた。

言われてみれば確かにと思わせる。

「誰か穂純を見たことのあるものはいるか？」

周りを見渡すが、やはり全員首を横に振った。

「穂純の生死を問題にするより、早急に武器を揃える算段をした方がいいんじゃないの？」

そうついいながら食堂へと入ってきたのは木槿だった。

頭領の登場に特等席が設けられる。といっても副頭領の密の隣に椅子を用意されたただが。

「護衛を撒いてどちらに行かれていたのですか？」

密の問いに木槿は軽く手を振った。

「いつもの海豚での見回りよ」

「頭領になられたからにはそろそろそれもやめてもらわないと……」
密の苦言に何度もうなずいて同意を示すのは、木槿の護衛の一人。

以前穂純が木槿に声をかけた時にいた、あの強面の男性だった。名を守人^{もりと}という。

「副頭領のおっしゃるとおりです。そろそろご自分の立場を理解してくださいと下のものに示しがつきません」

珍しく口を開いた守人の諫言に、木槿は肩を竦めてみせた。

「守人に従うわけじゃないけど、どのみち海豚での見回りはしばらくできなくなつたから安心してちょうだい」

「それはなぜです？」

代表で尋ねたのはやはり密だ。この場で許可を求めることなく気軽に発言できるのは、やはり頭領の木槿と副頭領の密の二人だけだった。もつともそこまで厳格に定められているわけではないので、必ずしも発言できないわけではない。先ほどの守人のように状況に応じて口を挟むものはそれなりにいた。

木槿は考えながら答えるように拳を口元にあてた。

「海豚が……なんだか様子がおかしいのよ。何かに怯えているような……、そんな感じなの。命令がきちんと通じなければ危なくて使えないわ」

木槿の言葉にその場にいた者たちは誰彼ともなく顔を見合わせた。「穂純の情報どおりというわけかッ」

吐き捨てるように言つた密の言葉が、ここにいる皆に共通する思いでもあった。彼らの表情からは、捕縛して牢にでも閉じ込めておけば、といった心境があきれるほど透けて見える。

そんな彼らを侮蔑の影を潜ませた瞳でそつと見渡した木槿だったが、瞬きとともに内に隠して頭領としての顔に切り替えた。

「いつまでも穂純にこだわっているわけにはいかないわ。早急に武器を用意して。これからは食料も日用品も届かなくなる可能性もあるのだから、切り詰めるように島全体に通達を出してちょうだい」

「はあゝい」

軽やかに答えたのは蔓穂だった。彼女は現在島長代理をしている。本来島長とは桜花で一番鍛冶屋としての腕が立ち、前島長からタ

スキを渡された年配のものがなることとなっている。もっとも対外的には鍛冶屋だと知られるわけにはいかないので、島長としての条件は『前任者に指名された年配の者』ということになっていたが。

そして現在その任についているのは深水だった。出店通最奥のあの店を任されるということは島長である証というのは公然の秘密であつた。

その深水を含めて全鍛冶屋は現在武器の製作に汗水を流している。何せ出来合いの武器がごとく買い占められていったので予備の武器が一切ない。

そこで手が離せない深水の代わりに一時的に蔓穂が島長代理としてこの場にいた。もともと前頭領立葵が強引に認めさせたものではあつたが、一応蔓穂は次期島長の立場にいたためこの状態は当然の処置だつた。

島民へは蔓穂の指示を受けた控えのものが伝達に走り、宿屋通と出店通へは密から指示を受けた者が同じように退席して知らせにいった。

「しかし、なんだな。猿島も橘花も友ヶ島も冷たいものだな」

隅にいた男がぼつりとこぼした言葉に他のものが反応する。

「そうだよな、自分たちだけ武器を大量に抱えて保身に走るんだもんな」

「そうそう。桜花だつてすぐに武器を大量生産できるわけじゃないんだから、ああまで買い占めずともいいだろうに」

「なんか自分たちが助かりさえすればいいって言われてるみたいで、いやな感じだよな」

これらの発言を耳にした木槿は爪でこつりと卓を叩いた。

「仕方ないわ。彼らだつて初めてのことに戸惑っているのだろうし。それでも少しでも多くの者が助かる道を模索しての行為なのだから、ここは彼らを責めるのはやめて私たちも多くの島民を守るために建設的な話し合いをしましょう」

そうだな、と密があとを引き継いだ。

「まずは食料の確保。次の便でどの程度食料が入ってくるかわからないが、まだあと一回くらいはまともな荷が届くかどうか、友ヶ島に問い合わせてみてくれ。この調子だと次で最後になるかもしれないからな」

「わかりました」

新たな命令を伝達に走る男を最後まで見送ることなく話題は次へと移っていく。

「食料もそう余裕はないし、桜花の要の武器も売るだけの余裕がないわけだから、この件が落着くまでのあいだ客たちを友ヶ島で足止めさせておくわけにはいかないのか？」

腕組みをしてそういったのは竜胆だった。頭の中であれこれ考えながら言葉を発しているのか、卓のどこか一点を凝視したままつらつらと口を開いている。

「それとも武器を持っている傭兵だけは招き入れた方がいいのか？」

「下手に新参者を招いても系統が乱れるだけで戦力にはならないだろう。今ここにいる者たちのように常連でなおかつ奥に何度も出入りしたことのあるような勇猛な狩人でなければ役には立つまい。とりあえず一時的に荷物以外は桜花への受け入れを中止して、今いる客も戦力外の者は早々に猿島へ送り出した方がいいだろうな」

密の言葉に皆がうなずいた。

そうした様子を見渡した木槿も軽くうなずき、友ヶ島と猿島へその旨を知らせるように指示する。

ほかのことはどうするかと木槿が腕を組んだところで、外から息せき切った男が駆け込んできた。

「頭領ー！ 奴らが！ 物見の者が奴らの姿を捉えたそうです！」

木槿は椅子を蹴立てるようにして食堂をあとにすると物見台へと一目散に走り出した。

密たちもあとへ続くようにして物見台へと向かった。

「どこ？」

物見台へ到着早々木槿は望遠鏡を覗く。

望遠鏡で見てすらまだ小さな点ほどでしかないが、確かにあれが侵略者の集団なのだろう。

手前のわずかに波立つように見える場所がたぶん操られている海豚たちだろう。

木槿にとって海豚は友であり仲間でもあるが、その海豚を盾や武器にする者たちがいることも話だけは聞いたことがあった。

やりきれなさを感じていた木槿の手元でギリリといった音がする。音で我に返って目を向けてみれば、望遠鏡を握る手に力を入れすぎて軋んだ音だった。

そつと深呼吸をして気持ちを表面上だけでも落ち着かせた木槿は体を反転させて背後に控える者たちへと向き合つと高らかに宣言した。

「全員戦闘配置につけ！」

頭領の号令に応えるように、そこかしこから関の声があがり島全体が一気に戦場の様相を呈した。

木槿の号令を受けて一斉に戦闘準備が進められていく。

親は子供たちを家の中に入れてすべての窓や扉を閉ざす。

外に出していた荷物もすべて建物の中に片づけて、移動の妨げにならないように通路を確保する。

物見台そばの砲台はもちろんのこと島のあちこちに設置されていた大砲に次々と大砲弾がこめられていく。

そうした状況を垣間見ながら、再び桜花へと上陸した穂純は混乱に紛れるようにして木槿のもとへと向かっていた。

（どうして本体を起動させないんだ？）

内心で首をかしげながらも穂純は、伝令の動きから木槿は中央の物見台にいると判断して急いでそちらへと向かう。そうしてようやく凜と背筋を伸ばしてまっすぐ前を見つめる木槿を見つけた。

「木槿！ 木槿、なぜ艦を出さない！？」

「穂純？ どうしてここに……」

思ってもみななかった穂純の登場に、驚いて振り向いた木槿の瞳がさらに大きく見開かれる。

「この、頭領殺しッ！」

甲高い悲鳴じみた叫びとともに穂純に浴びせられたのは、桶に汲まれた貴重な真水だった。

どこかに運ぶ途中で、穂純の姿を見つけて思わず逆上してしまっただといった感じだろう。

穂純はそう結論付けると、諦めたようにため息をこぼしながら雫を垂らすほどに濡れた髪を水分を絞り出しながら両手で掻き上げた。その姿を見た守人が信じられないといった感じで小さく後退る。

「桜坊ちゃん……？」

つぶやいた言葉は、発した守人自身だけでなく、物見台から降りてきていた木槿や密、竜胆に蔓穂といった主だった者の耳へも届いていた。

「まさか、穂純がああ『桜』だと……？」

眉間に皺を寄せて唸るように言ったのは密だった。

たしかに穂純が特注した武器のすべてには桜の花紋が入れられた。そして。

「あの刺青……か」

穂純を海に放り投げる前にすべての武器を没収するためにと身体検査をさせたが、その時に穂純の両耳たぶに桜の刺青が小さく彫られていたことには気づいていた。それどころか疑わしい箇所は念入りにとばかりにただの刺青と証明されるまで調べさせたので、密もはつきりと覚えている。

これまで髪に隠れていた問題の耳も、今は頭に撫でつけるようにして髪が後ろに流されているので、はつきりと耳たぶに施された刺青が見て取れた。

守人が感嘆の声を漏らす。

「母君によく似ておられる」

穂純はもう一度諦めたようにため息をついた。

「守人……だつたな。先代の島長の護衛頭が今度は頭領となつた孫娘の護衛か。ご苦労なことだな。だが今はこれ以上余計なことに時間を使う余裕はない。木槿、今すぐに艦を出せ」

最後だけ木槿に向き直つて発した穂純の言葉を理解できたものは、今この場にいる中では守人のような中年層以上のものだけだったようだ。

言われた木槿自身もぼかんと口を開けていたのだから。

「ねえ穂純。さつきから言っている艦つていったい何のこと？」

今度は穂純の方が驚いて目を瞠る。今の状況も忘れて思わず守人を怒鳴りつけた。

「どういうことだ守人！ 木槿が今の頭領だろう！？ 副頭領をも務めていながらなぜ継承が行われていないっ」

「桜ぼつ……桜様もご承知のとおり、先代の頭領立葵は武力でもつて頭領の座を篡奪しました。ですから正規の引き継ぎは一切行われておりません。そのため立葵すら桜花のことは表面的なことしか知りません。なので木槿様への引き継ぎも、当然立葵が知る範囲のこととでしか伝わっていないのです」

穂純は舌打ちをする。

「そういうことか。しかし誰もそのことに対して忠言するものはいなかったのか？ 受け継ぐものがいなくなれば秘宝も失われていくしかないんだぞ」

「それもやむなし。というのが長老たちの出した結論です」

どうにもならない感情を持て余すように低く唸りながら髪を掻き乱す穂純に対して、守人は最後通牒をつきつけた。

「最後の継承者は桜様です。そして継承者の内今現在も生き延びておられるのも桜様ただおひとりです。つまりこの件に関しましては現頭領の木槿様にも一切の権限はございません」

どうなさいますか。

そう言われて、他に何が言えただろうか。

ちらりと木槿を一瞥した穂純は高らかに宣言した。

「我は花団の先々代頭領——櫟いちいが一子、桜。竜王総領の正当な継承者なり。桜の名において地下の長老に命じる。一の竜王、桜花に火を入れる！」

命を受けて物見台に設置された鐘を特殊な間合いで鳴らしたのは守人だった。そして『桜』の存在を知っている島内でも比較的年嵩の者たち数人が走り去っていく。おそらく地下への伝令だろう。すぐに唸りを伴って桜花全体が震え始めた。

まだ若い者たちの口から小さく悲鳴が漏れる。

本当に何も知らないのか、と穂純は思った。

「ねえ、穂純。いったいどういうことなの？」

木槿が半ば睨むようにして穂純を見上げる。

「この桜花は廃船を再利用して作った島なんかじゃない。現役の軍艦だ」

「え？」

「つまり動くということだ」

今のままここに留まっていれば、桜花は集中砲火を浴びてそこでお終い。

敵艦の大砲と海豚の魚雷。動けなければ一切避けようもなく、あつという間に敵に乗り込まれてしまうのは必至だ。

「大量に武器を買い込んでいただろう？ あんな奴らに乗り込まれてみる、好き放題に惨殺されるぜ」

「大量の武器……？ それは友ヶ島とかが買って行ったんじゃ……」

「そんなわけないだろう。奴らは桜花へ攻め込むための武器を桜花で買っていたんだよ。だからほぼ無節操に買い漁っていただろう。」

桜花の武器を減らすのが目的だったのさ」

桜花は武器を売買している。巡回船に乗り込みさえすれば堂々と上陸できるし、武器も買える。だからこそ敵は海の上から巡回船に無理やり乗り込んで桜花へとやってきた。団体客の着物が湿っていたのは汗ではなく海水に浸かったから濡れたにすぎない。

武器を買い占めれば桜花の武力を減らすことにもつながる。まさ

に今桜花が立たされている局面そのままに。さらには島の様子まで直接目で確認できるというわけだ。

「今まで桜花そのものを占領しようとする者はあらわれなかった。だがあいつらはこのあたりの島のものじゃないから遠慮もない。最終的な目標は」

「奥の大陸……」

「そうだ。最後の大陸。死守しなければ彼らはあの地に住み着いて獣たちを一掃しようとするだろう。それはどうあっても阻止しなければならぬ。それが桜花を含めた要塞島四島の本来の務めだから」

穂純のもとに白い着物の青年がやってきた。

白い着物は地下の長老の使い——いわゆる伝令使でんれいしだという証だ。待っていた者の登場に穂純の肩からわずかに力が抜ける。

「桜様、長老より言伝です。そちらの物見台脇にあります伝声管をお使いください、と」

そういつて伝令使が案内した先にあったのは、装飾を施された一本の街路灯だった。

伝令使が手に持っていた鍵を隠し穴に差し込むと、全体が縦に半分に分れるようにして開いていく。

「そんな力ラクリが仕掛けてあったの？」

そばにいた木槿が目を丸くしてつぶやく。

街路灯の中に隠されていたのは、地下の長老たちと直接会話ができる伝声管であり、軍艦桜花の動力室へ直通で命令を下せる唯一の伝令手段だった。

「せんのう仙翁」

閉じられていた伝声管の蓋を開けて、穂純が長老頭の名を呼ぶ。

この名は個人名ではなく代々長老頭が受け継ぐ名前だ。だからどんな人間であれ長老頭の地位についてこの名を名乗る者であれば竜王総領桜の問いに答える義務がある。

返答はすぐにあった。

「桜様、ご健勝で何よりです。仙翁にございます」

この声には覚えがあった。

「久しいな仙翁。俺を知っている者がまだそこにいてくれて助かった。竜王桜花の操舵は任せても大丈夫か？」

「爺らも大きくなられた桜様のお声が聴けてうれしゅうございます。後程お姿もお見せくだされ。操舵については爺らに任せてもろって大丈夫。進路だけご指示くだされ」

「助かる。まずは微速前進、宜候。敵船団が近づく前に離岸して迎撃可能海域の確保だ」

「承知いたしました」

仙翁の返答とともに軍艦桜花がかすかに震え始める。翼のように広がっていた船体を閉じた艦は、やがて微速で動き始めた。木槿をはじめとした若い者たちはおっかなびっくりといった様子であたりを見渡している。若い世代の誰もかれもが桜花は廃船を利用していると思っていなかったのだ。こうして実際に動いているさまを見てもすぐには受け入れられないのだろう。

あたりをざっと見渡した穂純は、こちらを見ていた男を指し示した。

「あんた……、えっと名前は？　こっちに来てちよつと手伝ってくれないか？」

だが穂純の要請に対して男は一向に動く気配を見せなかった。

「おい？　どうした……？」

重ねて問う穂純に対して、あるうことがその男は足元にあった小石を掴むと穂純に向かって投げつけてきた。

8話 哀れな者たち

「桜だかなんだか知らないが、頭領殺しの言うことなんか聞けるかッ！」

小石は穂純の横に落ちただけだったが、その一連の言動が皮切りとなったようだ。その場にいた者たちの一部が穂純を取り囲むように近寄ってきた。ただならぬ気配を感じた穂純は、木槿の背中を押して守人の方へと逃がす。

そうしたことには目もくれずにただひたすら小石を手に取りながら集まってくる者たちは全員若い世代で、口々に穂純を責め始めた。「先代頭領の立葵様を弑しておいてよくもおめおめと桜花に戻ってこれたもんだ」

「何が桜だよ。そんな奴、俺らは聞いたことないぞ！」

「篡奪者め。今すぐ桜花から出ていけッ」

「木槿様も木槿様だよ。なんでこんな奴と一緒にいるのさ。さっさと捕まえて牢に入れなさいよ」

拾った小石を穂純に向かって投げつけながらわめき散らすのはいずれも三十代未満の若者だけだった。つまりは桜の存在を教わらずに大人になった者たち。要塞島桜花の本来の姿を知らずに育った哀れな者たちだった。

だが現頭領である木槿に対して暴言を吐くことまでは現在も許されてはいない。さすがに若いからと言って桜花にいながらそれすら知らないでは済まされない。

ピクリと震えた眉。緩やかに穂純から立ち上り始めるただならぬ気配に、けれど興奮した若者たちはそのことに気づかずがなり続ける。

気づいたのは周りで様子を見ていた中年層以上の者たちだった。あわてて若者たちの暴走を止めようと一步を踏み出そうとする。

一方。それまで当たりそうな小石だけ軽く避けていた穂純だった

が、距離が縮まるにつれてだんだん難易度が上がっていき、とうとう避けるだけでは済まなくなった。切り捨てるしかないかと穂純が腰に帯びていた刀に手をかけようとしたところで、視界を白い布が走り去った。

投げつけられた小石から穂純を守るためにその身を盾としたのは伝令使の青年だった。

青年のあとに続くようにしてわずかに遅れて盾となるべく穂純を囲んだのはいずれも年老いて鍛冶屋を引退した者たちだった。そして穂純が見覚えのある者ばかりでもあった。

彼らは宿の食堂を食べ歩いていた穂純へ気軽に話しかけてきた老人たちだったからだ。

「爺さんたち……なんでここに……」

「桜様、短気は損気と言いましたの」

「上に立つものが簡単に刃物をちらつかせてはいけませんな」

「それでは篡奪者立葵と同じになってしまいますぞ」

呵呵と笑いながら、老人たちは口々に穂純をいさめた。

その言動からして、最初から穂純を桜だとわかつていた風だった。

「どうして……」

なぜ自分が桜だと知ったのかと聞けば、顔を見ればすぐにわかったということだった。

「母君の芹様せりによく似ておられます」

一瞬ぽかんとした顔をした穂純は、次いでくしゃりと前髪を掻き乱した。そして目を隠すように手を当ててやや俯く。

「そんなに似ているのか？」

両親が亡くなったのは穂純が五歳の時。記憶はあいまいで、本当にそのとおりの顔をしていたのかと年々自信がなくなっていく。

そつとささやくように尋ねた穂純の声に、好々爺然とした風貌に似あうほほえみを浮かべた老人たちは、そうした心情を察して口を揃えたように一斉に答えた。

「ええ、そっくりですよ」

「……そうか。ありがとう」

みつともなくも湧き上がりかけた涙をこらえると、穂純は一度深呼吸して顔を上げた。そしてゆつくりを周囲を見渡したあと、木槿へと視線を向けた。

一瞬迷うように老人へと視線を戻した穂純は、しっかりとわずく老人たちの後押しを受けて再び木槿へと視線を固定する。

「桜花花団頭領木槿」

凜とした声での宣言だった。

「竜王総領桜の名のもとに命じる。軍艦桜花にて、大陸竜を狙う賊を撃退せよ。殲滅する必要はない。だが二度と刃向う気が起きないように確実に叩きのめせ！」

はつきりと言い切った命に、けれども明確な返答はなかった。木槿からはただ戸惑う気配が漂うのみ。

「木槿？」

ほんの少し助け船を出すような形で名を呼んだ穂純だが、一向に応える気配がない。穂純は眉間に軽く皺を寄せた。

「木槿。お前は花団の頭領ではないのか？」

「い、まは、私が頭領だが……」

ようやく答えた木槿だったが、歯切れは悪く、到底理解しているとはいえない。

仕方なく穂純は近くにいた密を呼ぶ。

「桜花花団副頭領密。お前ならばできるか？」

密は穂純から命じられることにいささか嫌悪を示しているようだったが、問いには答えた。

「軍艦桜花については少しは聞いている。実際に動かしたことはないが、操舵自体は長老がおこなってくれるようなので戦略が得意なものが補佐についてくれさえすれば副頭領の権限を持って動かすことは可能だ」

「では副頭領密には私が離艦している間、艦長代理の任を命ずる。補佐については――」

穂純は伝令使の青年を見た。

「誰か適任者を推薦してくれるか？」

伝令使は軽くうなずいてから慇懃に頭を下げた。

「はい、畏まりました」

ところで、と口を挟んだのは穂純を取り囲んでる老人の中の一人だった。

「桜様はどちらへ？」

穂純は軽く顎を引いた。

「ああ、俺……私は先に行く」

「先と申しますと？」

「鯨に乗って、賊が魚雷として使っている海豚を蹴散らしてくる。だから準備が整い次第迎撃区域まで追いかけてこい」

そう伝えた直後。一瞬の無音ののち、一斉に抗議の声が上がる。

「桜様！」

「海豚魚雷を自ら蹴散らすなど危のうございます」

「どうしてもとおっしゃるなら我らにお命じくされ」

「そうですね。老い先短い我らが先陣を務めさせていただきます」

口々に懇願する老人たち。

そんな彼らをそつと口元に苦笑を浮かべて見渡した穂純は、表情を引き締めると口を開いた。

「爺たちは次代の長老候補だろう。今回がちょうどいい機会だ。下へ行って直接桜花の中枢を見て、操舵方法も教わってくるといい」

伝令使の青年を振り返って確認すれば総領の命めいであれば誰も文句は言わないということだった。

「そういうことだ、今すぐ地下へ向かえ。命令だ」

最後に一言付け加えたのは効率と優しさからだった。

老人たちもそうした穂純の思考は安易に読み取れたようで、気遣いは無用と言いたそうだった。けれども正式に命令を下されては従わないわけにはいかない。ここで彼らのような年嵩の者が一番に従わなくてはほかの者——特に若者への示しがないからだ。

しぶしぶながらも了承の意を示した老人たち。

穂純は軽くうなずき返すと木槿へと向き直った。

「花団頭領木槿。お前は立葵を殺した犯人を見つけ出して捕らえよ」
あたりが再びざわめきに覆われる。

「前頭領を弑したのはお前だろう」

声を発したのは最初に穂純に石を投げつけてきた若者だった。

未だに穂純の立場を理解していない。いや。しようとしていない
といったところか。

愚かなことだ。穂純はそう思う。けれど穂純とて間違いがないわけではない。誤りなど幾度となくおこない、たぶん今やっていることも絶対に正しいとは言い切れない。

それでも。

やましいことなど何もしていない穂純はしっかりと背筋を伸ばしてまっすぐに前を向く。

そして懷から取り出したのは、二本の鉄扇だった。

親骨の柄はどちらも桜の花。ほぼ同じデザイン、同じサイズ。穂純が桜花の出店通で特注し、木槿が代金を払った鉄扇だ。

ところが注文したのは一本であつたにもかかわらず、ここには二本ある。

なぜか。

店側が依頼主に内緒で余分に作っていた以外にありえない。

そしてそれは顧客情報を悪用した証明にもなる。

ましてやそれが犯罪に使われたとしたら。あとは言わずもなだ
ろう。今回がそれなのだから。

取り出した鉄扇を穂純は両手で持ってゆっくりと広げる。

「右が私が特注した鉄扇。左が立葵殺害に使われた鉄扇だ」

掲げられた二本の鉄扇。穂純の左手にある鉄扇は赤く染まっていた。赤いものが何かなんてことはいまさらだ。穂純ははつきりと殺害に使われたと言つたし、立葵は首を刎ねられて絶命したのだから
「そんなものを見せびらかしてどうしようというんだ。ようやく自

分が殺したと認める氣にでもなったのか」

再び声を荒げたのはあの青年だった。だが。

「海人^{かいと}！ やめなさい！」

ここでようやく木槿が頭領として声を発した。

木槿の制止の命を受けて、さらに言いつのろうとしていた海人はいったん口を閉ざした。けれども頭領である木槿直々の言葉であったとしても、すでに興奮状態の海人にとっては時すでに遅しといった感じで理性を取り戻すことができなかったようだ。

一瞬の間を置いて結局は海人の口は開かれた。

「こんなやつをかばうなんて、木槿様はどうかしてしまっただんじやないんですか。それともなんですか。すでに可愛がられて骨抜きにされて……」

そこまで言ったところで海人の左頬に一筋の朱線が走った。やや遅れてそこからゆっくりと鮮血が滲み始める。

ここへきてようやく海人も頬から伝わる違和感に気づいたようだ。むしろじわじわと痛みが伝わってきた頃合いかもしれない。

呆けた顔のままゆっくり左手を持ち上げた海人はそっと指で触れようとする。傷口にかすかに指先がふれた瞬間走った痛み、反射的に顔をしかめて手を放す。視線を向ければ指先には少量の赤い血がついていた。

いったん顔をあげて穂純を一瞥した海人はもう一度指先を見つめ、次いで再び頬の傷へと手をやるが今度は傷には触れずに微量に流れる鮮血を指で掬い取った。

改めて血の付いた指先を見つめた海人はのろろと振り返る。日差しを受けて小さく光った場所をよく見ると、建物の外壁に突き刺さった棒手裏剣だった。

穂純はといえば、そうやって海人が呆けている間にすぐそばまで行き、海人が顔をもとに戻すところにはすでに閉じていた自身の鉄扇を海人の顔面に向かって突きつけていた。

前に向き直れば目の前には剣呑な表情の穂純と突きつけられた鉄

扇。こんな状況になつていれば海人でなくとも驚くことだろう。

目をいっばいに睜つた海人は、未だぼうつとした様子ではあつたが徐々に思考も働き始めたようだ。少しずつ眼球が動き始め、周囲の状況を把握しようとしている様子がうかがえる。やがて何をどうしていたのかを思い出したのか、焦点の戻つた海人の瞳はまっすぐ穂純をとらえた。

「凶星か？」

ここまで来てなおこんな考え方しかできない海人を穂純は胸中で嘲笑いながら、ただ突きつけた鉄扇をわずかに開いた。

途端に海人の肩が跳ねる。

一応鉄扇の使い方基礎はわかっているようだ。

鉄扇は親骨に鉄を用いることにより棍棒の代わりにも盾の代わりにもなる。そして立葵の例でもわかるように広げた扇は刀の代わりにもなる。穂純特注の鉄扇はそういう風に使えるように刃を仕込んであるのだ。

海人は小さく開いた口を何度も開閉するように動かす。震えているようにも見えるそれは、事実震えも混ざっているのだろうが、海人の心中の葛藤がそういった形で表れているのだろう。穂純に対して文句を言いたい。しかし殺されたくはない。立葵を殺したのが穂純だと信じきっている海人にしてみればそう思うのも当然のことだろう。

そうした様子を静かに眺めていた穂純はようよう口を開いた。

「どうした。ようやく自身の立場に気づけたか？」

わずかに口角を持ち上げた穂純は、逆に目を細めた。

「仮に私が立葵を殺したとして。なぜこそそしねければならない。私が身分を明らかにしさえすれば、それこそ公開処刑も思いのまま。相手が花団頭領であつたとしても竜王総領の前にはただの部下の一人にすぎないというのに」

くつり、と穂純がのどで笑う。

「竜王総領の名のものであればどこの誰をどんな理由で殺そうとも

一切咎められることはないというのに、なぜわざわざ闇討ちなどという面倒な手順を踏まないといけない。しかも殺された状況を鑑みるに、状況を再現しようとすればどうしても私が立葵と閨事をおこなわざるを得ないことになる」

仮説であつてすら不本意な事柄にあからさまに嫌悪を示しながら吐き捨てるように言う。

「なぜ私が立葵に押し倒されなくてはならないつ。そうした状況がありうると思うのか。そんな当たり前のことすら考えつかない人間は花団には必要ない。もう一度桜花住人の立場と意味の基礎から花団の役割までしっかりと学びなおしてこい！」

パシリと華やかな音を立てて穂純が鉄扇を閉じる。それを合図に海人は両脇に立っていた人物に両腕を拘束された。海人のように穂純を取り囲んで悪態をついていた若者たちのそばにもそれぞれ二名ずつ花団の団員が待機しており、穂純が軽く鉄扇を振れば、いつせいに両側から腕を拘束してどこかへ連行していった。

しばらくのあいだそれを見送っていた穂純は小さく息を吐き出すと踵を返して木槿のもとへ向かった。

まずは木槿のそばに控える守人に一言あいさつをする。海人たちを連行していった花団団員を招集して拘束を指示したのは守人だったからだ。木槿の後方へ控えていた守人が実際に伝令を飛ばしている場面を穂純は視界の端にとらえていた。

「守人、助かったよ。ありがとう」

守人は無言で目礼した。

そして改めて穂純は木槿へと向き直った。

「木槿」

穂純はただ名前を呼んだだけだが、頭領としての役目を全く果たせなかったという負い目があるからか、木槿は恥じるように目を伏せた。それでも周囲に大勢人が残っている中で下を向かないだけの矜持はあるようだ。

穂純は左手に持っていた偽物の鉄扇を木槿に手渡した。

「私の鉄扇と一緒に捨てられていた。これで真犯人を捕らえるように」

穂純自身の鉄扇はこれからの戦闘で使うことになるかもしれないからこのまま持つていく。

そして一度咳払いした穂純は改めて口を開いた。

「それから蔓穂と竜胆の二名を見つけ次第捕らえよ」

この命により周囲に再びざわめきが走った。木槿もどういことかと穂純を見返す瞳に陰が宿る。

「どういこと？」

穂純はまた守人に目配せするが、守人は目を伏せて小さく首を横に振った。

掩護は得られないようだ。穂純は意識して息を吸った。

「蔓穂と竜胆がこの場にいないのはなぜだ？ 緊急事態には頭領のもとへと集結する。これは前頭領の養い子である彼らにとつて知らないなどという戯言で片づけられるような不手際ではないことはわかるはずだが？」

責めるような口調になってしまいが、ここはきちんとけじめをつけないといけないだろう。

穂純はそう自身に言い聞かせて言葉を紡ぐ。もちろん公の場では言えないことは多々あるので、そこには注意を払って。

「それだけでも十分捕縛理由になるだろう」

そう言い切れば、不本意だという気配はわずかに残しつつも木槿にも今ここに二人がいらないという状況が異常だということには気づいたようで、さっそく花団団員に搜索の命令を下した。

そのあいだ穂純は伝声管のそばに立つ櫛へと視線を移した。

白い着物を着ているものの先ほどの青年よりはわずかに年嵩に見える。穂純の視線に気づいたらしい青年は、いったん櫛との話を中断して穂純に体を向けると丁寧に一礼した。穂純はそれに軽く顎を引いて応えた。

（これでとりあえずやれることはやったか？）

改めてもう一度周囲を見まわした。

そして穂純は最後にもう一度伝声管のもとへと向かう。

「密、どうだ？ 行けそうか？」

「ええ、もともと私がすることはほとんどありませんし。問題ありません。位置は……」

周囲の目もあるからかきちんと立場をわきまえた物言いです。返しながら密は補佐の青年が差し出した海図を指し示す。

「このあたりでいいですか」

そこはちょうど穂純が考えていた海域だった。

「ああ、それで問題ない。それじゃあとは頼んだぞ。適当な頃合いを見計らって戻ってくるが、とりあえずここから大陸側には絶対に入らせないようにしろ。大砲の使用は適度に。そのあたりはお前たちに任せる」

そういつて穂純は密と青年を見やった。

二人はうなずいて了承の意を返した。

「それじゃ行ってくる」

さて行くか、と穂純は刀の位置をしっかりと調節し直して歩き出す。

「穂純？」

後方から聞こえる木槿の声。けれど穂純は立ち止まることはしなかった。もっと手慣れたものならば不安を感じさせることなく立場を守ってやれたかもしれない。けれど穂純はほとんど人と接触しないまま成人してしまったため、そういった人付き合いなどの面では成長が乏しい。体は大きくなったし、戦い方は教わった。だがそれ以外はからつきしと言ってもいいほどにしかできない。

胸中で自嘲の笑みを浮かべた穂純は、少しだけ背後に視線をやった。

かすかに口元に浮かぶ笑み。だが穂純のそのわずかな笑みが木槿に何らかの作用が働いたようだ。わずかに目を見開いたあとは、す

ぐに表情を引き締めるように顎を引く。その様子を戻し際で捕らえた穂純は今度こそしっかりと笑みを浮かべた。

（さて行くか）

同じ台詞。けれども今度は力強いものだった。

微速とはいえ動いている軍艦桜花から鯨に乗り移るにはそれなりの場所が必要となる。幸い桜花にはこういう場合に備えた専用の乗り場が設えてあったので穂純はとりあえずそこへと向かった。

桜花のそばに待機していた鯨は穂純の呼びかけに応えてすぐに姿を現した。穂純の指示どおりに鯨は微速前進している桜花と速度を合わせて並走しながら徐々に距離を縮めていき、頃合いを見計らって穂純が飛び乗る。あとは手綱をつかんでいったん減速して桜花から離れ、そして迂回するようにしていつきに抜き去った。

あとはまっすぐ敵の前衛部隊ともいえる海豚魚雷のもとへ向かうべく、穂純は鯨の手綱を操った。

9話　そも竜王とは

穂純を見送った木槿と守人が最初に向かったのは島長である深水のところだった。

今は武器――主に刀――の製作をおこなっており、引退したものを除いた全鍛冶屋がわずかな休憩だけをはさみながらひたすら炎と格闘している。

木槿たちが深水を訪ねたときはちょうど休憩に入るところで、全員が汗を拭いていた。

最初に気づいたのは深水だった。外に人が来た気配を感じたのだろう。深水は扉を開けると同時くらいに視線を向けてきた。

「これは頭領。どうされました。鍛冶のほうは順調ですよ」

深水が指し示した先には鍛え終わった刀が卓の上にずらりと並べられていた。

その横に積まれているのは研ぎまで終えていつでも使えるような段階にまで仕上がった刀だ。

深水が店番をしていた出店通奥の店内に置かれていた大量の見本も、すべて研げばすぐに使えるものばかりだった。そうした武器も目一杯活用するべく専用の研ぎ師たちが片っ端から研いでいった。

まずは数を揃えること。

できるだけ多くの島民に武器を持たせる。そうすれば敵から武器を奪って増やすという足掛かりにもなる。

「聞きたいことがあるんだが、しばらく席を外せるか」

そばまでやってきた深水に木槿が尋ねた。

何を聞かれるのかわかっているようで、深水は軽くうなずくとほかのものへ食事を済ませてくるように伝える。そのあとは鍛え終わった刀の研ぎをおこなって、とにかく使える武器を増やすようにと指示をした。

「お待たせしました。ではどちらで伺いましょうか」

木槿は後方に控えている守人を振り返った。

「どこがいいかしら」

守人は口元に拳を当ててしばらく考える。

「深水様のお店で、というのはいかがでしょう」

その意見に木槿も深水も同意し、即座に移動する。ただし途中で宿の食堂によっておにぎりを三人分用意してもらった。おにぎりであれば簡単に食べられる。今のうちに何かを口にしておかないと今度はいつ食べられるかわからない。櫛のところへもおにぎりを届けるように伝えて、今度こそ出店通の奥にある店へと向かった。

いつものように深水がお茶を用意する。あたたかいうちにと先におにぎりを食べることにした。三人ともにそれぞれ立場があり一度呼び出されれば簡単に休憩が取れなくなるかもしれないからだ。なかでも木槿は呼び出される確率が高い。時間を節約するために、食べながらどうやって話を切り出そうかと考えていた。結局は無意味な努力となったが。なぜなら食事を終えて一息ついた頃に、先に話を切り出したのは深水だったからだ。

「それで聞きたいことというのは、竜王の総領のことです。よろしいですか」

木槿は小さくうなずいた。

「ええ、そう。総領のこともこの桜花もことも、私が知らないことのすべてを教えてちょうだい。どうして副頭領の櫛が教わっていて、頭領の私が何も聞かされなかったのかも」

そも竜王とは。

竜王とは最後の大陸「竜」を守る組織の名称である。

はるか昔、この世にはたくさん大陸があったという。だがその時代を知る者はすでにいない。

いったい何が起こったのか。

それを知る者すらもいない。

ただ言い伝えによると、あるとき突然大陸が割れていくつかの大

島へと変った。さらには大島もいつしか浸食されて小島へと。

唯一残されたのが大陸竜。もつとも以前の大きさからすればとても大陸とは言い難いが、それでも現存している中では飛びぬけて広い陸地には違いなかった。そのまま大陸と呼ばれている。その大陸の形が竜に似ていたからそう呼称されるようになったらしい。

ここで問題になったのが竜の所有権および利用方法だった。

結局人は大陸以外でも生きていけた。

小島であっても、船などの人工島でも。

だがほとんどの動植物はそういうわけにはいかなかった。大量の栄養素を含んだ水分を蓄えられる陸地がなければ大量の植物が育たず、それらを食料にしている草食動物が生きていけなくなる。草食動物の数が減れば当然それを捕食している肉食動物も絶滅するしかなくなる。そして動植物が全滅してしまつて困るのは人間も同じなのだ。

そこで昔の人々は考えた。

最後の大陸を基本的に動植物専用の住処とし、人は自然島や人工島に散らばつて生活することにしよう、と。人が農作物の栽培のために大陸を利用するのは一部の沿岸だけにしよう。

とはいえ無断で大陸に住み着こうとするものは当然出てくるもの。だからこそ大陸竜を守る者が必要になった。

そうして四つの要塞島が作られた。そして立場の似ている四天王になぞらえて、竜を四方から守る王——竜王と呼ばれるようになる。

一の竜王、桜花。

二の竜王、猿島。

三の竜王、橘花。

四の竜王、友ヶ島。

猿島と友ヶ島は自然島で、橘花と桜花が人工島だ。

「ここまでは宜しいですか」

この世界の基本であるため当然理解しているであろうが、順を追つて説明していったほうが深水としてもやりやすい。また万が一齟

齧があつてはこれから先支障が出てくる可能性もある。そのため深
水はいったん話を止めて木槿の認識具合を確認した。

頭領といえは本来であれば他のものより表はもちろんのこと裏の
情勢まで把握していなければならぬにもかかわらず、立葵はそれ
を木槿に教えていなかった。もつとも裏に関しては立葵も知らない
ことが多かったが。

ともあれそうした状況を鑑みるに立葵が木槿に対して故意に間違
った知識を植え付けている可能性も否定できなかったため、まずは
子供でも知っている基礎から入っていったのだった。

誤った知識認識は早々に修正をしておかなければ、木槿があとあ
と困ることになる。立葵が亡くなつた今であればそうしたところで
だれにも文句を言われはしない。むしろ団員や島民から不信を抱か
れないうちに必要な知識を詰め込む必要がある。

「ええ、大丈夫よ」

そのあたりのことは木槿も理解できたため、逆に深水の気遣いに
感謝していた。

「それでは今度は竜についてです」

大陸竜へは人間は居住のための上陸は原則禁止だ。だが何事も例
外が存在する。

一部の沿岸地域で食料となる農作物の栽培を担当している者と、
狩りを担当している者だ。

農作物の栽培は許可を得た人間だけが携わることができた。夜は
動物に畑を荒らされないように見張るものが数人つく。この見張り
は主に狩人が交代で担当していた。

狩人は農作物の夜間警護以外に、大陸の奥へ入って行って食肉用
の獣を狩ったり毛皮用の獣を狩ったりする。そしてごくまれに無断
で上陸している者を捕らえたりもしていた。

狩人たちは格闘の要塞島とも呼ばれている橘花で狩人としての登
録を済ませ、仕事が振り分けられたらそれに従い狩りをする。竜に
上陸する場合、依頼された仕事と個人的な目的のための二種類があ

り仕事の内容によってそれぞれ上陸期間が定められており、それを過ぎると不法上陸とみなされて他の狩人の狩りの対象にもなる。

そうしたように狩人はかなりの激務であるがそれでも希望者があつたと絶たないのは期限が限られているとはいえ大陸に行けること。そして大物を狩ることができれば一生暮らしていけたからだ。

大物とは恐竜とも呼ばれており、大陸竜の主とも考えられているが、この恐竜がたまに人の領域である沿岸部付近に迷い込むことがある。そうすると貴重な食料を根こそぎ荒らされてしまう。

そこで恐竜が一定範囲を超えて沿岸部に近づいた場合は狩つていいことになった。もちろん昔は奥へかえす方法を考えていたが、有効な手立ては何も見つからず人間ができることといえは狩ることだけ。それですら命がけなのだから。

「基本的には竜王の総領とは要塞島四島の長でもあります、そうした狩人をまとめる立場の頂点でもあります。そのため武器の桜花よりは、狩人の登録や鍛練がおこなわれる格闘の橘花に拠点を置かれているため他の竜王——要塞島では認知度が低いのです」

そうした状況もあつて竜王総領の存在を知っているのはせいぜい各要塞島の島長たちのような代表的立場に座しているものの一部だろう。

だからこそ余計に立葵のように先代を弑して桜花頭領の地位を篡奪したような輩では知る由もない。

原則強いものが頭領の地位に就くという根幹により立葵の頭領への就任は一応認められたものの、肝心の知識までは篡奪者への継承に難色を示す者もあり受け継がれなかった。

そして立葵自身は頭領に与えられるすべての権限を得られなかったことに気づきもしなかった。

「ですからまだワシら教えられるものが生きてる間に木槿様へと頭領の座が移ってくれて助かりました」

深水が苦く笑う。

「それに桜様のことも。今回の件はちょうどいい機会だったと思う

ています」

「桜……様は……」

言いづらそうにする木槿に深水が助け舟を出した。

「ここにはワシらだけしかいませんから、これまでどおり『穂純』で構いませんよ。桜様がこの場にいらしてもそうおっしゃるはずですよ」

本当にそれでいいのかと木槿はわずかに見開いた瞳で深水を見返し、次いで守人に視線を向けた。

守人も同様にうなずいたため、木槿はいったん唾を呑みこんでから口を開いた。

「穂純は……いつ竜王の総領を継いだの？」

「桜様が三歳の時です。先代の総領は桜様の祖父にあたるかたで、おもたか沢瀉様とおっしゃいます。沢瀉様が病で伏せられた際に桜様をご指名になりました」

その時から穂純には秘密裏に護衛がつけられた。

秘すべき立場だった故、護衛の者たちは花団を引退して表向きは隠居していた老人が選ばれた。先代の島長である常一とともに穂純を匿って桜花から逃れ、そして総領として育て挙げた老人たちだ。

竜王総領を穂純が継いだことは一部の者しか知らなかった。そのためただの子供と思われた穂純に対しての追っ手もゆるく、立葵の魔手から逃れることができたことは僥倖だった。

「え？ でも穂純が先々代頭領櫟様の一子なのでしょう？ 通常であれば穂純が次代の頭領と思われて余計に狙われるものじゃないの？」

深水は悲しげに微笑むと緩く首を横に振った。

「当時次代の頭領に指名されていたのは島長常一様の初孫でした」

穂純の両親である櫟と芹はなかなか子に恵まれず、島長の初孫が年齢的にも次代としてちょうどよかったことからそちらへと候補の声が上がった。

実際にはある程度の年齢になった時の力量次第でほかの候補へと

移る可能性はあるものの、第一候補は次代の頭領として幼いころから鍛えられるため実際に入れ替わりがおこなわれることはめったにない。

「それならなおさら……」

木槿の疑問はもつともだ。

要するに木槿としてはなぜ自分が義兄義姉を差し置いて頭領となったのかが不思議で仕方がないのだから。

その人物か。はたまた他の候補か。もしくは遅れて生まれてきた穂純か。

改めて考えれば頭領候補は次々と浮かんでくる。木槿は奥歯をかみしめながらややうつむき加減になった。

「理由は簡単。立葵に殺されたからです」

どこことなく冷ややかな声音で静かに告げられた内容に、木槿ははじかれたように顔をあげて深水の顔を見返した。

「どう……やって……」

実際のところ立葵は飛びぬけて技量があったわけではない。もともと花団では第三位の地位だった。穂純の両親を討ただけでも相当の苦労があったはずだ。

しかし木槿の予想に反して頭領夫妻、花団第二位の副頭領、次代の頭領候補たち。彼らをいつせいに死へと追いやった方法とはいったいなんなのか。

目を伏せて木槿から視線をそらせた深水がわずかに躊躇いを見せつつもそつと口を開いた。

「木槿様がお生まれになったからです」

立葵が凶刃を振るつたのは、木槿の誕生を祝う宴がおこなわれた直後だった。みなが連日の酒宴に酔いしれて深い眠りに入ったすきを突かれたのだった。

木槿はただ口元に手をあてただけだった。何も言葉が出てこない。無意識にかしいだ木槿の体を支えた腕があった。反射的に木槿はその主を振り仰いだ。そこにいたのは護衛の守人だった。

あたりまえであるはずなのに、木槿はなぜか落胆を覚えた。いつも背後で木槿を守り支えてきたのは守人だった。けれどこのときの木槿はその腕を穂純のものと勘違いした。穂純は現在海豚を蹴散らしに行っているはずなのに。

自身の不可解な行動に疑問を浮かべていた木槿は、そのことを思い出した。今は大事な時。時間の猶予はない。すべては終わってから考えればいい。

奇しくも穂純と同じことを考えて、木槿はしっかりと体勢を整えた。

「それで」

かすれた声。木槿は新たに注がれたお茶でのどを湿らせた。

「もともとの頭領候補たちがすべて亡くなられたから、やむなく私が候補に繰り上げられたわけね」

まとめたつもりの木槿の言葉はけれど深水によって訂正された。

「いいえ。殺されたのは筆頭候補だけ。あとの候補の方々は生き延びて立葵の養子とられました」

正確には頭領夫妻と副頭領。そして島長の息子夫婦とその第一子で次代の頭領候補。主だった立場にいるもので殺されたのはこれだけ。

しかし立葵が彼らの命を奪ったことは極一部のものしか知らない。それは逃げた常一たちを、いもしない盗賊と見せかけたからだ。生まれたばかりの木槿を最初にとらえて人質のように扱い、祝いの酒に酔い潰れていた頭領たちをその手にかけて立葵。

自身の立ち位置を固めるためにも、生かしておいた頭領候補たちをうわべだけの慈悲でもって養子にして桜花の島民に立葵が新たな頭領の座に就いたのだと知らしめた。

「密様は頭領候補として武術以外の教育も多少受けられておりましたので、竜王総領の存在についても少しは聞いていらしたはずです」
「ああ、それで……」

ようやく副頭領の密だけが知っていることに対して納得がいった

木槿だった。

「それじゃ穂純の正体——というのかしら。総領について知っているのは島長と長老がたと穂純の盾になっていた老人たちと密だけ……ということかしら」

「桜様が常一殿に育てられたということであれば蔓穂殿もご存知です。桜様が斬鋼刀の注文に来られた際にその物入れに隠れて話を聞いておられましたから」

そういつて深水は彼らが腰掛けていた卓のそばに置かれていた物入れを指し示した。

「あのときどんな気持ちで蔓穂殿が聞いておられたのかワシにはわかりかねますが、行動を起こすきっかけとなれたことは確かなのでしょうなあ」

「どうということ？」

卓の上に置かれていたまだ血痕の残る鉄扇を見つめながら深水が答えた。

「この鉄扇で立葵を弑したのは蔓穂殿でしょう」

10話 明らかになったもの

「え？ それはどういうこと……」

木槿が混乱するのも無理はない。

幾分躊躇するそぶりを見せた深水だったが、頭領である木槿には表も裏も知っている必要があると思っっているため、結局は若干重い口を開いた。

「蔓穂殿は立葵の情婦でした」

「……え、でも、姉さんは竜胆兄さんと婚約して……」

「ええそうです。そして竜胆殿もそのことは了承しております」

ますます混乱してきた木槿を氣遣った守人が熱いお茶を入れて差し出した。

「木槿様これをお飲みになつていったん気持ちを落ち着けてください」

木槿はとりあえずいわれたとおりに湯呑を手に取り息を吹きかけた。ゆっくりと熱いお茶を飲み下すとたしかに揺らいでいた気持ちが少しずつ静まってきた。木槿は桜花花団の頭領。何があっても揺るがずに冷静な判断をおこない、またそれを花団団員や桜花島民に示さなくてはならない立場にいる。

いまだ未熟なままで継承した頭領という地位。深水と守人しかない今ならば多少のことは目をつぶってもらえる。けれどいったん外に出れば年齢や経験は一切考慮されずに、みなが納得する過程と結果を示さなくてはならない。

また一口お茶を口に含む。そうしているうちに木槿はいつしか穂純のことを考えていた。

（穂純は……怖くないのかしら）

先ほどの穂純を思い出す。凜とした声で背筋をまっすぐ伸ばして竜王総領としての名乗りをあげていた。

木槿を含めてその存在を知らない者が多くいる中で道化とも受け

取られかねない行動をおこなえた原動力とはいったいなんなのだろうか。

人に慣れていないと穂純自身の口から聞いていた。直接会話を交わしたのはほんのわずかな間だけ。その後は少し距離を置いたところから気づかれないようにそつと観察していた木槿は、その言葉は真実だろうと思っている。

時折懐かしそうな目をして周囲を眺めていたのは、穂純が幼いころに桜花に住んでいたからだっただろう。迷いの道であるはずの桜花で目的の場所へ容易に行き来できていたのも、彼が桜花の内情を知っていたからに違いない。

侵入者を防ぐための迷路とはいえ住んでいるものがあるのだから、住人が迷わないための規則や目印はそれなりにある。だからこそ出店通と宿屋通以外にはよそ者は近づけないようにしていた。花団には勝手に路地に入り込んだよそ者を捕まえて適切な処分をする役目もある。

名目上は島長から依頼を受けてということになっているが、その盟約が結ばれたのはもうずいぶんと前の話になる。一人の寿命よりもさらに昔の話だ。

「穂純は……」

ポロリと零れ落ちた言葉に誰あろう木槿自身が驚いた。思わず手を口に当てる。

「頭領？　桜様がどうかされましたか」

いぶかる深水に木槿は首を横に振って何でもないと答えた。

ただ、と小さくつぶやく。

「穂純もまだ二十一歳でしょ。総領という立場をどう思っているんだろうと考えていただけ」

深水と守人は意味ありげに顔を見合わせた。

「どうしたの。なにかおかしいことを言ったかしら」

二人の様子になぜかいたたまれない気持ちになった木槿は幾分すねた声音で問いかけた。

深水は柔らかな笑みを浮かべた。

「いいえ、そうではありません。木槿様が頭領としての務めを果たそうと努力しておられる姿には感服しておりますし、本来の取り決めに立ち返ることもワシとしては歓迎しておりますので」

「本来の取り決めって、どういうこと？」

「もともとは木槿様の許婚は密様ではなく桜様だったということですよ」

密を木槿の許婚にあてがったのは立葵だった。蔓穂と竜胆も同様だ。木槿と密には花団を、蔓穂と竜胆には桜花——つまりは島長の権限を手に入れさせる。そして最終的には彼らの養父である立場でもって立葵がそのすべてを掌握しようとした。

軽く握った拳を胸元にあてて木槿はややつむぎ加減になる。

「穂純とのかを決めたのは私の両親だったの？」

「残念ながらそこまではワシらではわかりかねますな」

誕生を祝う宴のさなかに木槿の父親が酔いに任せて口にした場面に深水たちがたまたま立ち会っただけでしかない。その場に居合わせたのは先々代の頭領櫟とその妻芹。先代の島長の常一とその護衛頭の守人に、当代の島長で当時島長候補だった深水。木槿の両親と実兄。そして当事者である穂純と木槿だけだった。この面々だけしかいなかった場での発表だったということは一見酔いに任せて口を滑らせたように見せかけて、実はもともと彼らだけに伝えるつもりだったのかもしれない。

これから数時間後に立葵たちによって切り裂かれることになるのは考えもしない、今から思えばこの二家族にとって幸せの絶頂期であり家族全員が揃った最後の出来事だった。

「そう」

できればその言葉を理解できるときに両親の口から聞きたかったと木槿は思った。この世に生まれたばかりで言葉など理解できるはずもなく記憶さえかけらもない。結局はただ声が聞きたかっただけということになるが。

それに自身が先代島長の孫であることすら最近まで知らされなかった。

「立葵に口止めされていましたからのぉ」

何も知らぬ赤子。だからこそ扱いやすく、また事情を知る者には牽制の材料——つまりは人質ともなる。

「だから私は生かされていた。大事なことはなにも教えてもらえずに」

話しながら徐々に沈んでいく木槿の声音に気づいた深水が慌てたようにやや早口で口をはさむ。

「木槿様にはなんら責任はないのです。その教わらなかった大事なことを教えるために今こうしてワシらが集まっているのですから。これまでの事例からすれば遅いというだけで、木槿様にとって適切な学びの時がようやく今訪れたというだけのことではありません。ワシらのような補佐もついておりますのでこまごましたことはおいおい覚えていけばいいだけの話です」

ここでいったん口を閉ざした深水は、いつもの穏やかな口調に戻した。

「ただこれだけは覚えておいてください。頭領としての仕事は基本的には下のものに命ずることです。旗印となつて進む先を指し示す者です。ワシらは頭領の命めいであれば命いのちをもかけて完遂しようと努めます。その意味をよくお考えください」

まっすぐに深水を見つめていた木槿は、心の中で深水の言葉を魂に刻みつけるように復唱してからしつかりとうなずいた。

「ええ、わかつたわ」

残りのお茶を飲み干した木槿は、一度唇を湿らせるように舐めた。

「それで……さっきの話だけど」

「蔓穂殿のことですね」

みなまで言わないうちに深水が木槿の言いたいことをくみ取った。口に辛かったことを代弁してもらえて木槿は内心ほっとする。こ

れではいけないとわかつてはいても、やはりまだ躊躇いがぬぐいきれなかったから正直助かった。

「ええそう。蔓穂姉さんが犯人だという根拠を教えて」

深水は神妙にうなずいた。そして一つ一つ順を追って説明していく。

まず立葵が殺された場所が彼の寝台の上だったこと。

うつぶせに倒れていたこと。またその体勢。

首は正面から刎ねられていたこと。

更には返り血などの状況証拠から鑑みれば、穂純が広場で言っていたように、犯人は寝台で立葵にのしかかられようとしているときに首を刎ねたと考えられた。

また武器として使われた鉄扇。以前食堂で話を聞いた木槿が穂純の体格を見て使いこなせるのかと尋ねたとおり、あの鉄扇は誰もが扱えるような獲物ではない。それならばなおさらなぜ蔓穂がと思いがちだが、ここにいる者たちは蔓穂が見かけの華奢さに反して武器の扱いに関してはよほどの重量があるものでなければ使いこなしてしまうほどの人物だということを知っている。そしてそんな技量をもった人間だったからこそ立葵に養女として引き取られていたのだということも。

「ここ数年、立葵が自身の寝室にいった人物は蔓穂ただ一人だということもわかっています」

自身に覆いかぶさるようにして襲い掛かってくるものの首を正面から刎ねれば、当然返り血を浴びることになる。そのため寝具には犯人がいた場所だけ鮮血の飛び散り具合が少なくなる。

もっともその後前かがみのような体勢で倒れこんでいたため、一見すべてが赤く染まっているように見えた。けれどよくよく調べていけば時間差による血液の固まり具合や寝具へのしみこみ具合などからおおよその状況を把握することができた。相手が小柄な人物だということも含めて。

「あと……」

言いにくそうにいったん言葉を濁した深水。

そんな深水を見かねたのか守人が代わりに言葉を引き継いだ。

「先代が弑されたと思われる時間帯に、私は血に染まった蔓穂様をお見かけしました」

そんな場面を目撃していてもあまりおおごとにならなかったのは、桜花ではさして珍しくないからだだった。竜に渡って獣狩りをしたり脱走者や違法者を狩ったりした際に、返り血を浴びてしまうことはよくあった。

いつもよりは多く血を浴びていたとしても、時折差し込む月明かりだけでは詳細はわからない。せいぜい対象者を識別できる程度だ。蔓穂がいつもまとっている淡い色彩の着物の前面が真っ赤に染まっていたても、蔓穂の力量をもつてしてもこれほどの返り血を浴びるほどの手ごわい獣が相手だったのかと思っただけだ。せめて言葉でも交わしていればいつもと違うところを見つけることができたかもしれないが、見回りのさなかにたまたま視界の端を横切った程度では、その人物が誰であるかがわかった時点で警戒対象から外してしまっていた。

のちに死体となった立葵が発見されたことにより守人が改めて皆の動向を調べなおしていた時に、その晩蔓穂は竜へは渡っていないことも誰かを狩る任も負っていないことがわかったにすぎない。またこの検証に蔓穂も対象に入れるように守人に言ったのは深水だった。彼は刀を受け取りに来た穂純から蔓穂が怪しいと聞かされていた。そして穂純も血まみれの蔓穂を宿の部屋から目撃しておりこのことも同時に深水を通して守人に告げられていた。

事件現場の検証が進むにつれて、これはどうあっても蔓穂以外にはなしえないと結論がでたところだった。

最初は現場に残されていた凶器の鉄扇。それを見た密が桜花の裏の武器事情を忘れて先走ってしまったが、いつのまにかその鉄扇は消えていた。本物の穂純の鉄扇と一緒に海に捨てられていたということは、拾ったと宣言した穂純自身によって明らかになったが、そ

うしたことをできたのもまた蔓穂ゆえだろう。

竜胆の姿も見えないということは、共犯として一緒に逃亡しているか、蔓穂の仕業だと早くに気づいて追っているかのどちらかだろう。そして前述であろうと深水たちは踏んでいた。

「それはどうして」

深水たちがいやにきつぱりと竜胆の共犯説を押ししたので木槿は疑問に思った。

「それは竜胆殿が蔓穂殿に、平たく言えばほの字だったということです」

蔓穂が立葵の情婦だと知っていてなお誰にも許婚の立場を譲らなかった竜胆。それだけでなくできるだけ彼女を守ろうとしていた。そうであるなら今回のことも竜胆のほうから逃走をそそのかした可能性が高い。

話を聞きながら木槿はうらやましいと考えていた。決して恵まれているとは言えない境遇。けれどそこまで想われたら悪い気はしないはず。ましてや蔓穂自身も竜胆を憎からず想っていたはずなのだから。

そうして木槿は自身を顧みる。

（でも穂純はお爺様に頼まれたから求婚したのだし……）

その時のことを思い出すと木槿の眉間に無意識に皺が寄った。

「頭領」

呼びかけに反射的に顔をあげると、深水が苦笑していた。

「どうしたの」

「頭領こそ難しいお顔をされてどうなさいました。何やら懸念することでもありましたか」

木槿は緩く首を振る。

「いいえ、なんでもないわ」

深水は困ったように微笑みながらもきつぱりと言い切った。

「さようでございますか。もっとも誤解を解くのはワシらの仕事ではないのでご本人に一任しておりますからの。若いうちに色々なこ

とを経験されるがよろしかろう」

「誤解？」

聞き返した木槿に対して、深水も守人も答えなかった。頭領としての権力をもつて問いただしても、それは無粋だと軽くいなされる。そもそも木槿が花団頭領なら、深水は桜花島長という地位にあり立場的には対等である。しかし年齢による経験や知識という意味では全く齒が立たない。

あきらめるように息を吐き出した木槿は、改めて現状に向き直る。「そうね。今はそんなことにかかずらっている時ではないし、その『本人』とやらの出方を見ることにするわ」

「賢明なご判断です」

11話 突撃

木槿が深水のところで頭領としての知識を即席で頭に叩き込んでいる一方で、穂純は海豚魚雷群が目視できる位置にまで近づいていた。

鯨に乗って桜花を離れてから穂純はずっと口にくわえた笛を吹き続けている。人には聞き取れない周波数で鳴り響く笛を。

やがて後方——二方向から寄り集まってきたのは、穂純と同じように鯨に乗った者たちだった。

穂純のすぐ横に鯨を誘導して並走し始めたのは、一方だけとはいえず着物の裾をまくって帯に差し込み惜しげもなく足をさらした妙齡な女性だった。

ともすると冷たくさえ見える正統派美女の木槿とは違って、どこか愛嬌のあるくるくると表情を変える大きな瞳と肉厚の唇。豊満な胸としなやかな肢体が誘いをかけるように強調されていた。

「桜様あ。お呼びくださるのを今か今かとお待ちしていましたわあ。やあつとお会いできてうれしゅうございますう」

科しなを作って嫣然と微笑むこの女性は見かけとは裏腹に、橘花の翼よく団頭だん領を務める雀鷹つみ。そして穂純と雀鷹の後方に並んで追走しているのは橘花翼団員の精鋭たちだった。総勢で二十名ほど。

穂純は彼らをざつと見渡して微笑む。

「全員揃っているな。助かる」

その言葉に元気よく答えたのは穂純のすぐ後ろにいた少年だった。「当たり前だろう桜兄さん。花団はどうだったか知らないけど、総領である兄さんの呼び出しを無視するような莫迦は翼団にはいないよ。なんでも言って。俺も手伝うから」

「ああ日雀ひからにもしっかりと働いてもらうさ」

そういつて穂純はまたざつと集まった人々を見渡した。

「竜王総領桜の名において命ずる。敵船団を叩きのめせ。まずは海

豚魚雷の撤去だ。先陣の海豚を鯨で囲い込め」

命ずる穂純の声は海原にあっても強く響き渡り集まった翼団の団員全員の耳に届いた。

「囲い込んだあとは？」

一転して翼団頭領の顔になった雀鷹に向き直った穂純はにやりと笑うように口角を上げた。

「爆弾を取り外した海豚から順次解放。それが完了したら回収した爆弾を敵船に丁重にお返ししてやれ」

その命令を聞いた一行は、穂純と同じように口角を持ち上げて楽しそうに眼を細めた。

「了解、総領」

返答に一切乱れはなかった。

敵先陣の手前で穂純たちは鯨をいったん散会させて、海豚の囲い込みにかかった。

それぞれ口にくわえた笛と手綱を使って鯨を操る。

鯨の捕食対象は多岐にわたり、魚や烏賊^{いか}だけでなく、海豚や鯨、鯨なども対象となることがある。

海洋の食物連鎖の頂点に位置し、人間を除けば天敵が存在しないといわれている。

実際に捕食対象とされている海豚は人間以上にそうした事情に詳しいのはあたりまえのことだ、たちまち恐慌をきたした。そうして中央に集めておいてから海豚用の笛で一頭ずつ呼び寄せてはくくりつけられた爆弾を外していった。しよせんは飼いならされた海豚である。同じ命令を出せば素直に従った。

ほどなくすべての爆弾が外された。

「これで終わりね」

雀鷹が団員に確認をとる。漏れがないことをしつかりと確認しなおしてから穂純へ作戦の第一弾終了の報告をした。

「よし。それじゃ第二弾へ突入だ。爆弾を各自に振り分け敵船団へと熨斗をつけて返してやれ。ただし相手も大砲をはじめとした武器

を持つているから気をつけろよ。慢心は禁物だ」

「一撃離脱を心掛けていけ」

雀鷹が補足すると全員の顔が改めて引き締まる。

穂純は感心したようにわずかに片眉を持ち上げた。

現在二十三歳の雀鷹が翼団頭領に就任したのは三年前。ちょうど穂純が橘花に最初に訪れたころだった。

色々あった三年間。だがそれが穂純にとっても雀鷹にとっても勉強になった時間でもあった。

そして穂純は木槿のことを思う。木槿は十六歳で花団頭領に就任することになった。雀鷹よりも四年ほど早いことになる。

同じ女性として、蔓穂が莫迦な真似をせずに補佐として支えとなってくれば、と穂純が幾度となく考えてしまうのは、やはり密では木槿の補佐としては物足りない感があるからだ。

一人前の頭領となつてからであれば密のような実直な型の人間のほうがいいだろう。しかしまだまだ未熟な今の木槿には多少は型から外れていたとしても包容力があつて助言もできる人物のほうが必要だろう。

雀鷹には、いまだ少年とはいえ快活な性質の日雀が副頭領として適任であるように。

「桜様？」

雀鷹が突入の時機を伺ってくる。

敵船団はかすかではあるものの目視できる位置にまで近づいてきていた。

穂純は大きく息を吸い込む。

「突撃！」

関の声とともにいつせいに鯨が波を切った。

その報は同時に訪れた。

「島長！ 桜様が戻られました！」

「頭領！ 蔓穂殿を捕らえました！」

先陣を切っていた敵の海豚魚雷を無事処理し、なおかつ敵船団にその爆弾を見舞ってきたという状況報告とともに、穂純が島長深水を探しているとの知らせが一つ。

もう一つは蔓穂と竜胆が地下倉庫で見つけたということだった。すでに二人の身柄は確保されて入牢済みということだった。

深水が木槿に確認する。

「ワシはこれから桜様が待っておられる宿屋へと参りますが、頭領も一緒に参りますか」

木槿は即座に首を横に振った。

「私が総領に受けた命令は蔓穂と竜胆を捕らえること。二人が入れられている牢のほうへ向かうわ」

ほかの者がいるため穂純とは言わずに総領と呼んだ木槿。そして迷わず即座に優先事項を見極めた彼女に対して深水が慈愛に満ちた笑みを向ける。

「頭領の裁量を支持いたしましょう」

その判断が最良だと及第を与えた深水は即座に踵を返した。

木槿と守人も急いで牢へと向かった。

牢といっても蔓穂たちが入れられていたのは容疑者用のもので、単純に逃げられないようにすることが目的の為、設備的にはそう不自由はしない程度に揃っている。

木槿が牢についたときには二人は別々の個室に入れられていたが、同じように椅子に腰かけて与えられたお茶を口にしていた。

「蔓穂姉さん、竜胆兄さん」

すでに木槿が来たことに気づいていた二人は、木槿の呼びかけに對して静かに顔を上げた。そして蔓穂がにっこりと笑む。

「木槿ちゃん」

いつもと変わらない呼び声。木槿は思わず瞳を潤ませた。

「あらあら木槿ちゃんはいつまでたっても泣き虫さんですね。頭領となつたんだからそろそろ泣き虫さんは卒業しないとね」

蔓穂に言われるままに深呼吸した木槿は、自身の気持ちが落ち着

いた頃合いを見計らって改めて蔓穂と正面から向き合った。

「蔓穂姉さん、本当に姉さんが父さんを殺したの？」

あまりにもまっすぐな問いかけに蔓穂は苦笑した。

「ええ、そうよ」

「どうして……」

「正当防衛だった。——そういつたら木槿ちゃんは信じてくれるかしら？」

木槿はゆっくりとけれどもしっかりとうなずいた。

それを見た蔓穂の瞳がかすかに揺れる。

「ありがとう、木槿ちゃん」

そんな蔓穂の様子を見た木槿は、今すぐ事情を聞きたかった。けれども今は戦艦桜花は戦場の真ただ中にいる。戦闘員はひとりでも多いほうがいいはず。木槿も花団頭領としていつまでもここにいろわけにはいかなかった。蔓穂と竜胆が確保されたことはこの目で確かめた。次はこのことを木槿自身が総領である穂純に報告しなければならぬ。

「姉さん、今は立て込んでいるからあとでゆっくりと話を聞かせてね」

「穂純ちゃんが言っていた略奪者たちのことですよ。もう逃げたりしないから木槿ちゃんは安心して行ってきて」

真摯な表情でまっすぐに蔓穂の瞳を見返した木槿は今度は力強くうなずき返した。

「わかった。それじゃ行つてきます」

「おう、行つて来い」

初めて口を開いた竜胆の口調も妹を送り出す兄としての明るいものだった。

木槿は足を止めることなく走る。けれどもあふれてくるものをこらえるようにギュッと胸元を握りしめていた。

「桜様は広場に向かわれたとのことですよ」

途中で行き会った伝令係の伝言を守人が木槿へ伝える。二人は方

向を修正して穂純がいる広場へと走った。

一撃離脱を心掛けた作戦は功を奏した。

海豚は操れても鯨までは手に余っていたようで、敵が吹く攪乱の笛は全く影響を及ぼすことなくこちらへの被害はほとんどないままに完了した。

反対に穂純たちのほうは敵旗艦の動力源を運よく破壊することができた。これで彼らの足を一時的に止めることができる。

混乱させて足を緩ませられればいいと考えていたので、むしろ上出来といっていいたろう。

ある程度敵船団から離れたところで穂純は雀鷹へ尋ねた。

「橘花はどのくらいで到着しそうだ？」

橘花も軍艦で桜花と同じようにすでに離岸していた。

「もうまもなくだと思うけど……。誰かに確認に行かせましょうか？」

この聞きかただと雀鷹はすぐには橘花に戻る気はなさそうだ。穂純は心の中でため息をついた。

「そうだな。そうしてくれ」

雀鷹は二名を名指しして橘花へと向かわせた。

「二人だけか？」

ほとんどのものがいったん橘花に戻るのだと思っていた穂純は驚いた。折り返して少数が穂純のもとへ報告に現れると思っていたのだ。

それを聞いた日雀は声をあげて笑った。

「桜兄さんと頭領を置いていくわけにいかないでしょう。どのみち頭領が素直に帰ると思わないし」

これだけの人間がいながら皆が橘花に帰って総領の穂純を独りにするわけにはいかない。

しかも穂純も気づいたように、翼団頭領の雀鷹はなかなか穂純から離れようとしない人物だということは皆知っている。そうなれ

ば少数に様子を見に行かせるのが一番手間がかからないということになる。

穂純は思わず頭を抱えそうになった。

（それでいいのか翼団……）

竜王総領の拠点がこれで大丈夫なのかと、穂純は少々心配になった。もちろん三年間一緒にいたのだからそれなりに信頼していることに違いはなかったが、これでよかったのかと思ってしまうことは止められなかった。

そんな穂純を見かねたのか、やや年嵩のがたいがいい男が声をかけてきた。

「桜様、どのみち私たちはそれぞれ外で動くことが担当のものたちですので橘花に戻ってもさしあたっての仕事をありません。それくらいなら桜様の護衛をしながら、この機会に桜花の新頭領へご挨拶に伺うほうが建設的なのです」

翼団の頭領がいてそれはないだろうと思いつつも穂純は折れた。折れるしかなかった。

「そういうことにしておこう」

受諾を示すその一言は翼団員に笑顔でもって迎えられた。

さすがに橘花のものたちを連れて深水がいるであろう鍛冶場にくわけにはいかないため、穂純はまずは最奥の宿屋へと向かった。

宿屋通の束ねを務めるこの宿であれば穂純の正体などすでに把握しているであろうから余計な混乱も起きにくいと思われた。

また深水の店からも近かったこともある。必要があれば容易にそちらへと移動できる場所ということでの宿が最適だった。

まずは店主に挨拶し、深水への使いを出してもらった。

深水はすぐにやってきた。

「桜様、ご無事でなによりです」

「ああ、海豚や鯨に関しては俺たちほどの使い手ではなかったからな。多少傷を負った鯨もいるが、人間側には被害はない」

「それはようございました。して、こちらのおかたがたは橘花の翼団とお見受けいたしますが……」

「さすがだな。そのとおりだ」

穂純は雀鷹を振り返った。

「雀鷹、こちらが当代の島長の深水だ」

次に深水に雀鷹たちのことを紹介して本題に入った。

「さて深水。武器のほうはどの程度できた？ 追加注文していた刀はどうなっている？」

「それはすでに仕上がっております」

深水は控えのものに言って取りに行かせた。

そのあいだに穂純たちにもおにぎりがふるまわれ、ひと時の休息を得た。

ちようどいい頃合いに持つてこられた刀を穂純が鞘から抜き放てば、雀鷹が感嘆の声を上げた。

「斬鋼刀じゃない。私も欲しいわね」

「落ち着いたら鍛えてもらえ」

子供のように目を輝かせる雀鷹に苦笑しながら穂純がたしなめる。そんな二人のやりとりに皆がふと笑みをこぼしたその時、桜花が大きな音を響かせながら震えた。

「大砲か！」

穂純は深水たちに引き続き武器の製造を指示すると、雀鷹たちを促した。

「俺は密のところへ行ってくる。雀鷹たちも一緒に来い」

「もちろんどこへでもついていくさ」

楽しげに返す雀鷹を一瞥した穂純は。

「おまえ、本当に楽しそうだな」

いかにもあきれ果てたように言った穂純の嫌味も雀鷹には通じなかった。

「あたりまえでしょ。私は翼団の頭領よ。そもそも戦いが楽しくないものは翼団どころか橘花にすらいないわ」

実際戦いを厭うものはほかの要塞島へと移動している。

猿島や友ヶ島は自然島であることを生かして、それぞれ衣料や食料に特化した島となっている。だからこそ橘花の翼団が交代で護衛にあたっているのだ。

凱旋中の鯨の上で男が言った『外で動くことが担当のものたち』とはそうした猿島や友ヶ島、さらには大陸竜へと出て武人として武力を提供する者たちのことで、彼らはそれで金銭を得ている。まさに上位の狩人といった感じの役目をこなしていた。

だからこそその雀鷹のこの発言となる。

翼団では花団以上に頭領の条件に武人としての技量が求められる。血は一切関係がない。五年おきにおこなわれる頭領の選考会には二十歳になってある条件を満たせば翼団員の誰もが参加できた。

ある条件とは大陸竜で恐竜一頭を独りで倒すことだ。

雀鷹は二十歳になってすぐに竜へと渡り指定の恐竜を倒した。その後おこなわれた選考会にて優勝したからこそ今の頭領の地位にある。

任期は五年。選考会へは何度でも出場できるため勝ち続けられずと頭領の位置にいられる。しかし負ければまた一団員に逆戻りだ。優勝者が頭領。準優勝者が副頭領。そして頭領が指名した翼団員一名を二人目の副頭領に据えることができる。これが橘花翼団での常識だった。

そして日雀は雀鷹から指名を受けた副頭領のため、まだ二十歳にはなっていない。準優勝者だった副頭領は今頃軍艦橘花で指示を出していることだろう。

それほどまでに戦いが好きな者たちの集まりの頂点なのだから、この雀鷹の返答は当然であったのだが、そうでない穂純にはいつまでたっても慣れない感覚であった。

そんなことをやりとりしながら走り続けた一行は広場で第二弾の弾込めを指示している櫓のもとへとたどり着いた。

「櫓、どうした」

密は無駄な挨拶を省いて簡潔に答えた。

「敵が海豚に乗ってやってきました」

海へと視線を移せば、なるほどたくさんの海豚に乗った者たちが桜花へと向かってきていた。

「あいつら船を捨てたな」

「密。皆に武器を持つように指示しろ。鍛冶屋へ仕上がった武器を早々に配るように伝えるんだ」

穂純が直接命令を下すよりも、花団副頭領である密が桜花島民および花団員へ命じたほうがはるかに従うものが多そうだと判断した。密もそのことは理解しているようで、即座に言われたとおりに指示を出す。

そこへ木槿がやってきた。

「穂づ……総領、蔓穂と竜胆を捕らえました」

こちらでも簡潔に要点だけを伝える。木槿も先ほどの音と振動で大砲が撃たれたことくらいは気づいていた。その意味も。

「わかった。彼女らについては追って沙汰する。今は目の前の敵だ。今密をとおして指示を出したところだが、皆に武器の携帯を命じた。花団は総力を挙げて敵の乗艦を阻止せよ」

その様子を見ていた雀鷹が口をはさむ。

「桜様、そちらが？」

「ああそうだ。花団頭領木槿と、副頭領の密だ」

穂純が二人を紹介すると、雀鷹は自ら自己紹介をした。

「私は橘花の翼団頭領雀鷹、これが二の副頭領日雀。そしてうちの団員たちよ。よろしく」

差し出した雀鷹の手を木槿がとって握手を交わす。

挨拶を終えた両頭領へと穂純が命令を下す。

「俺と翼団はまた鯨で出ていく。だから大砲は敵が射程距離に入ってきたときにもう一度だけ撃て。あとは敵船が来るまでは控える」

そのあとは白兵戦に備えて武器を所持した者から外周を囲んで桜花への乗艦を阻止するようにと木槿たちに命じた。

そのあたりの細かいことは補佐についた伝令使の青年がうまくやるだろう。穂純が視線を向ければ、青年は軽くうなずき了承の意を示した。

「行くぞ、雀鷹」

「待つて！ 私も行くわ」

翼団を促す穂純に待ったをかけたのは木槿だった。

「木槿は鯨には乗れないだろう」

「海豚なら乗れるわ。それに海豚のほうが小回りが効くから補佐に適しているわ」

しばしためらったものの、結局は穂純が折れた。花団の頭領として木槿にも意地があるゆえだと考えたからだ。

「わかった。それじゃ桜花のことは任せた」

前半は木槿に向けて。後半は密に向けて言い放った穂純は、直後には走りだした。

即座に対応した翼団員が続き、一瞬遅れて木槿が追いかけた。

一応木槿の海豚もそばに呼んでいたため、すぐに姿を見せた。

「いいか、木槿。敵は海豚を操る笛をもっている。音は違うが同じ海豚なら惑わされる危険性がじゅうぶんある。気を付けろ」

鯨に乗りこむ寸前に穂純は木槿に最後の忠告をする。

その様子を見て雀鷹が嗤う。

「桜様、過保護ね。新米とはいえ仮にも花団頭領を名乗っているんだから自分でどうにかできるわよ」

「おまえたちと一緒にするな」

「あら、同じよ。これから同じ戦場に行くんだから」

諭すような口調になった雀鷹。事実穂純を諭すために言ったのだと気づく。

「悪かった」

素直に謝った穂純に対して、雀鷹がさらに言葉をつづった。

「どれだけ大事な女か知らないけど、私たちの前であからさまなひいきをするのはやめてちょうだいね。今のあなたは竜王総領として

立っているのだということを忘れないでね」

助言に感謝しながらしっかりと雀鷹の目を見返しながらうなずいた穂純を見て、雀鷹はいつもの顔に戻る。

「じゃあ行くわよ。花団の頭領に翼団の戦いを見せてあげなさい！」

士気を鼓舞するような台詞で締めた雀鷹は真っ先に出撃した。

桜花から離れた穂純たちはいったん後方で終結した。

「次に大砲が撃たれたら、それを合図にいつせいに進撃する」

大砲を撃ち放ったとしても海豚に乗った敵には早々あたるものではない。せいぜい海豚を驚かせるくらいのことだ。

それでもなお撃てと命じたのは、穂純たちの出撃の合図とするためと、敵の進行速度を弱めると同時ににおよその位置を把握するためだった。

「二組に分かれて左右から行く。今ここで組み分けをしておけ」

もうまもなく合図があるはず。翼団員たちは慣れたものでさしたる時間をかけずに二手に分かれた。

「木槿は俺の組の最後尾からついてこい」

海豚に乗っているのは木槿ただ一人。鯨の中に混ざっていると海豚が怖がって命令を聞かなくなることがある。それにもともと補助として同行を許可したのだからそこは従わざるを得なかった。

「わかったわ」

木槿は素直に従った。

もう一方の組は当然雀鷹が率いる。

「雀鷹、細かいことは戦い慣れているおまえたち翼団に任せる。まあ要するに片っ端から敵を薙ぎ払えばいいってことだ」

この穂純の一言はすいぶんとお気に召したらしい。

雀鷹をはじめとして翼団一行の目の輝きが一段と増し凄絶ともいえるほどの笑みを浮かべた。

（まったく、こいつらは……）

思わず零れ落ちそうになったため息を、穂純は必死にこらえた。

12話 妄執

それから待つこと数分。

海面すらも揺らして波立たせるほどの大音響が響いた。合図だ。

「行くぞ！」

穂純たちはいつせいに戦艦桜花の背後から飛び出した。

あつという間に桜花を追い越し敵の一団を包囲するように展開する。

口には鯨笛。左手は鯨のたずな。右手に武器。

動きの妨げにならない程度に適度な距離を保ちつついつせいに敵に襲い掛かった。

鯨と海豚。大きさからいえば海豚のほうが小さい分小回りも利くし、乗り物を狙って足場をなくすなら当然海豚が有利だ。

しかし鯨はだてに頂点にいない。そして鯨に騎乗している者たちは生半可な使い手ではなかった。

いずれも一流揃い。

物凄い速さで突っ込んでいったと思えばすれ違いざまに薙刀で首を刎ねたり、鎖玉で絡めて身動きが取れなくなったところを刀で切ったり。

また一方ではすれ違いざまに海豚へと飛び移り、刀で一閃。その後戻ってきた鯨に再び乗り移るなどという曲芸めいたことをするものまでいた。

海面を走っているのではないかと思うほどに自由に海豚と鯨を操って次々と敵を一刀のもとに切り捨て屠っていくのは雀鷹だった。

「すごい……」

さすがにこれには木槿も言葉をなくした。

木槿はただ仕留め損なった敵にとどめを刺していくのが精いっぱいだというのにこの違いはなんなのだろう。

「考えるな、木槿」

いつのまにかすぐ横に来ていた穂純が叱責する。

「武器の桜花と、戦闘の橘花ではそもそも違ってあたりまえなんだ。おまえはおまえの務めを果たせ！」

それだけを言い残して穂純は離れていった。

実際穂純も初めて橘花に訪れた時にはその戦闘風景に唖然としたものだ。

これほどまでに嬉々として戦うのが橘花なのだと、多少は話を聞いていた穂純も反射的に唾を呑み込んだくらいだから。己の経験からたぶん木槿もそうであろうと様子を見てみれば案の定。

これはひいきではない。ただの忠告だ。

木槿に相對すると時に平静さを忘れてしまう穂純はそう言い聞かせた。

木槿の護衛に回るわけにはいかない。それこそ甘やかして木槿の為にはならない。けれども頭領としていずれはその目にしなくてはならない現実。であるならば早いほうがいい。今ならまだ頭領になりたてだからで済むのだから。

ふう、と息を吐き出した穂純は気持ち切り替えて改めて敵のさなかに突入していく。

雀鷹のように一刀で倒す必要はないのだ。二刀になったところで敵を倒せばそれでよし。穂純はそう考え、通常より長めに作られた刀で向かってくる敵を切り伏せていった。

左側から襲い掛かる敵には、左腕に仕込んだ峨嵋刺と鉄扇で一撃を流し、即座に取り出した棒手裏剣を眉間に打ち込む。

右から来たものには、刀を振り下ろしてきた腕を切り落とし、返し刀で胴を切り裂く。

返り血は目に入らないようにだけ注意する。鮮血がどこに降りかかるかが一切気にしない。気をとられた瞬間己が刃の餌食となるだろう。

戦場とはそういうところだ。

ひたすら前に進み、敵を切り捨てていく。取りこぼしたものはほ

かの者が処理をするから気につけない。後方にはいくらでも味方がいるのだから。

そうしてとうとう穂純は敵船団へとたどり着いた。

横に目をやれば雀鷹が並走している。

後方を指し示す指先に従って後ろを振り返れば、ほかの者もすぐそばまで追いついていた。

「さすが翼団」

思わず感嘆の言葉が漏れる。穂純は口の端を持ち上げた。

「行くか？」

問いかけたのは雀鷹にであり翼団員にだった。

ちらりと一瞥すれば、同じような笑みが穂純の視界に入る。

聞くまでもないことだった。

こんな中途半端なところでやめられるくらいなら翼団に入ってないだろう。

「突撃」

穂純の静かな命は、歓声でもって受理された。

敵船団といっても艦自体は三隻しかない。もっともこの時代にこれだけの艦を持っていることはかなりすごいことではあったが。

竜王でも戦艦は桜花と橘花の二隻。要塞四島を巡回している船も二隻しかないのだから。

敵戦艦以外にいくつかの小舟が下ろされてはいるがいずれもカラで、どうやら海豚に乗り移るために使われただけのようだ。

敵船からの攻撃を警戒しながら周囲を見まわってみたが、人は全く見当たらず艦からの攻撃もなかった。

だが人の気配だけはある。

どうやら敵は息を殺して待ち構えているようだ。

「どうする」

旗艦だけに絞るか、三方に分かれていつせいに突入するか。どちらがいいかと穂純は雀鷹に尋ねた。

「そうね」

雀鷹が考えたのは一瞬だった。

「三方に分かれて同時に仕掛けましょう」

そうして雀鷹の組、日雀の組、穂純の組と三つの組ができあがった。木槿は雀鷹の組となった。それぞれの組の力が均衡になるように振り分けた結果だった。

雀鷹が穂純を振り返り、ぱちりと片目を一瞬だけ閉じた。

「旗艦は桜様に譲ってあげるわ」

そういつて穂純の返事も聞かずにさっさとほかの艦へと向かっていった。

穂純は一瞬だけ呆けたあとは、軽く吹きだすような感じで息を吐いた。

（参ったな……）

竜王総領としての立場を慮ってくれたのかどうなのか。

嬉々として旗艦に乗り込みそんな雀鷹からの配慮はどこかくすぐつたい。

思わず零れ落ちてしまいそんな笑いを吞み込み、穂純は一度深呼吸をして顔を上げた。

穂純たちの上空を一羽の鷹が旋回している。

その鷹に向けて穂純は小さくとも鋭い指笛を鳴らした。

即座に鷹が穂純のもとへと舞い降りてくる。穂純は鉄扇を取り出して構えると鷹はそこへとまった。

一度鷹ののを指の背で撫で、取り出した餌を与える。そして次に取り出した筒状のものを鷹の目の前で軽く振った。

「これを船の上に落とすんだ。いいな」

それだけ鷹に告げた穂純は、最初に鷹を空へと飛ばし、次いで筒状のものを投げた。

一度上空で旋回した鷹が再び戻ってきて穂純が投げた筒を足で器用にとらえる。

切り込み隊長を申し出た青年を先頭にして敵艦に取りつく。

準備が整ったところで穂純がまた小さく指笛を吹いた。

合図を受けて鷹が離れた筒がちょうど艦の中央に向けて落ちていく。

そして大きな爆発音が轟いた。

敵の悲鳴のような叫び声がある。

「今だ！」

穂純たちはいっせいに敵艦へと乗り込んだ。

ただひたすら刀を中心にあらゆる秘武器を使い分けて次々と向かってくる敵を屠っていく。

すると奥からがたいのいい男が偃月刀えんげつとうを手に持って現れた。

穂純は片方の口角を上げる。

「久しいな、ながやす長安。相変わらず悪趣味な刀だ」

「ふん！ 坊主もしばらく見ないうちに背だけは伸びたが、中身は相変わらずかわいげがないわっ」

男——長安こそこの敵船団の頭目だった。以前は世界一大きな大陸に住んでいた民族の末裔だが、今はただの海賊でしかない。

もっともほかの海賊とはわずかに違った。それは襲う対象が船だけではないということだ。

彼らが欲するのは大地。

あらゆる島に移り住み、その都度島を破壊している。

島が壊れればまた新たな島を求めて海原へ乗り出す。彼らはそうした一族だった。

「そうそう、坊主が住んでいた島もとうとう沈んでしまったぞ。残るは大陸竜だけ。竜を俺たちに寄越せ！」

長安のこの言葉に、穂純は力を籠めすぎて碎けてしまうのではないかと思えるほどに歯をかみしめた。それほどまでに怒りが募る。

「あの島まで壊したのかっ」

「壊したのではない。勝手に壊れたのよ」

「それはおまえたがむやみに地下水を汲みあげたからだろっ。支えていた基礎を壊せば崩れるのは当たり前だ」

「水がなければ生きていけないだろう」

「船で生活できているからには水も作れないわけがないだろう」

「だからそれが面倒だと言っているんだ。坊主にはわからないだろうが、無駄なことをせずに必要なものを手に入れる。それが大人の甲斐性というものだ」

長安とは穂純が常一たちと島で生活していたところから幾度か会っていた。しかし常一たちともこんな風に会話はいつも平行線。話し合いになったことはなく、いつも力でもって追い払っていた。

穂純には参戦する機会が与えられなかったため、いつもそうした様子を後方から見ているしかなかった。

（相変わらず過去の妄執に取りつかれている）

長安はいつも同じ言葉を繰り返す。

「俺たちは大陸の末裔だ。だから大陸は俺たちのものだ。俺に大陸を返せ！」

穂純は意識して細く長く息を吐き出した。

「長安、竜王の規則に従い、橘花で正式に狩人としての務めを果たすというならばおまえたちを受け入れよう。だから……っ」

言葉を遮るように切りかかれ、長安のもくろみどおり穂純は降伏勧告を呑み込むしかなかった。

舌打ちし、腹をくくる。

竜王総領として竜の敵を排除する。要塞島は——竜王はそのため存在しているのだから。

穂純は追加注文をした刀をずっと背負っていた。

刀を左手に持ち替えた穂純はゆっくりと脱落防止用の留紐に手を伸ばしてほどこいていく。気づいた翼団の一部が掩護にやってきた。

引き抜いた斬鋼刀は刃紋も美しく陽光をいっばいに浴びて輝いた。改めて名乗りを上げる。

「私は竜王総領桜。竜を脅かす海賊の頭目長安。あくまでも竜を狙うというのならここで切り捨てるが返答は如何に」

「笑止！ 坊主に俺が倒せるものか。大陸は俺のものだ！」

長安は奇声を上げて穂純に切りかかった。

穂純が長安と向き合っていた頃、雀鷹たちが乗り込んだ艦はあつというまに敵の墓場と化していた。

こちらも穂純の鷹が落とした手投げ弾の爆音を合図にいつせいに乗り込み、数十人の敵兵を次々と切り捨てていく。

甲板で待ち構えていた十人ほどの敵はそれぞれが手分けして相手をしたため木槿も刀を振るう機会を得たが、その後は翼団の——特に雀鷹の独壇場だった。あれよあれよと屍の道が築かれていく様はいつそ見事としか言いようがなかった。

向かってくる敵の誰もが一刀で片づけられるのだ。補佐の必要性などかけらもなく、ただ意味もなく後ろについて走るだけ。

艦内に散らばって残党を片づけにかかった翼団員のように木槿も一人で行くつもりだったのだが、雀鷹によって止められて補佐を命じられた。

「花団頭領におかれてはまだ恐竜を倒したこともないご様子。今は戦い方を見て覚えることに徹したほうがよろしかろう。先は長い。焦って機会を逃さぬことだ」

こんなところで無駄な怪我を負うことはない。見て学ぶことも大事だと言われては反論などできようはずもない。

そもそも経験が違う。力量が違いすぎる。従わざるを得ない空気はさすが上に立つものだと思わせる。これは木槿自身も手に入れないかもしれないものだ。だからこそ焦る気持ちに今は学べと呪文のように言い聞かせた。

そうこうするうちに船底へとたどり着き、ほかの団員とも合流を果たした。

「片付いたようだね」

雀鷹の声に全員が笑顔で首肯する。

「それじゃ、甲板に戻って橘花を呼ぶでしょう」

「え？ 呼んでどうするの？」

問いかけたのは木槿だった。帰るのなら鯨に乗ればいいだけ。それなのになぜ軍艦を呼ぶのだろう、と。

雀鷹は木槿に体ごと向き直って一つうなずいた。

「せっかくの軍艦だからね。このまま朽ち果てさせるのももったいないからいただいて帰るのさ」

あっけらかんと答えた雀鷹に、木槿はあきれたようにぽかんと口を開けて見返した。

「なんて顔をしているんだ。当たり前だろう。陸地はどんどん減っていつてるんだから代わりになるものはなんでも使っさ」

はっとしたように木槿は表情を引き締めて雀鷹の言葉に耳を傾ける。

人が暮らしていくにはきちんと両足をついて立てる足場が必要だ。それなのにその大切な足場が徐々になくなっていつている。

壊し屋との異名を持つ長安がここに来たということは、もうここ以外に自然の島は残っていないということだ。

であるならこれから生まれてくる子供たちのために、生きていくための足場を少しでも多く確保し、安心して暮らせる場所を残してやるのが大人の役目だろう、と雀鷹は言う。

そしてそんな大人たちを叱咤激励しながら進む道を示してやるのが頭領の役目だと。

「木槿殿はまだ十六歳で頭領を継いだばかりだからどこに進めばいいのかわからないだろうが、橘花も桜花も基本は同じだ。団員が。

島民が。そうした人間全体が暮らしやすい器を整えてやるのが頭領の仕事だ。それさえやっておけば、あとは各々が勝手に自分の幸せとやらを求めて日々を送っていくだろう。それは本人が自分自身で考えることであって頭領の仕事ではない。そんなところにまで手を出そうとすれば、先には甘えからくる墮落しかない。部下を思い、民を思うなら、ただ器となる足場だけを整えることに努めなさい」

それは橘花翼団の頭領を三年務めた雀鷹から、桜花花団頭領へ就任した木槿への祝い言でもあった。

「そういうわけだから、旗艦以外の二隻は貰っていくわ」
ちゃっかりしているわ、と木槿は心の中でつぶやいた。

木槿たちが甲板へ戻って狼煙を上げれば、すぐ横の艦からも同じように狼煙が打ち上げられた。

「隣も片付いたようね。ということは残りは旗艦の桜様だけ」

雀鷹の声につられるようにして木槿は旗艦の甲板へと視線を移した。

そこでは穂純と長安が鎬しのを削けっていた。

長安が奇声を上げながら切りかかってくると同時に、彼の背後で構えていた部下たち数人も突撃をかけてきた。

穂純はただ長安だけに意識を集中した。

なにも言わずとも補佐に回ってきた翼団員であれば、当然長安以外の相手を務めてくれるだろうと信頼していた。穂純が知っているのは雀鷹だけではない。当然彼らとも多少は交流があり、信頼できる者たちだと評価している。

左手に持ったままだった刀を長安に向けて投げつけてみたが、やすやすと弾き飛ばされてしまった。

重そうな偃月刀も長安ほどの大男ならば刀と同じように振り回せるらしい。そこに乱れはなかった。

（腕を上げたか）

穂純が子供のころに見た長安とは違い、動きが早くなっているような気がした。

峨嵋刺を使って振り下ろされた偃月刀を流してそのすきを突こうとするのだが、長安は逆に力で押してきた。

捻ひねじるようにして切り込んでくる。

これには穂純も後退して距離をとった。

唸うなりをあげて刀が横切り、わずかに切っ先が穂純の着物の端を切り裂く。

舌打ちし、さらに一步を下げた。いったん地についた後ろ足をはね発条

にした穂純は逆に切り込んだ。

直後火花が散る。

二人の刀がぶつかり合い、絡み、そして弾くようにして離れる。ちらりと斬鋼刀に目をやるがもちろん刃こぼれなどない。

長安の偃月刀はわずかに欠けてしまったようで、憤怒の表情を浮かべていた。

（斬鋼刀を相手にして、一撃で折れなかっただけでもたいした刀なんだがな）

感心しつつも、穂純は次の攻撃を仕掛ける。

幾度も鐳音が響きその都度鐳に傷が増えていくが、刀身には刃こぼれは一切ない。

片や長安のほうはといえはすでに刃がぼろぼろになっていた。

ますます顔を真っ赤にさせてただひたすら力任せに突進してくる長安。

（そろそろか）

素早く取り出した棒手裏剣を、刀を持つ長安の手首に向けて投げつけた。

弾かれるのは計算済み。

偃月刀が外へとそれた一瞬、穂純は鉄扇を広げて長安の顔をめがけて投げつけた。

その刹那にわずかに動きがとまったところを逃さず、穂純は電光石火の早業で袈裟懸けに切りおろした。

鉄扇が落ちゆくさなかに現れた長安の顔は怒りのあまりどす黒くなっていた。

崩れ落ちかけつつも最後の足掻きとばかりに諸共の一撃を繰り出してくるところは敵ながらあっぱれといったところか。

もちろん穂純には長安となく黄泉路へと向かう気はないので、斬鋼刀の本領を発揮して打ち砕いたが。

最後の最後。桜花最高峰の鍛冶屋が鍛えた斬鋼刀が勝利をおさめた瞬間だった。

長安が完全に死出の旅へと立ったことを確認した穂純は、長安が使っていた偃月刀を検分した。

「やはりこれも斬鋼刀か」

少しばかり昔の作ではあるが、常一か深水のどちらかが鍛えた斬鋼刀だろう。どうやって手に入れたかは推して知るべし。彼らは海賊なのだから。

大きく息を吐き出したところで、下へ行っていた者たちが戻ってきた。

「桜様、下にはもう誰も残っていませんでした」

「そうか。ではこちらからも狼煙を上げるとするか」

「かしこまりました」

長安との戦闘のさなかに、他の二隻から狼煙が上がったことには音で気づいていた。

あとのことを翼団のものに任せた穂純は、雀鷹が向かった戦艦へと目をやった。

甲板の上には穂純を見つめる木槿と雀鷹の姿。

ふと、思う。

外からの略奪者はおそらくこれが最後だろう。

ここ以外の自然島は消えた。つまりは今ここにいない者たちは、自然の島を求めずとももうそこで暮らしていける者たちばかりだということだ。

これから先は外からの攻撃ではなく、内側で起こる諍いに備えなくてはならないだろう、と穂純は思う。

要塞島は要塞の役目を終えて、徐々に人が暮らすただの島となっていくだろう。

そうした中で竜王の総領としての穂純の役割とはいったいなんだろう。

瞑目して、一度深呼吸をする。

再び目を開けた穂純の視線は迷わず木槿を捕らえた。

そこに答えがあるような気がした。

13話 甘えと恐怖

蔓穂たちのこともあり穂純と木槿は先に桜花へと戻ることになった。

待つていれば軍艦橘花も軍艦桜花も敵廃船を曳航^{えいこう}するためにやってくるが、その間待つていてもなにもすることがない。だからこういうことは早めに片づけたいと思う穂純の気持ち優先された。

「それじゃ、あとは頼んだ」

穂純が雀鷹へと別れの挨拶をするように手をあげたが、雀鷹は一緒に往くと返した。

「は？ なんてだ」

「橘花には就任の挨拶すらなかった立葵だが、桜花の先代頭領には違いなかったのだろう。桜花の先代頭領が殺されてその容疑者が捕えられたというのなら、橘花の頭領としては結果を見届ける必要がある」

雀鷹のこの言葉を聞いた木槿が思わずといった感じで声をあげた。
「就任の挨拶というものが必要だったのですか？」

もちろんだというように雀鷹はうなずいた。

「橘花翼団員はほかの要塞島や大陸へ派遣されることが多いから、頭領に就任すればすべての代表者のもとへ挨拶に行く。もっとも桜花へも頭領が替わるたびにその旨の書状を送ったが立葵はすべて無視したから長い間公式では桜花へ来ていない」

苦く笑った雀鷹はさらに続けた。

「いっぽう桜花は武器の島だ。だから最大の顧客である橘花翼団にだけは挨拶に来るのが通例となっている。もちろんこれは頭領の就任に関しての話で、桜花の当代島長である深水殿はきちんと挨拶に来られていたぞ。言うまでもないが橘花だけでなく、猿島や友ヶ島の島長のもとへも、だ」

呼び起こした記憶を懐かしんでいるような表情で雀鷹がつばやい

た。

「あの方は礼儀正しく、腕も確かなすばらしい鍛冶屋だ」

心からそう思っているのだとよくわかる声音に、穂純と木槿は己がほめられた時のように喜んだ。それもまた深水の人柄ゆえだった。まあとりあえず、と穂純が締め言葉の口にした。

「要するに頭領がらみの事件だから、立会人として自分を連れていけど、そういうことだな」

「ええ、そうよ。さすがは桜様あ」

そう言って雀鷹は穂純の腕に抱きつき豊満な胸を押し付けた。突然態度が変わった雀鷹の様子に木槿はぎよつとしたように後退った。

穂純のほうはまたかというようにあきれ顔だったが。

肺が空になるのではと思うほどに穂純は大きく息を吐き出した。

「おまえ……いいかげん下手な演技はやめろ」

ちらりと後方を一瞥した穂純は、再び雀鷹へと視線を戻した。

「男にそれは無意味だぞ。むしろどちらかというと逆効果だ」

「あらん。桜様、それはどういう意味ですの」

「……男の気を惹きたければ、惹きつけたい本人に対してやれ」
どこか甘やかさが混じっていた雀鷹の笑顔が一転する。嘲りとも取れるような甘さがかけらもない細められた目。両端を持ち上げられて弧を描いた口元も同様。莫迦にしているようであり、ほめてくれるようでもある。なんとも形容しがたい表情だった。

「桜様も少しはそうした機微が理解できるようになりましたのね」

そう言って雀鷹は穂純の腕をぎゅっと抱きしめていた腕をそっとほだいて体を離れた。

「いや、おまえの演技が下手すぎるからだ」

「あら、それじゃあどちらが先に相手をものにできるか競争ですわ」
それだけを言い残して雀鷹は先に鯨へと乗り込んだ。

穂純は雀鷹を見送ったあと、再び後方へ視線を向けた。こちらを見ていた青年にいくつと雀鷹が消えたほうへ顎をしゃくって行けと

命ずる。

青年は苦笑しながらうなずいた。

穂純は頭を掻きながらぼつりとこぼした。

「勝負になんかならないって……」

ため息をついて肩を落とした穂純は一度深呼吸をする。

パシンと両手で軽く頬をはたいて、穂純は木槿へと顔を向けた。

「とりあえず桜花へ戻るぞ」

二人は先に行った雀鷹を追いかけるように足早に向かった。

穂純たち一行はそれぞれの鯨や海豚に乗り込み桜花を目指した。

途中戦闘がおこなわれて海面がまだ赤く染まった海域に差し掛かった際は迂回することとなった。自分たちがおこなったことはいえわざわざ屍累々のさなかを突っ切って行くほど悪趣味ではない。そうして通り過ぎようとしていると大きな水音が響いた。

もしや生き残りでもいたのだろうか、みんなの視線がいつせいに音がした方向へと向けられた。

海面から突き出した特徴的な背びれ。

穂純は驚いたように軽く目を見開いた。

「鯨か」

「かなりの血が流れたからね。当然匂いを嗅ぎつけてこのあたりまでやってくるものもあるだろう」

雀鷹は当然というようにうなずいた。

海豚も何頭か餌食になったようだ。結構な数の背びれが時折姿を現しては大きな水音を立てている。

「まあ鯨が鯨を襲うことはないからね。特にこれだけの餌があるんだ。わざわざこちらから出向いたりしなければ襲われることもないだろう」

そういつて雀鷹が先を促した。

その時こちらに気づいたらしい一頭がふらりと近づいてきた。

鯨の背びれが向かう先を目で追っていた穂純が息を呑む。

この場で一人だけ海豚に乗ったものがいたのだ。

「木槿ッ、こっちに乗り移れ！」

穂純は鯨を反転させて木槿のもとへと向かったが、すでに鯨は大口を開けて木槿の足へと襲い掛かっていた。

「木槿！」

舌打ちとともに投げつけた穂純の棒手裏剣と木槿の足蹴りが鯨の左右の目を直撃したのはほぼ同時だった。

鯨が痛みに悶えているあいだに、穂純は木槿の腕を引っ張って鯨の上に持ち上げた。

穂純は木槿に足に怪我がないか自分の目でも確認しつつ本人にも尋ねた。

「怪我は？ 痛いところはないか？」

危機一髪で難を免れた安堵からか、ほっと吐息をもらしながら木槿が大丈夫と答えると、穂純は反射的に木槿の体をひしと掻き抱いていた。

「よかったー」

言いながら穂純が肩の力を抜くと、バシヤリと大きな水音がした。慌ててそちらを見やれば、身軽になった木槿の海豚が尾びれで鯨を叩いて追い払ったところだった。

くすりと笑声がこぼれる。穂純は目を細めて海豚を見やった。

「主人に似てお転婆だが優秀な従者だな」

当の海豚といえば、鯨は鯨でもここにいる人に従っている鯨は自分を襲うことはないと理解したようで、ちょうど鯨に囲まれた真ん中に移動して身の安全を確保した。

そうした様子をずっと目で追っていた穂純は笑いこぼれた。

「たいしたものだ」

ひゅいと指笛で鯨に合図を送って再び走り始めた穂純たち一行だったが、その間穂純はずっと木槿を抱きしめたままだった。

これが後ろ向きに抱いているのであれば鯨から落ちないようにかいろいろ言い訳もなくはなかったが、正面を向き合っているこの状

態はさすがにそろそろ変だと気づいた木槿が居心地悪そうに身じろぎをした。

「ねえ、穂純。私は本当に大丈夫だからそろそろ離してくれない？」
そっと恥ずかしそうに懇願するように囁く木槿の声は、なぜか穂純を切なくさせた。

目をつぶったまま穂純はさらにギュツと木槿を抱きしめる腕を強めた。穂純が周囲を目で確認しなくとも、鯨には前について行くように指示をしているし、時折感じる雀鷹の視線が彼らからはぐれていないことを穂純に教えていた。

「もう少し、このままで」

秘め事を伝えるように耳元の囁きで懇願すればあきらめたように木槿は抵抗をやめた。それがうれしくてつい擦り寄るように頬を寄せてしまった。

ピクリとおびえるように震えた肩に、逃げられまいとする本能が反射的に抱きしめる力を強めた。

「い、痛い……」

とうとう木槿の口から泣き言がもれた。

すると前方から穂純へ向けて紙扇子が飛んできた。

誰の仕業かわかっている穂純はそれをいやそうに手で受け止めて目を開いた。

「桜様、さすがに暴力は駄目よ。女性の体は壊れ物なんだから優しくね！」

「おまえがそれを言うのか」

竜王四島、そして大陸竜。ここに集う大勢の人間の中で一番強いのは翼団の頭領である。つまりは穂純よりも雀鷹のほうが総合力では勝っている。

握力や腕力等の個々の力は確かに男のほうがもとの性質上力が強いのは当たり前だが、戦闘力ともいえる総合力では女性であっても雀鷹のほうが上だった。それだけ女の身で翼団頭領の地位まで登り詰めた雀鷹の努力が並大抵ではなかったともいえるが。

「こんな私だからこそ言えるのよ」

雀鷹の切り返しに、しばらくのあいだ意味を探るべくずっと雀鷹の瞳を睨みつけていた穂純は、やがて力を抜いて木槿からわずかに体を離れた。

「これでいいか？」

穂純が問うたのは、当の木槿ではなく雀鷹にだった。

にっと笑んで前に向き直った雀鷹。つまりは目こぼしをもらえたということに他ならない。

これに対して一気に不機嫌になったのは木槿だった。

「ねえ穂純。当事者である私の意見は聞いてもらえないの？」

ちらりと覗き見れば、木槿は口をわずかに尖らせるようにしているかにも拗ねたような表情をしていた。

穂純は軽く息を吐きながらそっと木槿を抱き寄せる。

今度は木槿も穂純の胸に手を置いてそれ以上抱き寄せられないように逆らった。

穂純は木槿の耳へと口を寄せるとそっと囁いた。

「あまりかわいい顔はするな。無理やりにも手に入れてしまったくなる」

ぎよつとしたようにわずかに強張った顔をあげて穂純を見返す木槿。そんな木槿に穂純は再び懇願した。

「桜花につくまでこのままじっとしててくれ」

そう言いながら木槿の肩に額を乗せた穂純は、返事も聞かずに目を閉じた。言葉はなくとも押し返す腕の力が緩んだだけでじゅうぶんだったから。

戦艦桜花まで戻った穂純たちは、まず見張り台のそばにある伝声管のもとへ向かった。

密と補佐の青年に軽く挨拶を済ませた穂純は伝声管の蓋を開けた。「仙翁、ここまでご苦労だった」

応えはすぐにあった。

「桜様もご無事でなによりです」

「翼団の者たちが派手にやってくれたからな」

穂純はくつりと笑った。

実際彼らの応援があつたから、ここまで早く片が付いたといえよう。戦局を見て戦艦橘花そのものよりも先陣の切り込みをかける人員を増やしたほうがいいと判断した翼団副頭領の命により、鯨に乗った大勢の団員が派遣されたことが雌雄を決する大きな決め手となったことは否めない。もちろん桜花からも密の補佐をしている青年の助言でいくらか海豚部隊が出陣していたが、橘花ほどの成果はあげられなかった。

「それでこれからどうなさいますか」

狼煙に呼ばれてここまで来たものの、仙翁をはじめとして桜花のものはまだなにも聞かされていなかった。

「敵旗艦を桜花のものとして振り分けられた。それぞれの働きに依じての配分で、残りの二隻は橘花の取り分となった」

それだけで仙翁には通じたようだ。

「その敵旗艦をこの桜花で曳航していくというわけですね」

そして問題の艦の大きさなどを穂純が伝えて行くと。

「それだけの大きさですと、桜花だけでは難しいかもしれません」

仙翁だけでなく伝令使の青年に木槿と密、そして一緒についてきた雀鷹たちの助言も含めて話し合った結果、最初は桜花を引き船として使つて曳航していき、大陸が近づいて細かい位置調整が必要になったら集められるだけ集めた海豚と鯨を使うことになった。

あとのことは仙翁と伝令使の青年、そして数人の花団員に任せて穂純たちは留置場に入牢されている蔓穂と竜胆のもとへ向かった。

別々の個室に入れられている蔓穂と竜胆だったが、穂純たちの姿を鉄格子越しに見つけるとどちらもすぐに椅子から立ち上がって立礼した。

まずは礼をとかせて二人の顔をあげさせた穂純は、この場に同席

した翼団頭領の雀鷹と団員の青年——小鷲^{こじゆ}を紹介した。

「ことが先代頭領立葵の殺害ということで、翼団の頭領も同席することになった。立会人と考えればいい」

簡単な紹介だけを済ませて、穂純は本題にはいった。

「さて、蔓穂。先代頭領立葵を弑したのはおまえか？」

実にまっすぐな質問だった。

しかしいまだに腹芸などには慣れない穂純にはこれが精一杯ともいえた。穂純はただ感情的にならないように、また表には出さないようにとそれだけに注意を払った。

そんな状況でも蔓穂は特になにを逆らうでもなく素直に口を開いた。ただ一言「はい」と。

息を呑む密をよそに、穂純はさらに問いを重ねる。

「理由は」

「正当防衛です」

「それはどういう状況で」

「いきなり襲い掛かられました」

「だがおまえは立葵の情婦だったのだろうか？」

いつものように着物を脱いで足を開けばいいだけのことだろうと穂純が返せば、それまで淡々と答えていた蔓穂の声が初めて途切れた。なにかを言おうとはしているようだが、のどにつかえたように言葉が出てこず、ただ震えるように無意味に口を開閉するだけだった。

「どうした」

穂純の追及に口をはさんだのは密だった。

「おい、いくらなんでもそんな言い方はないだろう！」

穂純はちらりと密を一瞥したが、ただそれだけだった。相手にしていちいち説明するのは時間の無駄だと思ったからだ。

改めて蔓穂に視線を戻した穂純は冷たく言い放った。

「蔓穂、着物をすべて脱げ」

これには木槿も声を上げる。

「ちょっといくらなんでも姉さんを侮辱し過ぎよ！ そんなことをしなくても認めているじゃない！」

木槿がさらに言いつのろうとしたところで穂純は腕をあげた。

すると雀鷹と小鷺が素早く移動して木槿と密の声と視界を封じた。「おまえたちはしばらく黙っていてくれ」

むしろ蔓穂の裸体を木槿と密に見せないために穂純はそうしたのだったが、それに加担した雀鷹と小鷺以外は誰も気づかなかった。

これが出会ってから間が無くなにも築けていない者と、三年付き合ってきた者との違いだった。そして頭領という地位にいる期間と経験の差でもあった。

「脱げ、蔓穂」

重ねて命じられ、蔓穂はとうとう観念したように震える指を帯へと伸ばした。

しゅるりと帯がほどける音が響く。その音によつて竜胆も状況がわかったのか穂純をなじる言葉を叫び始めたがそれはこの際無視した。

小鷺は密の背後から目と口を塞いでいる状態で自身も後ろを向いているので蔓穂の姿は見えない。

だから飾り布で装飾された着物をすべて脱いだ蔓穂の裸体をその瞳にとらえているのは穂純と雀鷹の二人だけだった。

「後ろを向け」

ここまできたらあきらめがついたのか蔓穂はおとなく従った。

穂純はちらりと雀鷹に視線を向ける。雀鷹がうなずき返したのを確認した穂純は牢番から受け取った鍵を使って扉を開けて中へと入った。

背を向けたままの蔓穂にそつと両手を肩の近くまで伸ばした直後、穂純は蔓穂からの裏拳打ちを喰らいかけた。だが一瞬の差で回避して蔓穂の両手首を拘束して壁に押さえつけることができた。

「……やれやれ。情婦とは体売って保護を求める者だろう。立葵に代わって今度は私がその役目を継いでやろうというのになぜ逆ら

う」

穂純はそう言って空いたほうの手指で、蔓穂の腹から胸、首筋へと指を滑らせた。

「いやっ」

とうとう蔓穂が小さく悲鳴をもらしてギュツと目をつぶった。

「どうした。蔓穂、おまえは情婦なのだろう?」

「違います!」

そう叫んだ蔓穂は、とうとう涙腺が決壊したようにぼろぼろと涙をこぼし始めた。

「ではなぜ情婦だと言いつらした」

「言いふらしてなんかいないっ。勝手にそう呼ばれるようになっただけッ」

「なにもなければ情婦などと呼ばれることもないだろう。実際立葵の寝室にはいれたのはおまえひとりだろう」

それはそうだけど、と蔓穂が言葉を途切れさす。

途切れた言葉の代わりというように、穂純は動きを止めていた指先を再び動かして首筋を撫でながら顔を近づけた。

「こうやって立葵の相手をしていたのだろう」

耳元に直接囁きかければ、蔓穂の膝から力が抜けて穂純に体を支えられるような形になった。

「違います。ただ調べたことを報告に行っていただけ。密偵であると知られないようにしろと言われて、命じられたとおりに深夜に報告に行っていただけ」

「あの日はなにを報告した? まあ深水のところに潜り込んでいたのだから私と深水の会話しかないだろうが」

「そう、です。桜様のことを報告したら突然狂ったように騒ぎ始めて襲い掛かってきたんです。それで反射的に鉄扇を、使って……っ」
その時のことを思い出したのか、蔓穂はふるふると震えだした。

14話 未来へ続く言葉（最終話）

「はい、よくできました」

これまでとは一転して優しい声音に変えた穂純が、褒めるようにあやすように蔓穂の背中を撫でさする。

驚いたように目を見開いた蔓穂に笑顔を見せた。

「わかったから、もういいよ」

自力ではいまだ立てない蔓穂を抱き上げた穂純は脱ぎ捨てた蔓穂の着物を拾って着せていった。

とりあえず人に見られても問題がない程度に着付け終わった穂純は、改めて蔓穂を抱きしめて赤子をあやすように優しく背中をたたいた。

そうしながら雀鷹たちに合図を送った。

雀鷹は木槿へ、小鷺は密へそれぞれおとなしくするように言うてゆつくりと拘束を解いた。

穂純はくいつと隣の牢を顎で指し。

「竜胆も出してやれ」

雀鷹に鍵を投げ渡した。

穂純は相変わらず蔓穂を抱きかかえたまま椅子に腰かけて背を撫でている。

雀鷹が竜胆に対して暴れないようにと命ずる声が聞こえたと思えばすぐに竜胆が姿を見せた。

穂純の腕の中でいまだ泣きじゃくる蔓穂。

竜胆は握りしめた拳を震わせた。許婚がこんな目にあわせたのだから反応としては正しいだろう。それでも我を忘れて叫んだり殴りかかったりしないので分別もあるといえる。

「どういふことなのか説明してくださいませんか」

怒りを無理やり抑えたせいで平坦になったと思われる声音で竜胆が穂純へ尋ねた。

穂純は心底あきれたように大きくため息をついた。

「花団もここまで落ちたか。どう思う、雀鷹」

竜胆の質問には答えずに、雀鷹へと問いかける穂純。けれど立場としては最上位が穂純でその次が雀鷹となる。以前穂純が言ったように気に入らないもしくは逆らったから、ただそれだけで人を殺めても罰せられない地位にいるのだ。求める答えを得たければここは我慢するしかないという程度のことはここにいる花団の誰もがしぶしながらも理解していただろう。

そんな彼らの心境を理解しておりながら、もったいぶるように雀鷹は皆の顔をゆつくりと見渡した。

「ああ、まったくくなってないね」

「そういうことだ。任せてもいいか？」

「仕方がない。二年間だけ面倒を見てやろう」

二人だけ——いや会話には参加していないもののじゅうぶんわかつているような顔をしている小鷺を入れれば三人だが——にしか通じない会話に密が切れた。

「さっきの竜胆の問いに答えろ！」

これだよ、と穂純はまた嘆息した。

「花団副頭領密。私が誰だか知っているだろう。翼団頭領と大事な話をしている最中に邪魔をするな」

もつとも、と口調を変えて穂純は続けた。

「こんな物言いは俺のほうが辛いから碎けさせてもらうが。——まず当代の花団は質が悪すぎる。篡奪者立葵がきちんと教育できなかったのは仕方ないが、密、おまえだけは多少副頭領としての教育を受けていたはずだろう。建前上のけじめもつけられないとは情けなさすぎる」

しかも直情的で感情の調節が下手すぎるので直すようにと忠告した。

次に穂純が名をあげたのは木槿だった。

「木槿はもともと飾りにするつもりだったせいかもしれないわべだ

けしか教わっていない。花団頭領としての知識と技量が足らなさすぎる。よって翼団頭領に二年間ついて頭領という立場について学んで来い」

話についてはある、と言って雀鷹を一瞥した。

雀鷹は目礼するにとどめた。

今度は穂純は竜胆へと顔を向けた。

「蔓穂に惚れている割には立葵の情婦だと信じていたようだな。それでよく俺をなじれたものだ」

そう穂純が軽く責めるような口調で苦情を言えば、竜胆はぽかんと口を開けて穂純を見返した。

「情婦じゃない……？」

「蔓穂の体はまだ男を知らない」

「なぜそんなことがわかるッ」

「だから確認するために蔓穂に裸になれと言ったんだろ。ちゃんと俺と雀鷹以外には見えないように気を付けただろ。しかもすぐにわかったから着物をかけてやろうとしたら蔓穂はいきなり攻撃してくるし」

まったく、と穂純は蔓穂の背中を撫でていた手で頭を搔いた。

蔓穂も驚いたように泣きぬれた顔をあげて穂純を見返していた。

「おまえたちも未熟すぎ。たとえ裸にされて羞恥に晒されていたとしても、俺が着物を拾った音や気配を聞き逃すようでは使い物にならない」

蔓穂と竜胆の二人も同じく翼団で鍛えてもらって来いと、穂純は静かに命令した。

「それで……立葵殺害の件は……」

竜胆としてはこちらの処理のほうが気になるらしい。今翼団預かりになるといったばかりだというのに理解していないようだ。

「今言ったようにおとがめなしだ。その頭の悪さも一緒に鍛えられて来い」

疲れたように穂純はそう言った。

「それで済むのか？」

そつと口を挟んできたのは密だった。

「ああ。竜王総領桜の命で篡奪者立葵は処刑された。そう正式に公表しろ」

ようやく落ち着いてきたらしい蔓穂を抱き上げたまま椅子から立った穂純は、竜胆の前まで行くとすつと蔓穂を差し出した。慌てて腕を出す竜胆に「落とすなよ」と告げて蔓穂を渡した。

いつまでもほかの男の腕の中では気持ちが悪く落ち着いたときに逆に恥ずかしさに襲われて別の意味で落ち込んでしまっただろう。

「それで穂純はどうするの？」

そう尋ねてきたのは木槿だった。

「俺はしばらく……二年ほど竜に行ってくる」

「なにをしに！？」

密と竜胆が口を揃えて声をあげた。花団のものとしてある意味当然の反応ではあったが。

「こここのところ恐竜の出現率が増えているのは知っているか？」

この問いは花団員に向けたものだが全員が見事に首を横に振った。

「……その辺もまあおいおい翼団に教育してもらおうとして。まあそういうわけで一度今現在竜の奥地がどうなっているのか調べてくる必要が出てきたわけだ」

「それって危ないのでしょうか？」

まだわずかに涙声ではあるがようやく蔓穂も思考が追いついてきたようだ。

立ち直りが早いのはいいことだと穂純は心の中でそつと微笑んだ。

「危険ではあるがこれは総領としての役目でもある」
「だから。」

穂純はまっすぐに木槿の瞳を見返した。

「二年後に帰ってきたら俺の子を産め」

何度目かの求婚は今までとは少し違っていた。

「『産んでくれ』じゃなくて『産め』なのね」

木槿はあきれたようにそれでいて楽しそうにそうつぶやいた。

穂純はそうやって楽しそうに笑う木槿の背を押して留置場を出ようとした。

「どこへ行く」

穂純を止めたのは密だった。ことあるごとに口を挟んでくる密に對して、ほとんど反射的に言っているのではないかと最近では穂純はそう思っている。

「詳細は雀鷹に聞いてくれ。俺は木槿と二人で大事な話がある」

誰一人異論は許さぬといった感じに冷たく言い放った穂純は、さつさと木槿を連れて軍艦桜花の船首へと向かった。

外に出ればすでに曳航の準備を終えて帰港しているさなかだった。気持ちの良い潮風が穂純と木槿の二人に絡み、そして後方へと流れていく。

そしてそこにはこそこそと隠れてはいいても隠れきれない出歯亀たちの気配がそこにあった。

小さくため息をついてずっと木槿の背後に移動した穂純は、背後から腕を回して木槿の体をそっと抱きしめた。それから身をかがめて耳元で告げる。

「木槿、俺の嫁になつてくれないか」

子を産めとは言っても嫁になれとは言ってなかったかもしれないと思つた穂純だったが、それは事実でこれが初めてのきちんとした求婚だった。

対する木槿は小さく体を震わせた。

「それ、は……」

「ん？」

「それは、お爺様に頼まれたから……？」

「……深水爺さんか」

がつくりと脱力した穂純は、木槿の肩に頭を預けた。

「ねえ……穂純？ どうなの……？」

いかにも不安そうな木槿の聞きかたに、穂純は一度きつく目を閉じて覚悟を決めると再び顔をあげた。

「それもあるけど、最初は違う。俺が木槿に一目惚れして木槿の両親に正式に結婚を申し込んだ。許可を得て晴れて許婚となった。それが始まり。爺様が……常一さんが俺に木槿をよろしく頼むといったのは俺がお前に惚れていると知っていたからだ」

振り返ろうとする木槿を抱きしめる力を強めて阻止した穂純は懇願するようにつぶやいた。

「頼むからこのままで」

「……顔を見てはだめなの？」

「だめ」

「どうして？」

勇気をもらうようにか、穂純はもう一度きゅつと一瞬だけ強く木槿を抱きしめた。

「俺は男だから。だから惚れた女に弱みを見せたくない。女はすべて見せて欲しいと願うようだけど、男のわがままとあきらめて弱っているときの顔は見ないでくれ」

これだけを言うだけで穂純は顔が火を噴きそうだと思った。きつと傍から見れば顔が赤くなっているのが丸わかりだろう。経験がないから余計に恥ずかしくて仕方がないと穂純は心の中で苦笑った。けれど今この瞬間は人生で最初で最後の大事な時だからこそ、穂純は羞恥と弱みを抱えながら言葉を――想いを伝えようとしていた。そして穂純は一度唇を湿らせてからゆっくりと口を開いた。

「好きだ、木槿。二年後に俺が竜から戻ってきたら、俺の嫁になって俺の子を産んでくれ」

「ねえ、どうして今じゃなくて二年後なの？」

「おまえまだ十六歳だろう。……爺様から十八歳になるまで手を出すなといわれているんだ」

「……えっと、それはどうして？」

「あ……、これは爺様が言った言葉だからな」

そう念押しした穂純は常一から言われた言葉を教えた。

『たしかに女性は初潮をむかえれば子を^な生すことができるようになります。しかしそれは母体となり母となる準備の一部ができたにすぎません。子を産み育てることは大変なことです。体だけでなく心の準備も整っていないものには子を産む資格はないのです。ですから体と心の両方が成長し母となる準備ができるまでは手を出してはなりません。最低でも十八歳になるまでは控えてください。そして同様に男性側も夫となり父となる覚悟とそれに伴う責任を果たせる足場を築くまでは、女性を抱く資格などないとお心得ください』

聞き終えた木槿は恥ずかしそうに頬を染めた。けれどもどこか嬉しそうにしているのはそれだけ大事にされ、同時に愛されていることがわかったからだろう。

「俺は三年ほど前に初めて橘花に行った」

竜王総領はたしかに先代からの指名制となっていたが、最終的に翼団頭領に認められないと公には名乗れないことになっている。それまでは秘された名だけの仮の総領といった感じた。そこまでしなければならぬほど多くの権力を与えられているのが竜王総領という地位だった。

「そしてなんとか総領と認められたからこそ桜花へと向かい、その途中で長安の手下がすでに入り込んでいることを知った」

そして今の状況となった。

「もう外から竜を奪いに来るものはいないだろう。あとは四島で生活しているものと狩人とで日々をつないでいくことになる」

そうした中で、果たして竜王総領のやるべきことはいったいなんだろう。穂純はそれを考えていた。

「基本的に四島を束ねているのは翼団員を派遣している翼団頭領であり、竜王総領はその翼団頭領から要請がなければすることなどない」

まっすぐ前を見つめた穂純の視界には大陸竜の姿が。その雄姿を見つめながら穂純はだからと続けた。

「竜の奥地を探索しながらもつと強くなる。花団頭領として立つおまえを支えられるくらいに」

抱きしめる穂純の腕にそつと添えられた木槿の手のぬくもりが愛しい。

聞かなくてもすでに答えはわかっていたが、それでもあえて問うた。

「それまで待つていてくれるか？」

するりと伸びてきた木槿の手が、穂純の頭を優しくなでる。

「ええ、待つているわ。好きよ、穂純。あなたが竜から帰ってきたらすぐに祝言をあげましょう。私もそれまでにちゃんと準備を整えておくから」

穂純が待ち望んだ答えがようやく聞けた瞬間だった。

その日は朝から慌ただしかった。

大人たちがあちらこちらで歓声をあげたり笑いあったり。

そんな大人の一人である笑顔満面の母親に連れられて、五歳の少年——桜は一棟の建物の中へと入っていく。そこは島長常一の息子夫婦が住んでいる家だった。

「お母様、どうしてここに？ 今日みんなどうしたの？」

「桜も島長の常一様はご存じでしょう？ あの方の二人目のお孫さんがお生まれになられたのよ。今度はお嬢さんですって。だから母様はお祝いに來たの。桜もおめでとうございますっていうのよ」

常一とは何度もあつていた桜は、母親に言われたとおりに挨拶し、頭を撫でられた。立派な竜王総領となるために普段は色々と厳しくされることが多い桜にとって、まれにこうやって褒めてもらえることがとてもうれしかった。

今日は自分もいい気分だと、桜も自然と笑顔がこぼれる。

そうして通された部屋には小さなお布団が敷かれていた。

「さあ、この子が真由良ちゃんよ。桜もこんにちはと挨拶なさい」

桜ははいと返事をして生まれて間もない赤子にこんにちはと照れ

ながらも笑顔で挨拶をした。

すると突然赤子が満面の笑みで桜に向けて手を伸ばして来た。

驚く桜に、あらあらと笑いながら母親が指を出してあげなさいと教える。

そつと人差し指を差し出せば、赤子にひっしと掴まれた。

嬉しそつに桜の手をつかんだまま腕を元気に振り回す赤子。そんな赤子を見ているうちに桜の心のどこかが暖かくなってきた。

「お母様。真由良をお嫁さんにしてもいい？」

母親はころころと笑いながら、それでも五歳の我が子に婚姻の申し入れ方を教えた。

ようやく赤子に指を開放してもらえた桜は、真由良の父親に面会の約束を取り付けて母親に教わったとおりに挨拶した。

同席していた常一が立会人となり正式に許婚として認められた桜はすぐに真由良のもとへと報告に向かった。しかしまだ生まれたばかりの赤子である真由良がそう長い間起きていられるわけもなくすでに眠り姫となっていた。

昼間桜の指を握りしめた小さな手は、今は緩く開いた状態で敷き布団の上。

桜はゆっくりとその手に人差し指で触れた。

息を呑む桜。

目を瞠つて桜は目の前の現実を見つめる。

ややあつて綻ぶようにとろけるような笑顔になった桜の視線の先では、未だ眠りのさなかにありながらしっかりと桜の指を握る真由良の小さな手があつた。

桜はそつと囁く。

「私がずつと守ってあげるから。守れるように強くなるから。だから真由良、私のお嫁さんになってください」

——お嫁さんになってください。

ふつと眠りの縁から目を覚ました穂純は、ついと横へ視線を向けた。

そこには初夜の疲れでぐっすりと寝入っている新妻木槿の姿があった。

目線を落とせば投げ出された木槿の手。

昔の記憶を呼び覚まされた穂純は、口元に笑みを浮かべてその掌にそつと指先で触れた。

ん、と呼気をもらした木槿はあの日と同じように穂純の手を軽く握ってきた。

穂純は木槿を起こさないように声を殺して笑う。

「木槿」

そつと、そつと。囁きよりもそつと。吐息の中に紛れ込ませて名を呼ぶ。

本当は真由良に花団員特有の名をつけるのは穂純であるはずだった。どんな名が真由良に似合うのかとずっと悩んでいたのに、いつのまにか立葵に「木槿」と名付けられてしまっていた。

最初に木槿の名を聞いたときに、思わずなにも知らない木槿の肩をつかんで問い質したい気持ちになった。

必死で自制した自分をあとで褒めたほどに大変だったと、そのことを思い出した穂純は小さく苦笑した。

けれども二度目の一目惚れとともに再開したあの日。

木槿はすでにその名とともに十六年も生きてきたのだと考えたとき、理由はどうあれ木槿という名を否定することは木槿が生きてきたこれまでの人生を否定することにつながると気づいて受け入れた。今では木槿は木槿でしかない。

真由良という名は、穂純の心の中にそつとしまいこんだまま。これから表に出すことはないだろう。

穂純は掴まれた指から木槿の寝顔へと視線を移した。

あの日のようにそつと宣言する。

「俺がずっと守っていくから。いつか生まれてくる赤子とともに
おまえたちを守るから」

——だからいつまでもずっとこのままで……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6333r/>

要塞島桜花

2011年7月9日03時25分発行